茶乃叢書

廿四

十

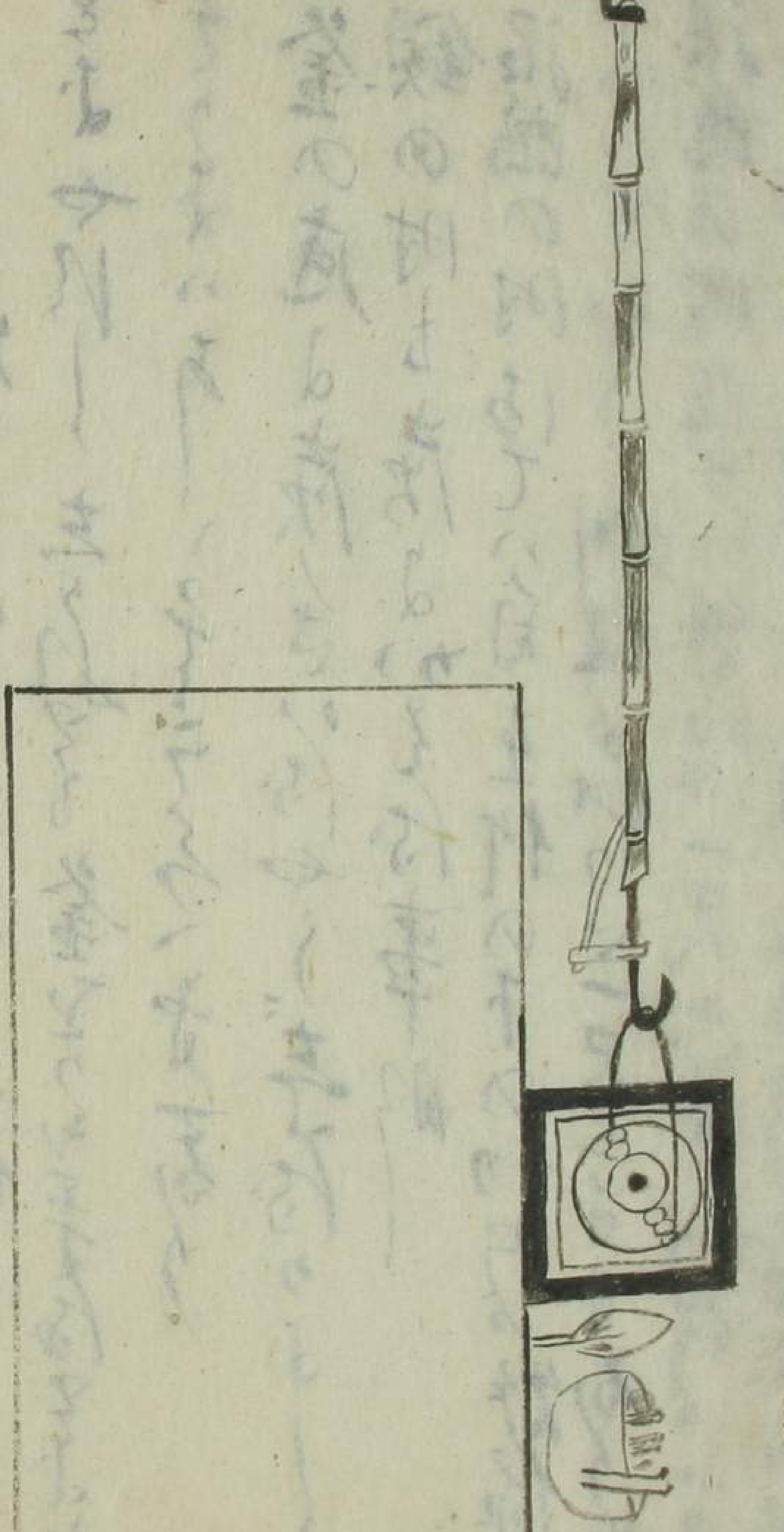
ヲ多9
674
24

一自在の炉に炭を置事ハ五徳ノ為ニ也ヿ
さよやうし共されとも釜をとり置て後に炭ノ
きりよハあしゝ手にて可置事なり
一釜の底に炭ノさハらぬやうに置候よし
一鎖の附も炭にかゝらぬ事肝要
一紹鴎の附候てハ自在竹の下の切口ゟ炉縁迄て
一尺六寸なり利休ハひきく一尺三寸になりたり
紹鴎の附候てハ炉縁ゟ一尺六寸 利休ゟ一尺四寸
になる候ゆへに自在の竹も四寸みしかく
一自在釜鎖釜ノ鐶ハみがき鐶よし
鉎（サビ）鐶もくるしからすたゝひちりめの鐶もよし

島田翰圖書

門 ヲ多 號 674 巻 1-27

かゝれ釜をはきても鎖やくりきを上とせ
ますせやしろく

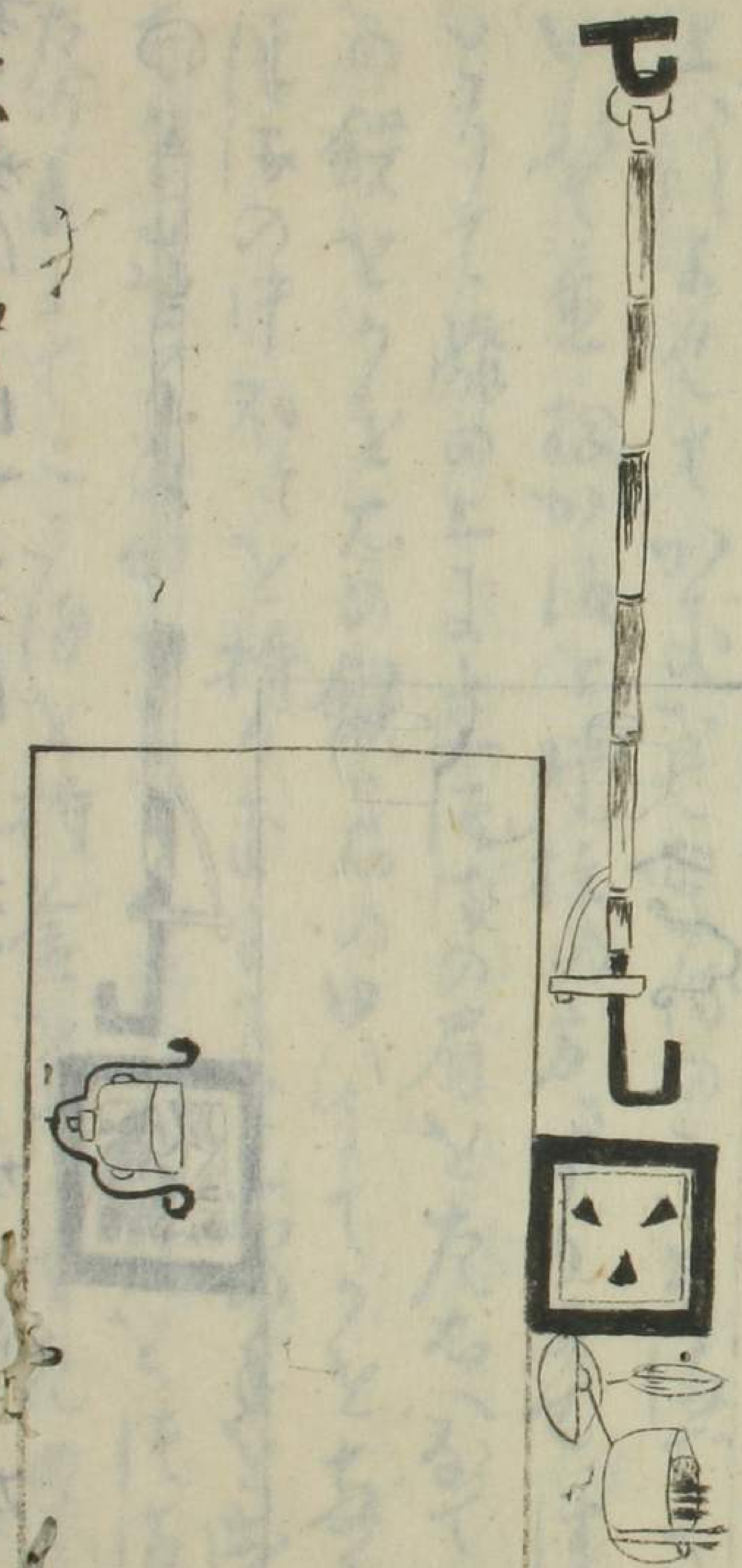


一炭の附茶道といつはる常にかはることなし

一炭入を持出扇ノちとくをよ居かへりてかろく
をれて少し扇ノちとく置て炭入ノ上ノ三羽を取
て扇のちとく　扱釜安をいさし扇のちとくとよて
炉縁へ左膝のかしらのかなたくよ取て左の手
まて釜の鉤の眉をもちたの手まて鉤のたの眉
をはさみて左の手をさけてかまをとる鉤の
うを大指と人さしゆひのまてかまの耳をはさみたノ
手をもちて人さしゆひを出さぬの向へつけて大
ゆひを訓りまて出さぬをはさみてかまを左
釜を上へはおのを炉ふち二寸あまり上り
たるをまたの手をさけて鉤のかへをはなし

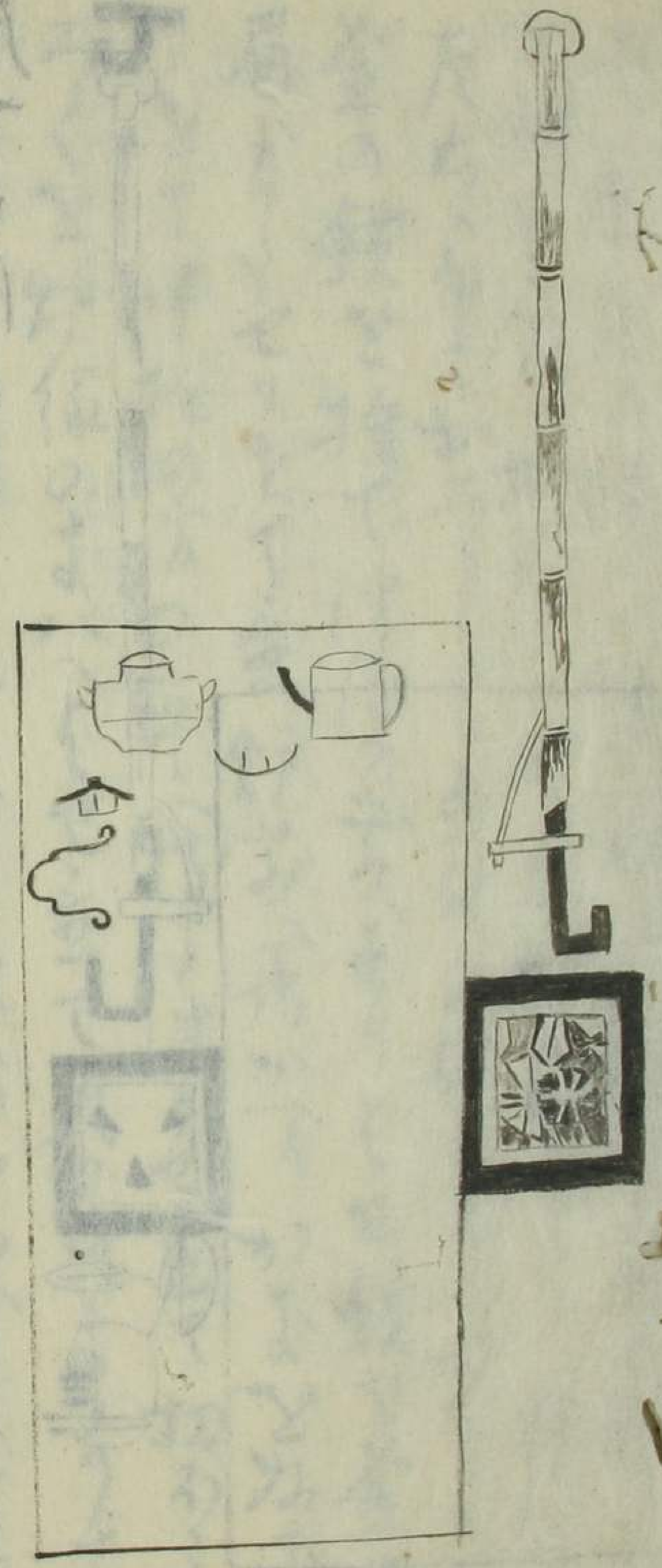
たのまゝりて羽の中 取ゝとおならたの〔虫損〕
て羽の中取ゝをとまおりて釜をおろして釜蒲し
上ハ釜一たの鐶ハはゞかゝりまつし たの鐶ハ左
を鐶のきハ おろして左にてもつし はゞを
たちくりて おろして 立付の竹ぎわりまぜをあて
釜の鐶を持て はゞの方へまわりならせ 鐶を釜の
眉かゝせりをて釜 炉の方へ羽かけ かまをぬき
りをて中柱の方の角へ杖をはりなせ釜て相かゝ
ろくを炉縁のきハへならせ釜て 火箸をとりて
下火をなをし 火箸を灰入のふちへわりならせ釜て
灰さしをとりて 灰をして 灰さし ものごとく

取ゝろくハ羽をかさねて 釜灰入を炉縁のきハよせ
灰をまはすべし



灰をしまひて香合ゑつるかたへはかまれし 火箸
しまひ置りを押はずさし 三羽作へ〔虫損〕

かきならし炭斗ろく縁まへいれて置口持
おてかまの水をさしすきまかきまはすかし



かまの口をゆひ蓋をしめてかまのかんをもふまて
片口の蓋をして蓋茶碗を片口の上にをおて

茶道口のきハへ茶をおて自在小口を右の手に
持たのみてかまの几きをとりちて炉の志
上へよせてかまをこさなのさてはてさし
いれて蓋取かまを中柱の方へすりよせ柄杓を
とりて膝の上に立柄杓の眉を左右へるてた
の鐶をとりを右の鐶ハ右のゆひにてうを当まて
柄杓の中ろを持りまうを右の手をおろし
てりまをとりのひらうをとりだの几を柄杓をて
左の手にてこさなを持釜をとりて左の手をハ
柄杓の中ろくおろし右の手をハ鐶のきハへ
おろしあてまて釜のゆりをかをそしもつめて

三羽をとりてこざなかまのはたをなでおろし
釻をとるよはたをたゝみおろしたのみ
またはかの中ろと持釜の蓋をとるよ縁か
どうで釜ハ縁をてよ三羽をとるよふくさ
をうし右の手ニ持たの手ニてはふとうち釜ノ
蓋をとりりきニ立事なり　はつもふくさと炉縁
のきをよのせしをよてかはのさえおとまるはつ
おて蓋をとりかきをふくますなもよし　柄三羽ニて
茶道口のさへんをよそうなすし
一沼鴫の時はてハ自在のかぎを拔まはりセ置ます
おし　やそりりきニ立てりぐよの釻を向の方へして

炭をせしすし　故ハはつ代迄てハ自在竹の下ノ
小口ふ炉縁迄を尺六寸なるゆへやそりりよをさし
のかせをおても炭のかゝるなしはなるり
利休たのゝ自在竹の小口ふ炉縁迄を尺三寸ニ
ありて炭を二歩附かはかゆゑまりぐよを拔まはり
せて立事し

自在竹

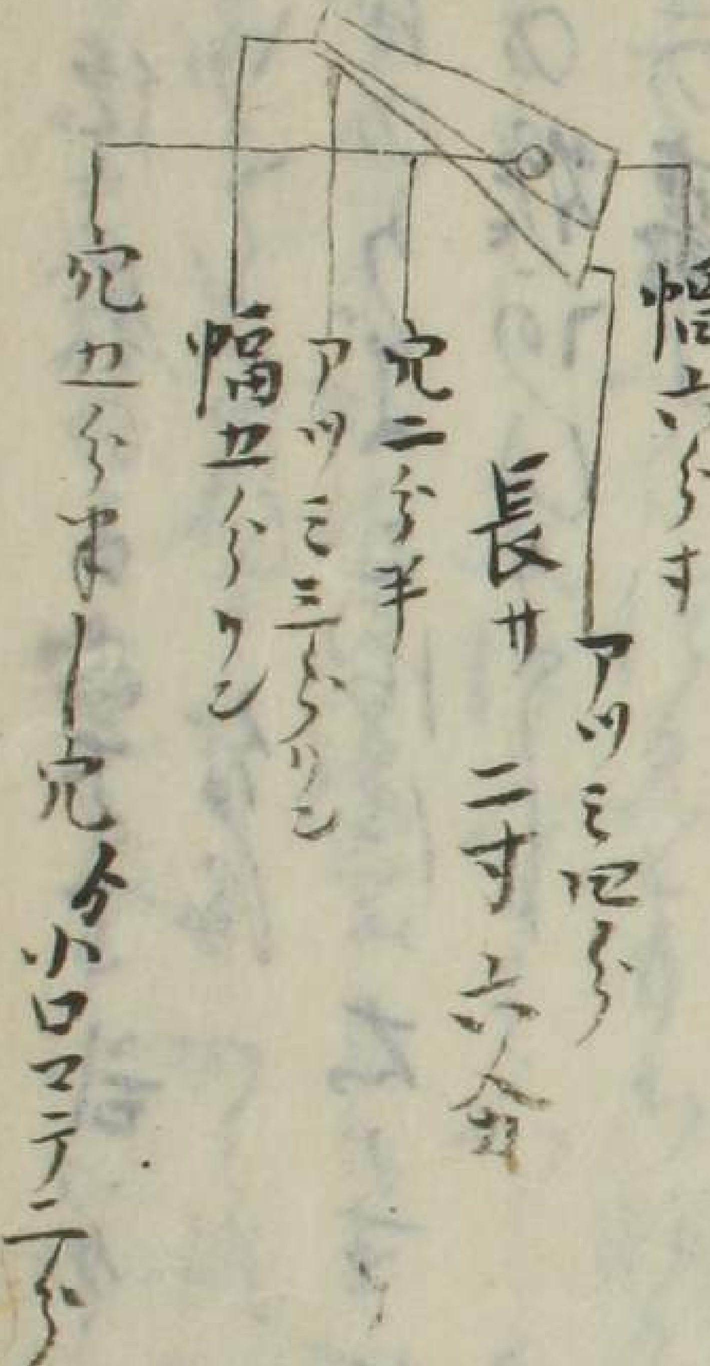
一竹の節とこハ下の切口まて一寸　三ノ節ハ一寸一分ま
迄て上の節とみハ下ノ寸か一分ま　おとつ竹の
ふしハ七ふしか五ふしり長短ハ間よそり次第し

かくれ炉縁竹の小口に当て一尺八三寸まにたるし
上ハ天井のさるすニ差込ふへし
上ノひさしは竹の切口の方七分ほと一寸九分ニ在し
りょ法の始さ三分ま　こさ法の法三分ま
下ノ切口より上ハ八分　こさ法の法付の穴ゟ切口迄
一寸七分竹の内ノ裏ゟ法をつくる
自在竹は定りたる寸法ゆへこゝに事ゆりその
法はおよひ天井のさるへまよ候へし

自在かぎ

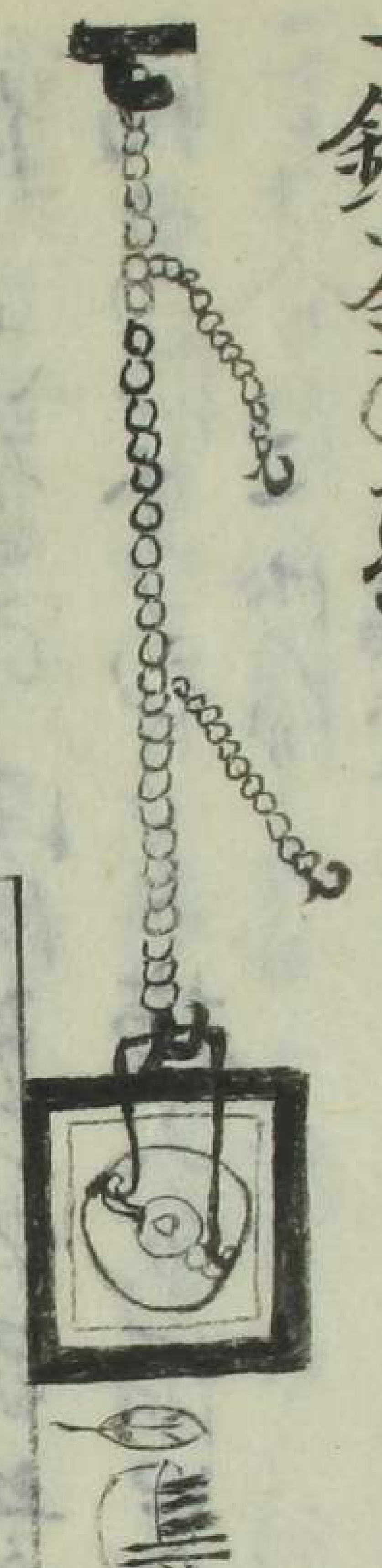
鳥ムチトイウ形モアリ

一長サ一尺九寸　上ノ方ニ四分　下ノ始メハ五分り
頭りのくゝりきて次第に始とし
凡ノ上ノ切ドメ横五分　幅四分
凡下さかりの法々すちの方五分かりに向て
頭りの下ノ初しを　横五分　幅四分　木いずみノ木
こけ原



近代　井筒かしの木
掛ヲモ

上下の緒ハ麻のよきを誂つがり式ハ三筋より
あわせてなひてよし
一中古のくさりハ太さ寸法分太かるなり
當世の鎖ハほそかるべし
一鎖釜の事



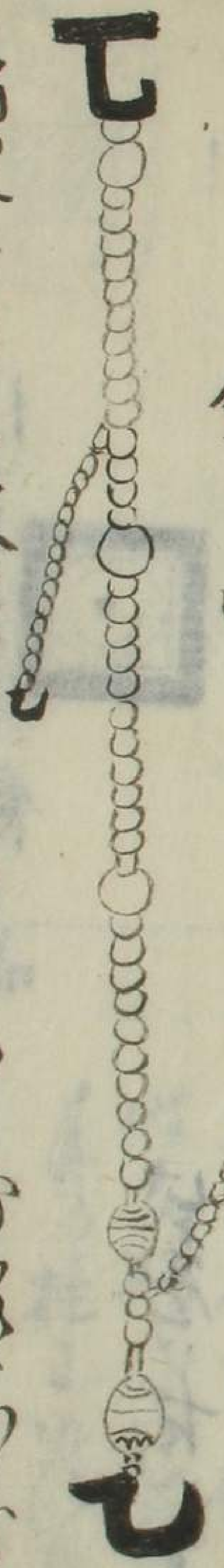
下の小ぐさりにて
釜のつる下げよ
すくよ持りさく
事も上の小ぐさり
までも持るある
も長短よるなし

鎖の炉ハ炭をつぐ時ハ炭斗を持出し羽のあつかひ
とおて炉縁のきハよりてたのひざを並べて
右の手にて釜のはりをもち左の手のそでにて鐶の
かねをのせて右の手にて小鐶をとりて釜を鎖
のかねにかけ上げ右の手をおろして釜のはりを持
左の手にてはりの釣りをとりて釜をつきて釜
敷の上におきてはりとりもちとりかんとすりよ
せはなし 又はりをはつして 亭主の前に
おいてせつて かんの鐶をとりて かんとすりまはり
事もあり いづれもよし かんは根かんハ後の羽の
あつかひなどし をおそ

炉の方へ張くりて頭を去人一三寸ありとはりつきて
頭のかまを向のかたへむきてをきて炭入の火箸
をすりて炉中の下火をなおして炭を炉ぶち
きわくよせて炭を直す事くこれ外に羽ほうき
ひきよく物ハ取る事常々かへなすへし

鎖ハ五尺なりき九尺五寸なり又一丈ほかにもあり鎖も
なり短キハ長キ鎖ゲかまへにてかへすよあまり
物を上のかりおまでおもしたぐりを下れ
かりおまで釜のはりつのひふなる所に上げ下げ
を自由にするためなりものなり

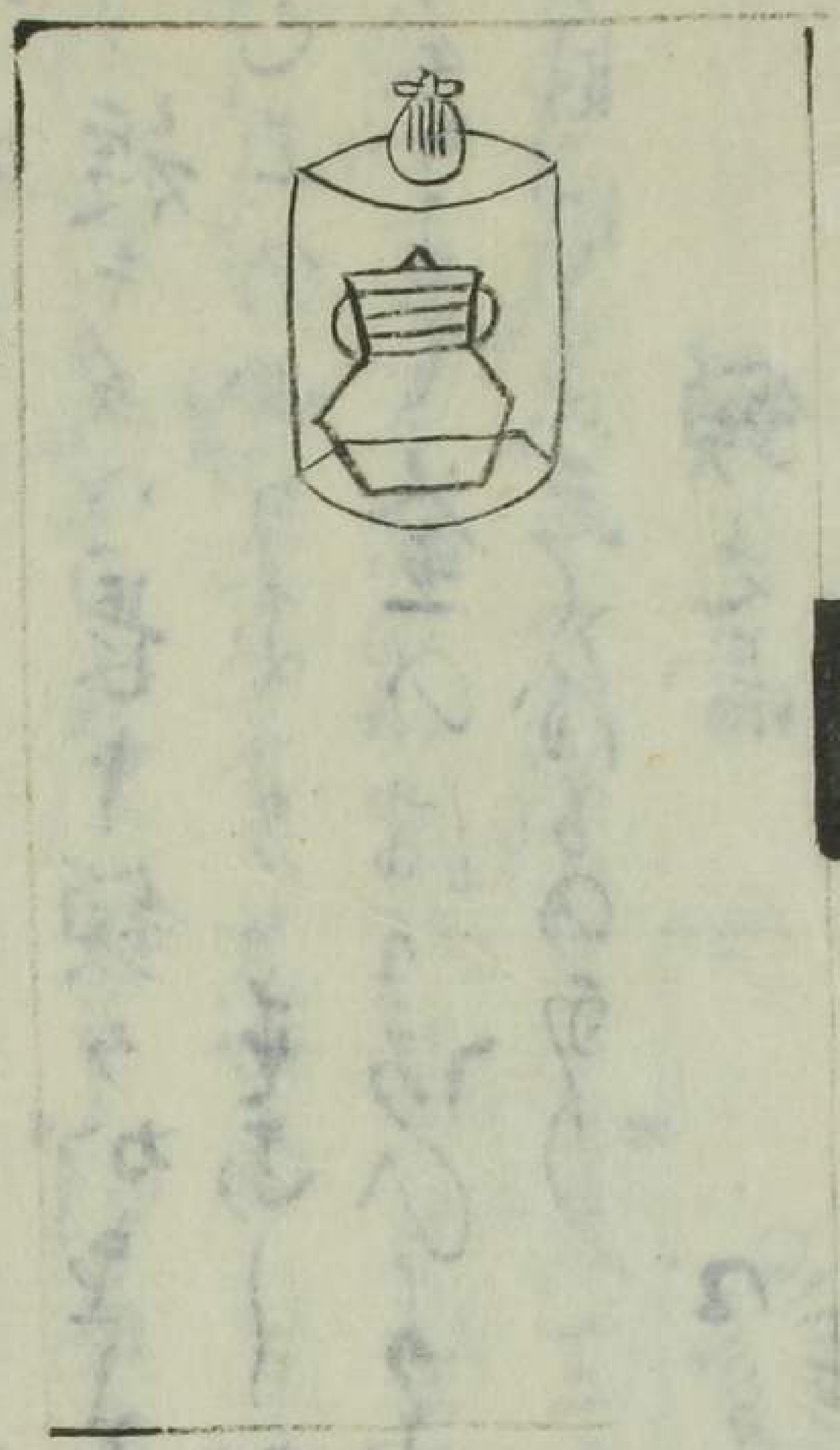
鎖之圖

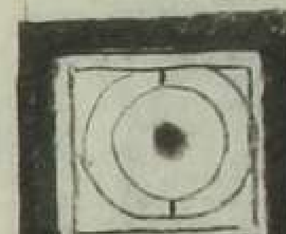


一 鎖釜自在釜にてきてめる形ハなるなけれ
とも大なる湯をたんにかけてあしハ悪し
後しかすなハ六寸七寸四五分湯ての釜を掛る

棚中の好みさもかはに應してかはの底か三寸ホト
にさすなりよし

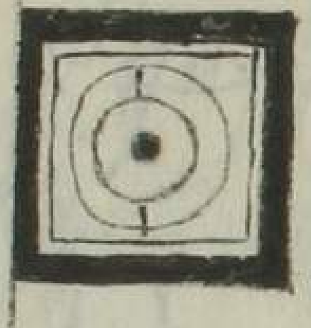
後ニ三尾餝ノ圖





此尾ハ古ハなよ
物あり近き頃
より物数寄
しなりのこ風炉に
も餝合せよし
ならず明もなよ

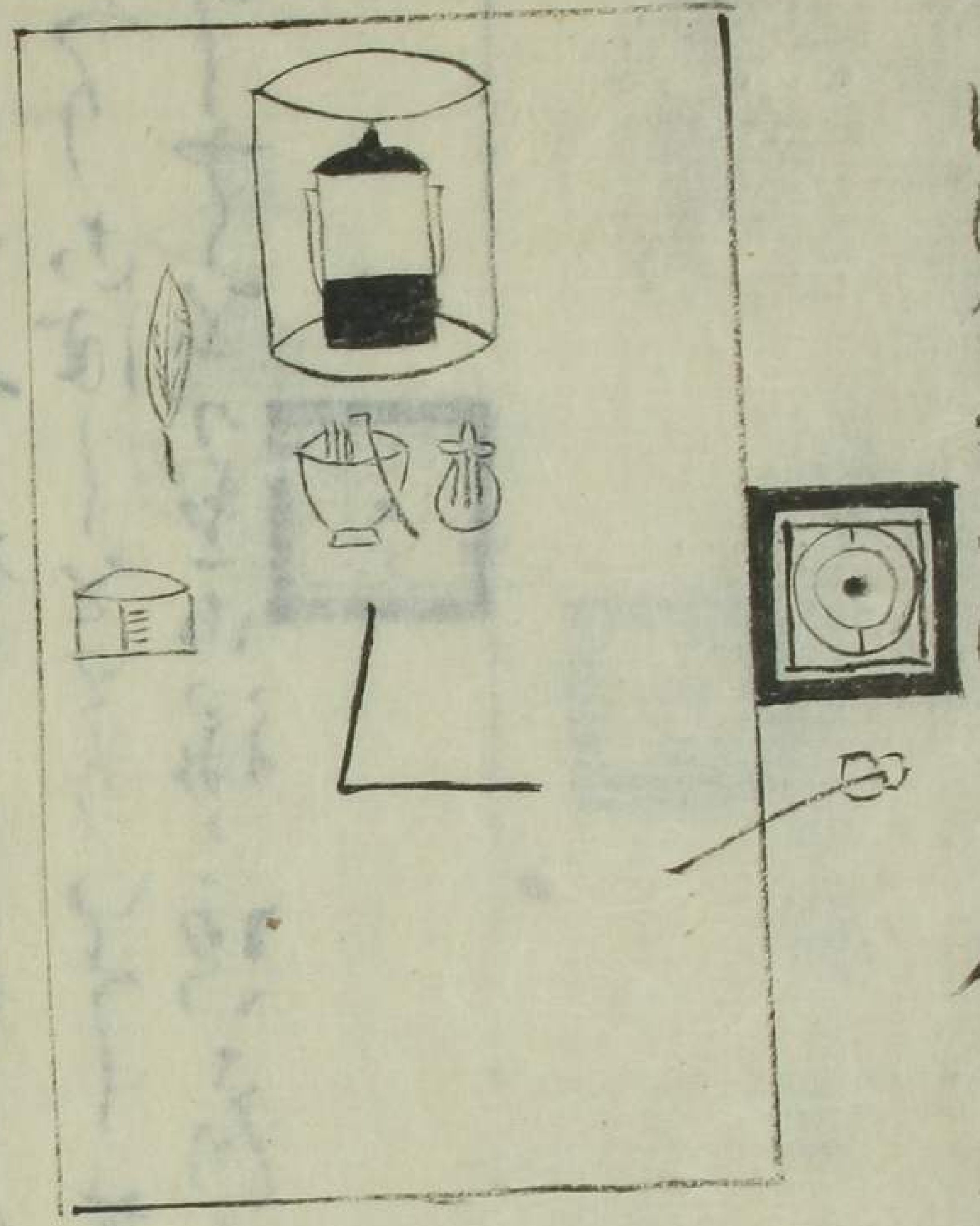
物あり圖ノ如く上に茶入一ツ餝トキハ茶碗
を持いでれ指の右の方に茶わ三目ホトノケテ置其
ノ後茶入れをおろして茶せんにみたいりて居
かへりおぼしをとりいて蓋置とあとして
引しすとくまは緑ノ所いさかりしてそれより書物としし



此圖ノ如く茶入
茶せん計ツ餝ル
時に好くさを持
其の柱にかけ
て重事有り
草ノ點前あり

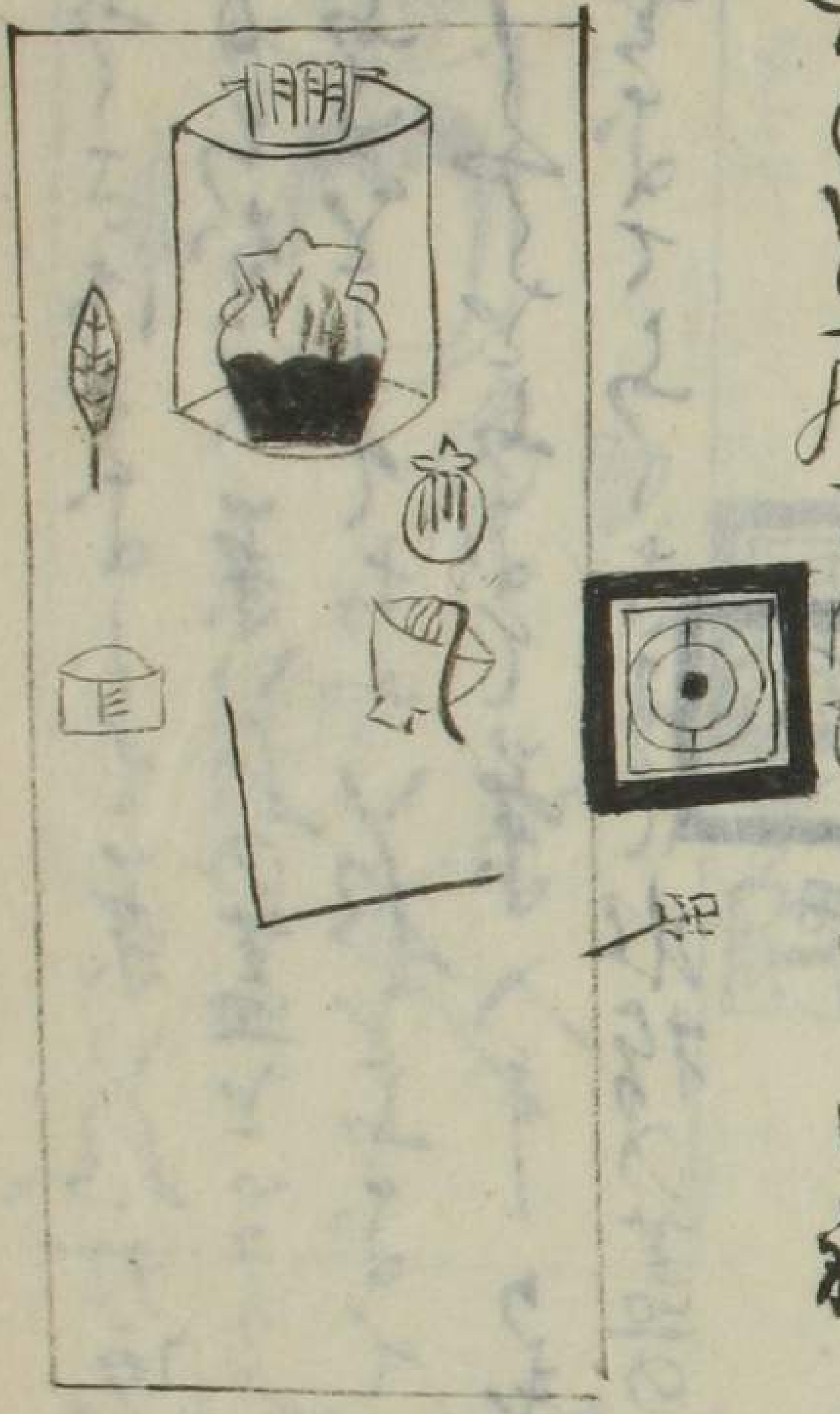
濃茶るいものは好ヨき
落ちやの時いたしかた流

柱にゆひ付、其外ハ餝ノ数にいらぬ事也



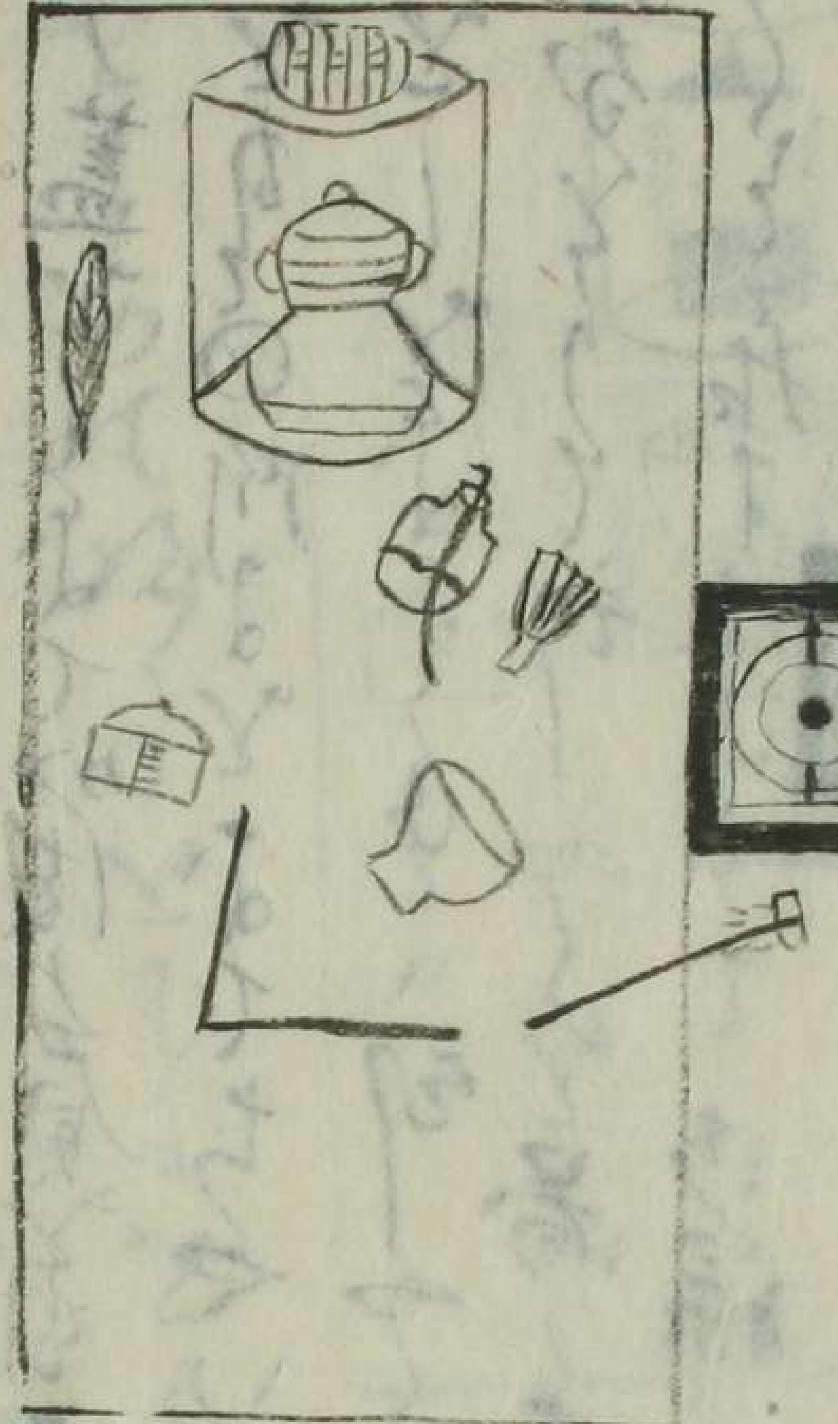
抹茶道口にて羽
をはらひ常ノごとく
茶道口にて明ては
ちやうつはへよ
こゝにてれはおかし
持いて爐のきはに
をおきて三羽をもち
炉へむかひて釜ノ
蓋をしめて坐さをとるまゝ又膝をはきて
炉ふちの向かたたをたなこのふちをなま

釜ノ蓋をとりて釜の肩をとり
羽をもちて所にてちやいれ茶入爐のきはく
なをしてそこにて引ちやくを蓋をおいて
爐なとりて引ちやくを爐のはたへおきて
うつしてほすなひして

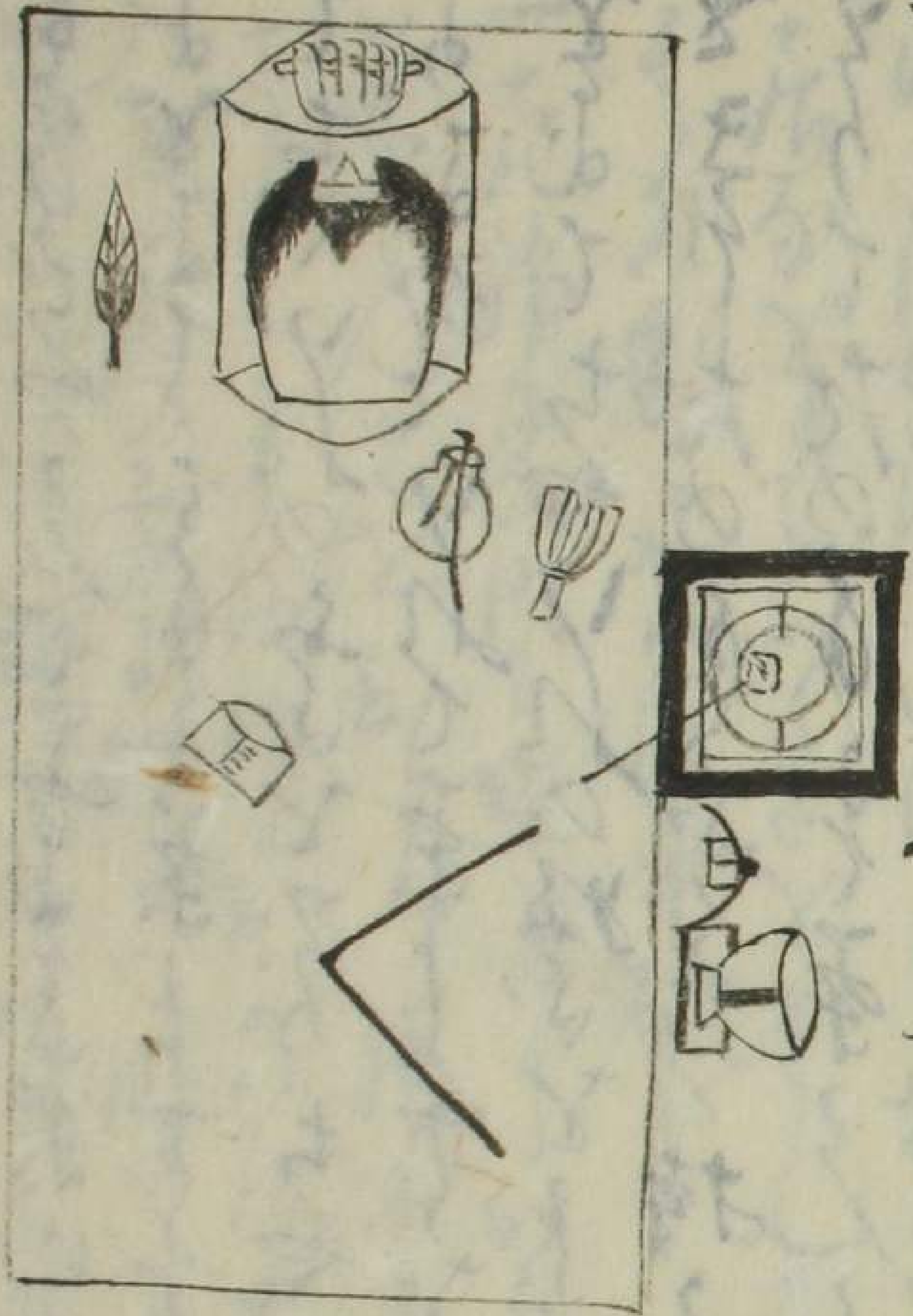


火箸ノ一礼して茶入ニ
茶入をとりて爐ノ
はこをおき袋をぬ
かせて爐のきはく
炭ノ上へ向を置
ふくされいたして

ふくさはさみして茶いれかけたのまにてふくさ
をもちながら茶いれの蓋をとりて内の茶を見て又
ふくさをしてちやいれをふきて湯わかしを見てちや
しやくをふきて茶入り の茶せん湯わかし
をふきてふくさをさばき水指の蓋の上をぬぐひて茶巾
を蓋の上におきて
引しやくをとりて
湯のふたをとり
蓋をおきて
茶わんを居置へ
よせて湯を汲て



茶わんにいれ引しやくをたの手へとりてかたの蓋をしめ
引しやくをふたとおきかきて右の手にちやせんを
とりて湯次第にしてちやせんを茶わんのふちにもたせ
をおきて右の手にちや巾をとりてよくしぼりて釜
の蓋の上におきて
右の手に茶わんを
とりてさいしよのとおり
もとの所におきて
茶わんをとり上
ちや巾をとりて
茶わんの湯をハ



まづちやわんをふきて茶巾をさいはしのうへ
におきて右の手に茶しやくをとり茶いれをとり
てちやいれのふたをとりちやをすくひて茶わん
におとしいれて茶しやくをちやわんのはちにを
きてちやいれのふたをしてもとの所におとし
おきて左の手にふくさを持て右の手に茶しやく
とりて左の手にて茶わんのふちをもちてすゝ
ぎふきて茶しやくにて茶をよくはきて茶
しやくをふきて茶入のふたをとりをきて右の手
ひしやくをとりて左の手にふくさにて釜の
ふたをとりて湯を入しとして後茶わんにいれて

ひしやくをとり湯をくみて茶せんをとりて湯に
又ひしやくをとりて湯をすくひ汲て茶碗に
いれて好み次第八分程をのみ候て好みをはかり
時は後の湯をいれ候ておよそ程加減の方へ
底あるまでふくさをきよみ候て茶碗を置候
そのほか別にかはり候事なし
一 左様の時も點茶すべし かはり候事なし 茶入の
茶わんをとるしかり 端手に錺候といふ説あり
さして手前は およそ左の手にて茶
入をは内の方に錺ル也 内といふは外の指の爪
を内といひて點茶の時をとる也 又若物の茶入の

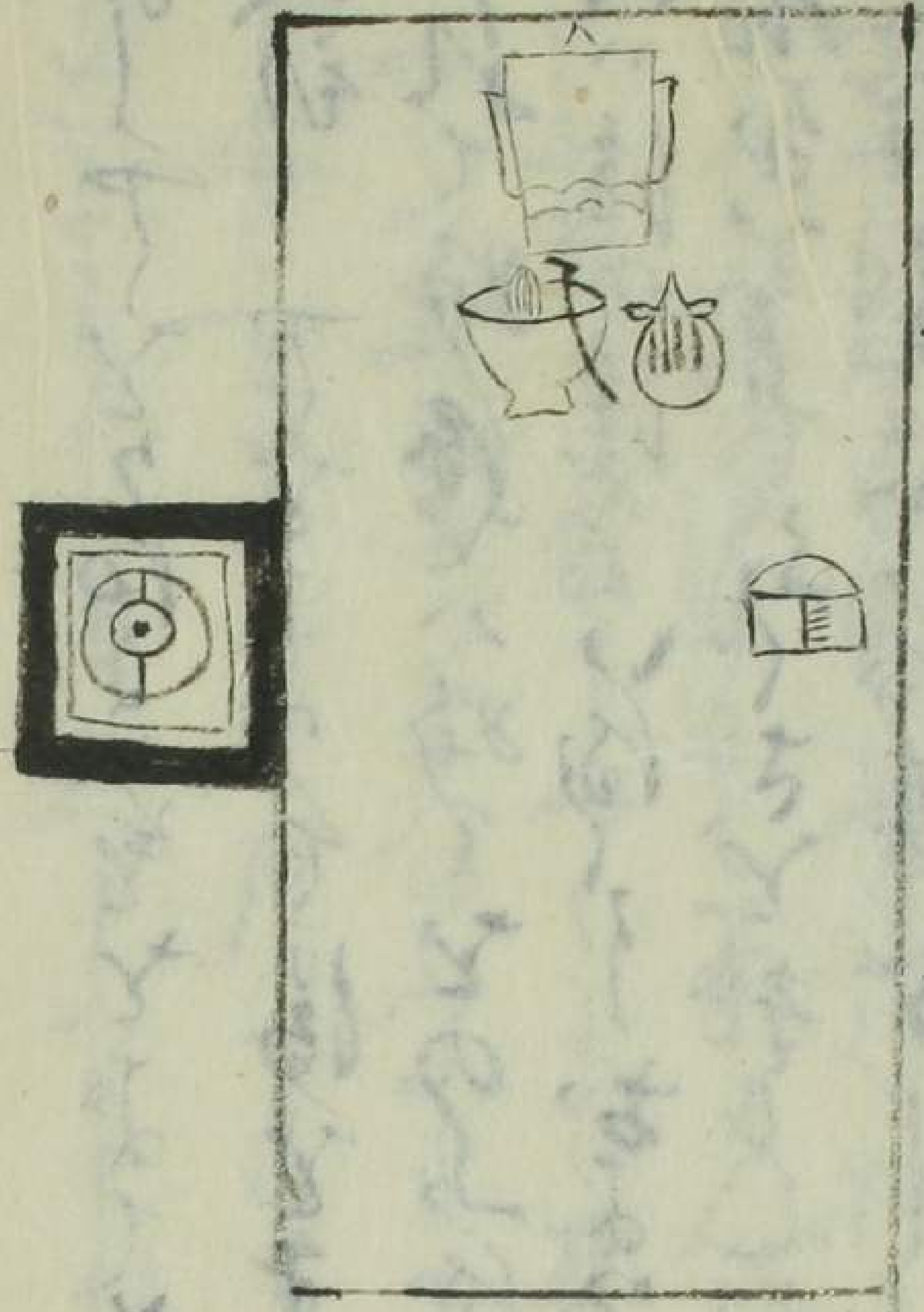
一 又よい餝ハ習なり

大續手ノ圖

此圖ノ如くに茶入を炉のかまへ餝ハこれを内

といふこれ指二尺ノ中に真の餝といふ炉の方へ

よせて餝物を草の餝といふ一衆まゐいてたゝみか



さりあり志中に

餝ハ大目かまへの

本式に記しやう

外記よ内記よと

いふ事何事とも

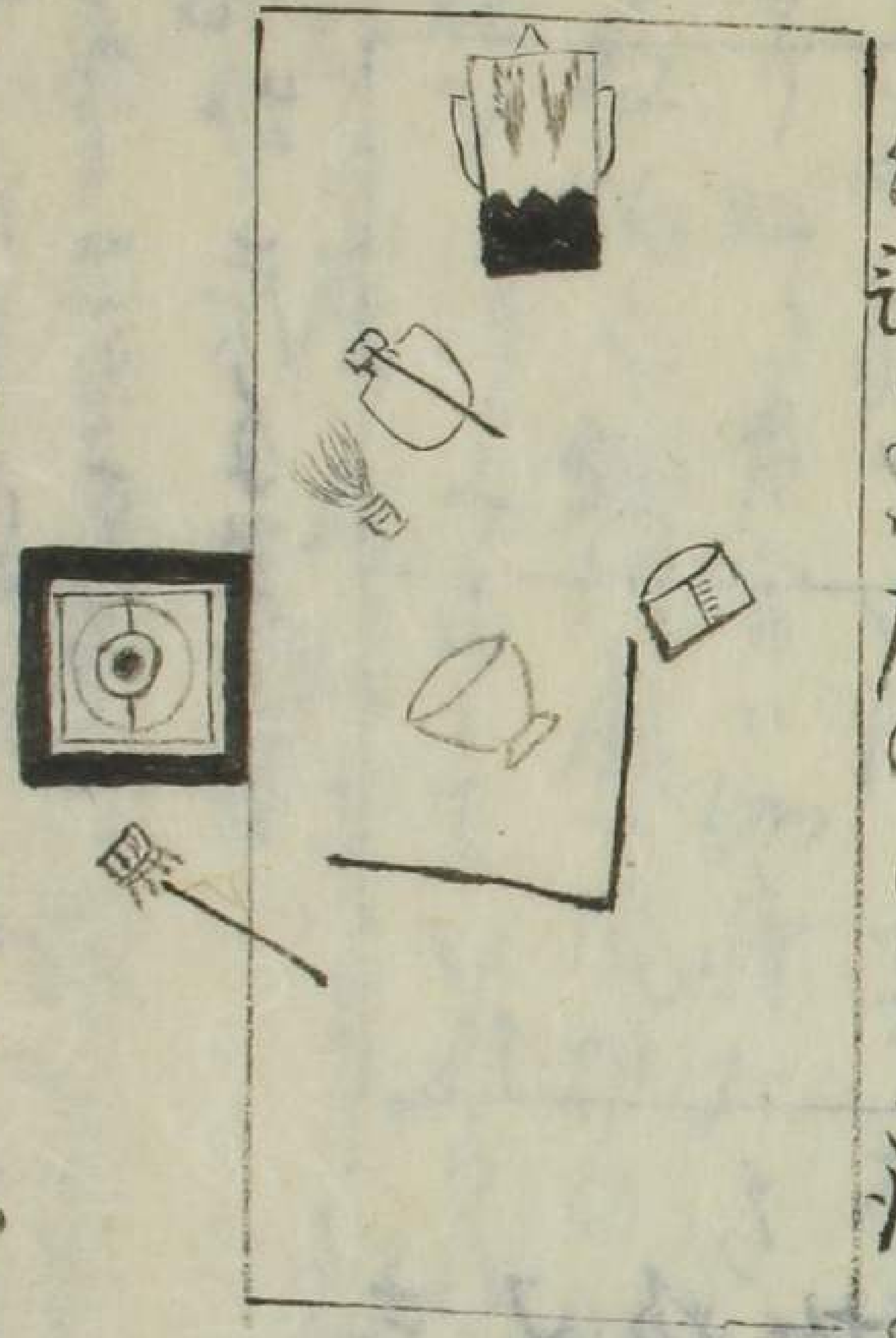
それぞれにいふれも

台子かざりされとも大續手の記しやくハいふそも

たのみにて是あかくまりよまゆへこれと逆續手の

記しやいふさ候まよりて外記ふまたすゝむが

あり外記よいたのみふくれよまゆへとて外別



るかまへ候事也

大續手とたり

有して點候法

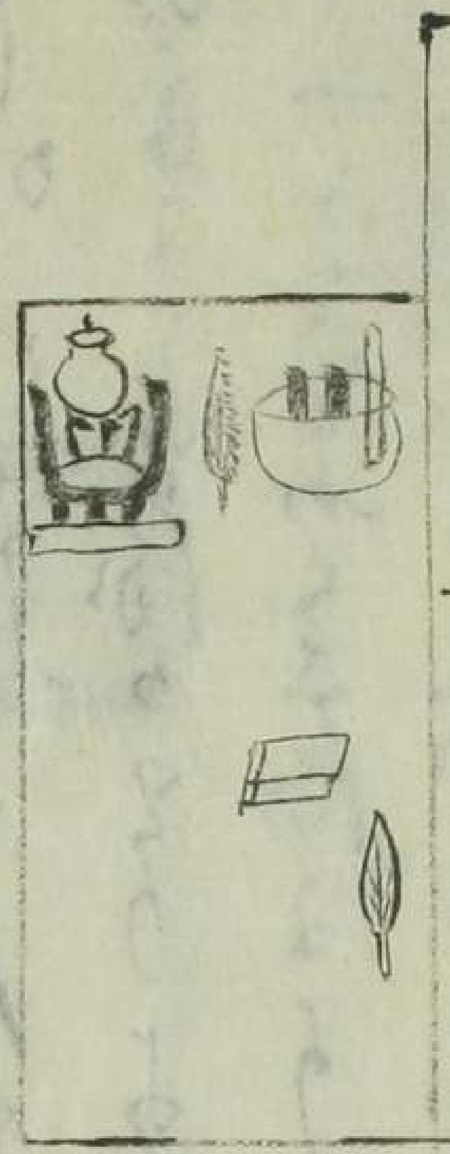
のまもこれ

此事とことを

いひあはせとも

是候ほるおよそんたいたの續手何候みの故たの

稽古にて道具さばきよくよく稽古に致すべき
ことしつる事候也
一風炉炭手前之事

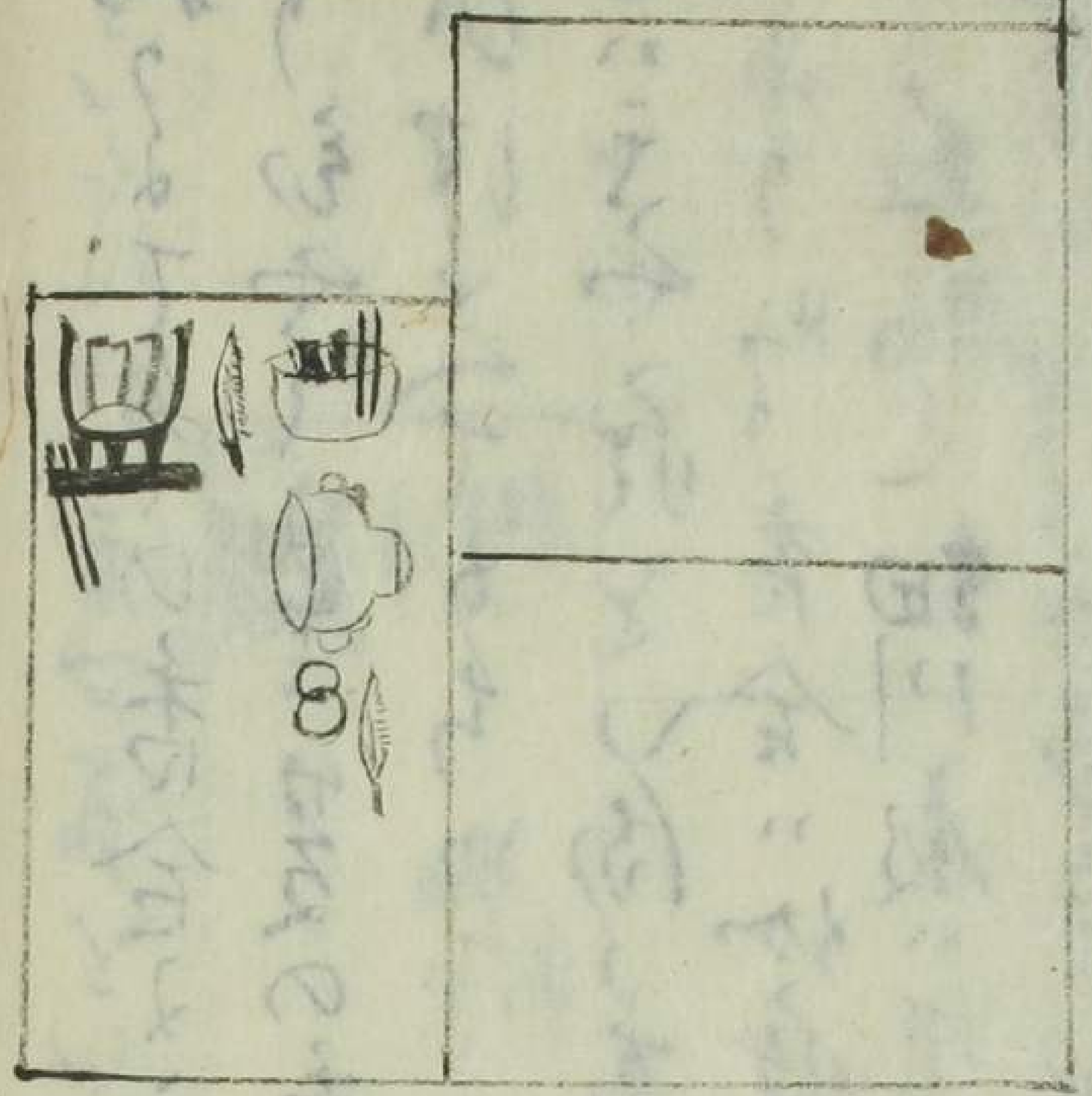


炭ハいれ候の炭入ハ
又平竹盆抔よし
物ハいかの皮如き事之
故ハ別書記ス香
箱焼とのをいふ時ハ
むさし香匂をいふを
香合よし 好物
といふれ時ハきや庭をいふまで餝れども好物ハまざり

わりて冬の香合よこゝろよく焼物ハ青さ
いりもやしよて夏の香合ハよくよいかしへ台
出はえてもちゆるなされ候夏の風炉
よいこや庭をいふ事有之ハ焼物ハ心ほよ
物あり好る香合ハ伽羅たき物にかるゝし
かるゝ物之細川殿ハ風炉の時ハかならず常よ
伽羅をはさみおとてこれらし事也
一風炉の炭ハ大形きハまり有すまじりの別書
よ記ス
一右の品ノなかく炭取餝をなく置くよいし茶
道具にて羽をはりひて案内して茶道口を

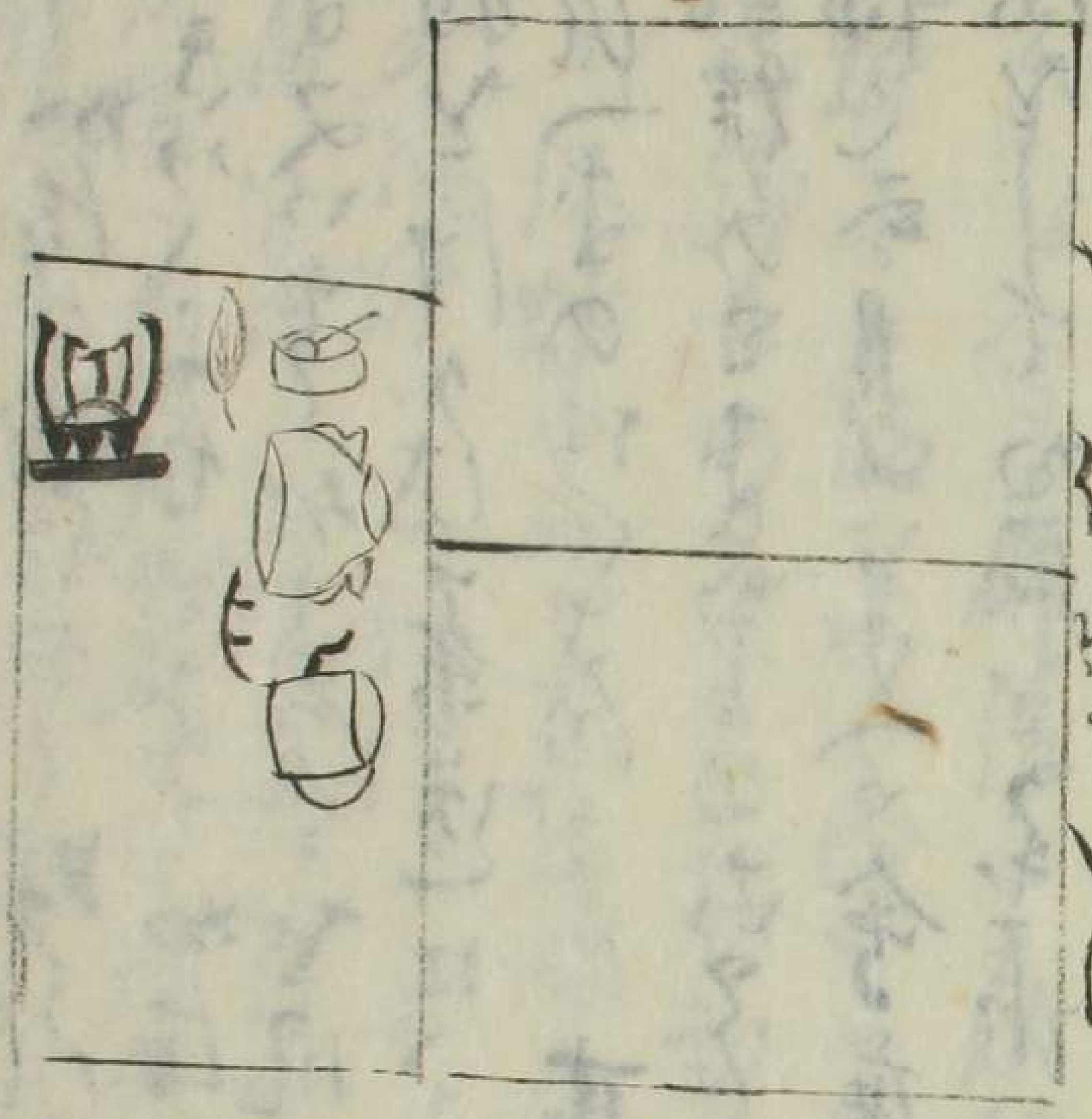
こまとてゐろくを持いて湯のふたをとりて風
炉の前へ向ひかへしまと湯の所にかけて鐶付
よりてたゝうを右とうをてたのうさとたてゝ
かへを向きて湯ノ許へよりよせ立て鐶を右

つし湯ノふたをとり
そのまゝゐろくをとりて
風炉の前にをおて火箸ニ
よりて下火をおこして
火箸を湯ノふたへ小板ニ
おかせをおく灰をして
板炭をいれ事あり



風炉の炭ハたきよき物と一字師傳板伽羅を入
候と又伽羅をいれ候さまよ風炉の眉を羽にて
をおてかろ伽羅をいれもよし

板前灰を左ハ
ふとかりそれをもいれ附
前灰をと左ハあし、
先炭入を備へ入し
ゐろくハ湯金片口
く又ハ焼物の水はず
に水をいれてをき
持いて湯ノふたを
をおてかへ水を



さしかけの口用おく ぬるし水指の蓋をして 縁ま
口のきハくらせをおて かたをとりきて 水はほおを合
をおえいづてかしるくを風炉前へよせ茶灰をて
三羽をはらひ茶道口へたちおしさりて 客も
いつれつまの内ハくさ例の通 事なり されば四月
の風炉の名をかくの出して会席茶ニ炭を
相済て五月ニすへハ会席の後ニ炭を相済て
一炭をしてかたを水さとはおてうてま茶灰
とおる事ハ茶灰くつれやすき物也 立所作
しめひしてゆるく茶灰 相済て
一六月ゟ茶へハ会席への後炭を相済ての事

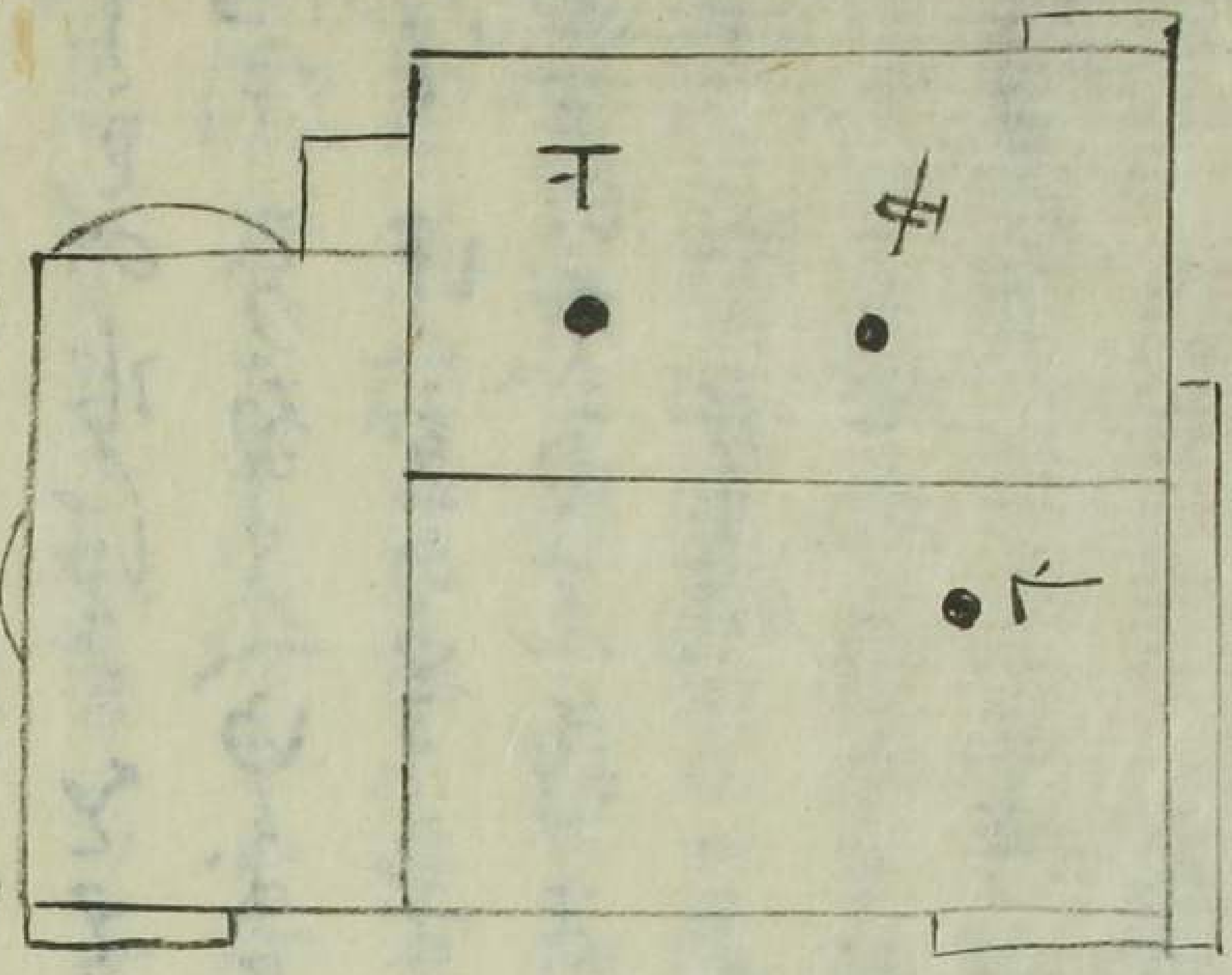
こころうハ炭斗の時ハ数寄屋かたちの世ゟキ
私まそハ火のいきれまて 又云ハ会席すへて
中立茶ニ炭をすへて 迎キ出ゟハ四月ゟ初風炉
の名ゟ会席後ニ炭を相済て
一風炉ゟ火をかゝるまてに左のこゝろさを考所
又逆勝手の客人の心さをさへ可然事なり
一前ゟ風炉ハ不くさをはりかへて 鐵風炉かつ
ち絵の風炉ハ三羽にかく
一六角八角ハ小板ハ火炭を小板より立てとそくるこ
四方板ハ炭入り又三羽の柄のかゞりまはり延ハ道
一茶炭の仕やうハ炭さしまそ茶おかけをもち茶

灰をすりてかきならしと、いれ又かけ灰の二灰とハ
掛てかけ灰の跡をすりて灰をしめて加へ
き後かくへきさくよせをく事も有り
一風炉炭のしやうハ輪炭の小口を立五徳をと
あかりきの上に天地やうによくすへし
の炭ハんしやうありて釜の底を炭といためいり
爲にます〳〵し白炭のさをまて置ハ別書にしるす
一夜の風炉の事 茶の書にしるす
一炭はやく客方ハ釜をはなさしむへし 輪炭
拵えさし置いて事有り其上ハ見せ候よ
ためる釜を客前の方によして置候

事也候ハさいへとも釜をかけ候よし
立上の水ハ客をとりてたて候ハれ客に
風炉茶ハ前をしゆまて炭を見候ハ風炉茶ハちりより
やり中立の時一人にして
茶台の後に見候よし
一中水ハ茶碗にて汲候よし
一夏ハこるんの火を嫌ひいまより候よし
一極暑の時分ハ中水と共て客を中立させて
さしきをすり 庭候ハハ又水をうち候
よし 手水鉢の水は時分にても 中入
の時分の物茶台ハ一刻も二刻ものべて座の

うすい器とも又たなりよし

二畳大目初入座付図



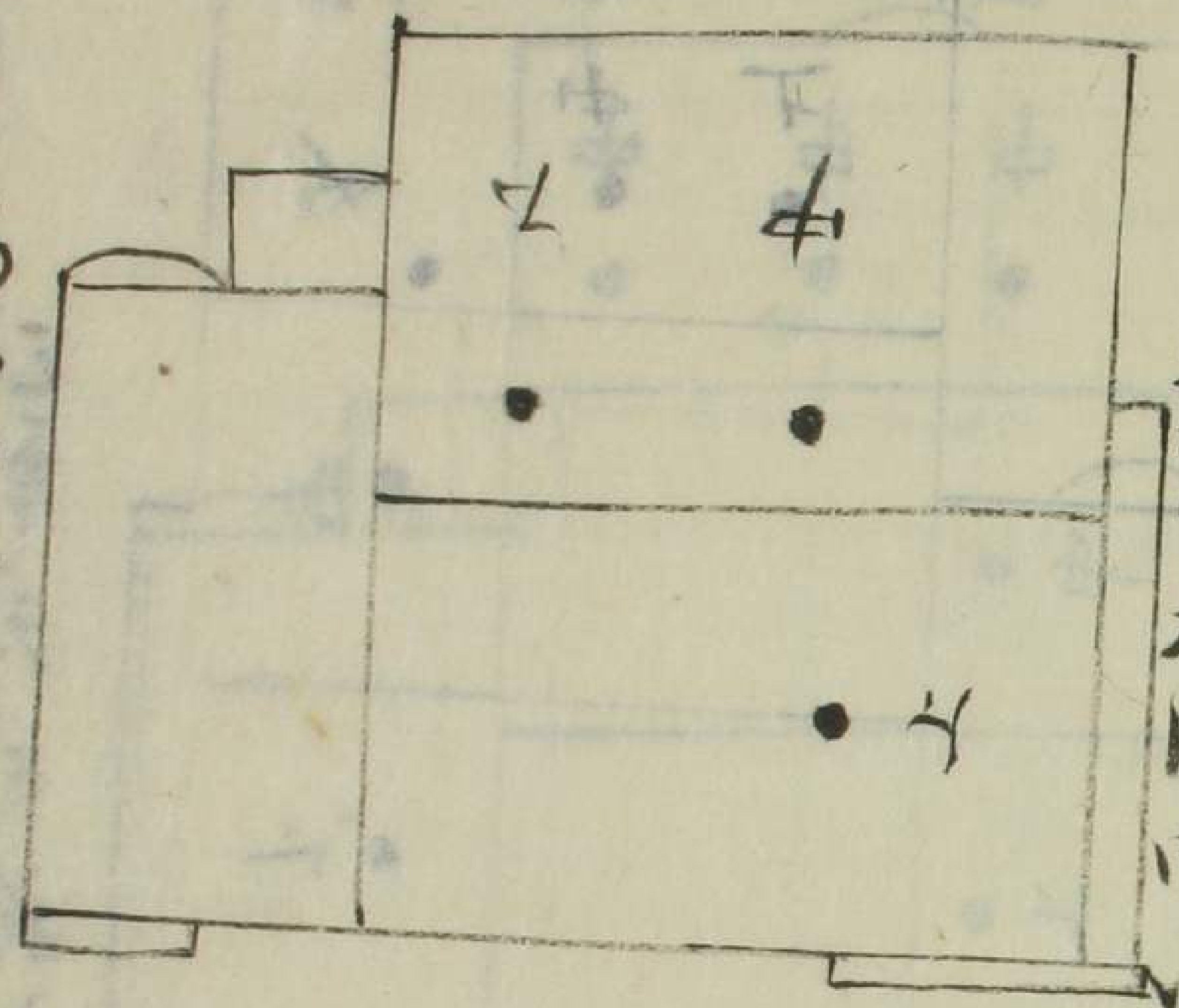
右の図ハ三人客の時よの初ハりの座付なり

一 風炉の時も炉の時も只初の座付

一 炉の時ハ亭主釜を上ルと先の黒引の前よりちりよりて炉中を見炭を見候事

風炉の時ハやハり初めの座なり

二畳大目中ハりの座付ノ図



居ル

右の図も初めの二畳大目ニ茶の時ノ座付

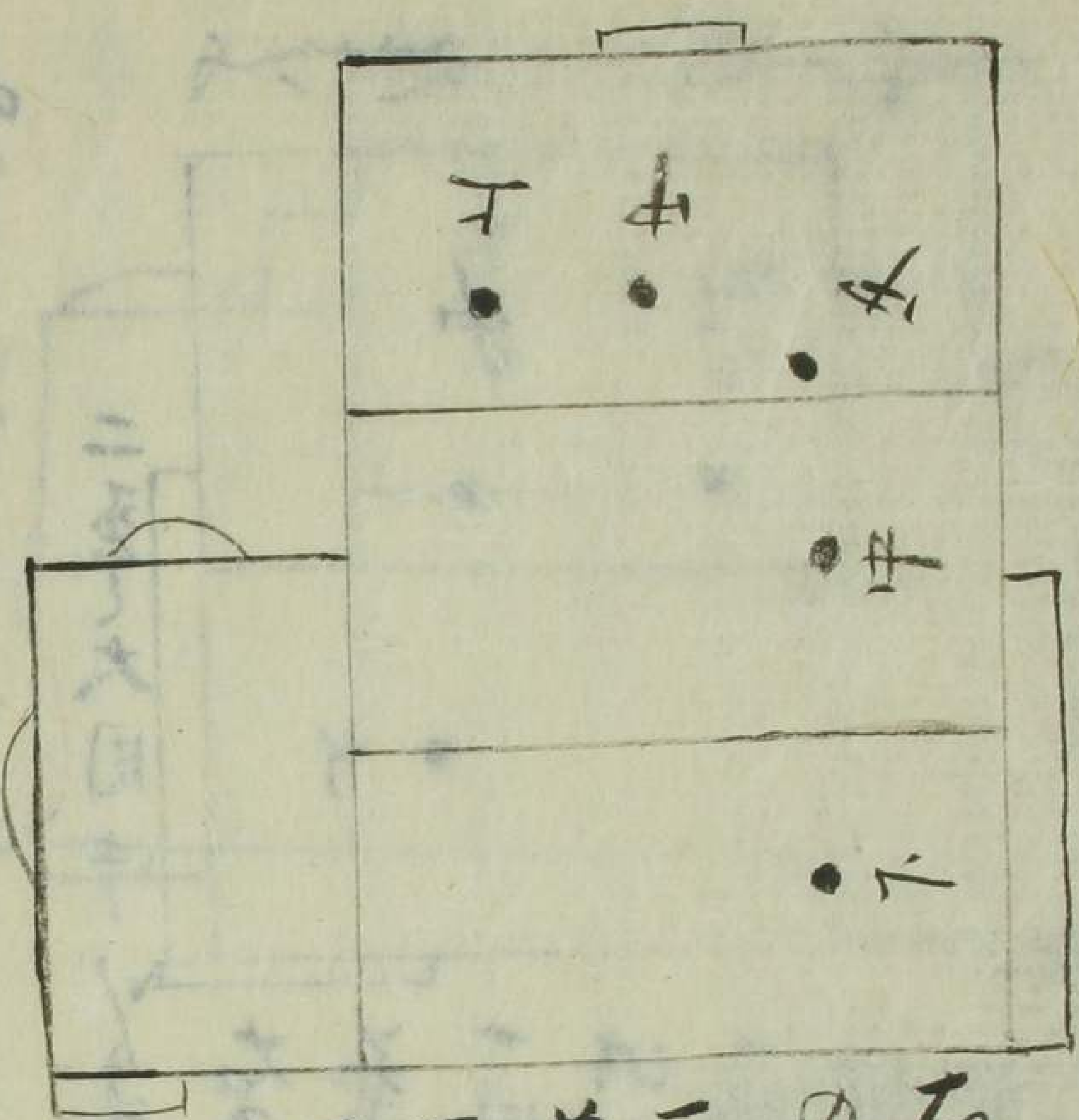
一 風炉にても炉にてもめいせ座付

一 炉の時ハ亭主居ル事ニ付てさがり候をとして引やれと先ノ黒所またりよ座

風炉の時ハやハり初めの座なり

居ル

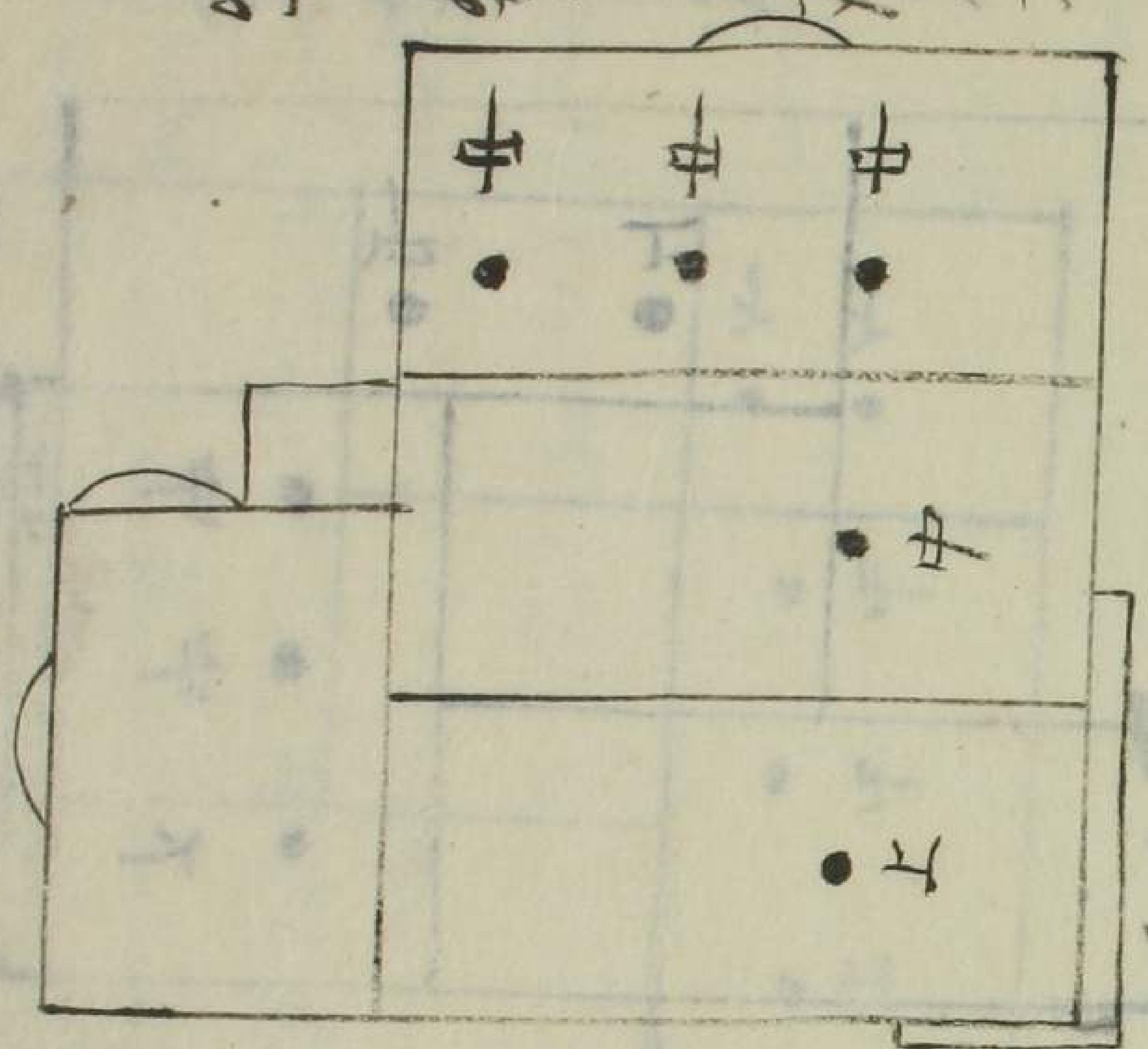
三番天目飾りの座付ノ図



右の図ハ五人客の時飾り
の座付
一風炉の時ハよも炉の時も
同じ座付
一炉の時ハ釜を上ルト先ノ
黒引しの詰ヘまぢり
よりて炉中と足座ヲ
又席華之風炉の時ハ
やはり飾めの座ヲ座ル

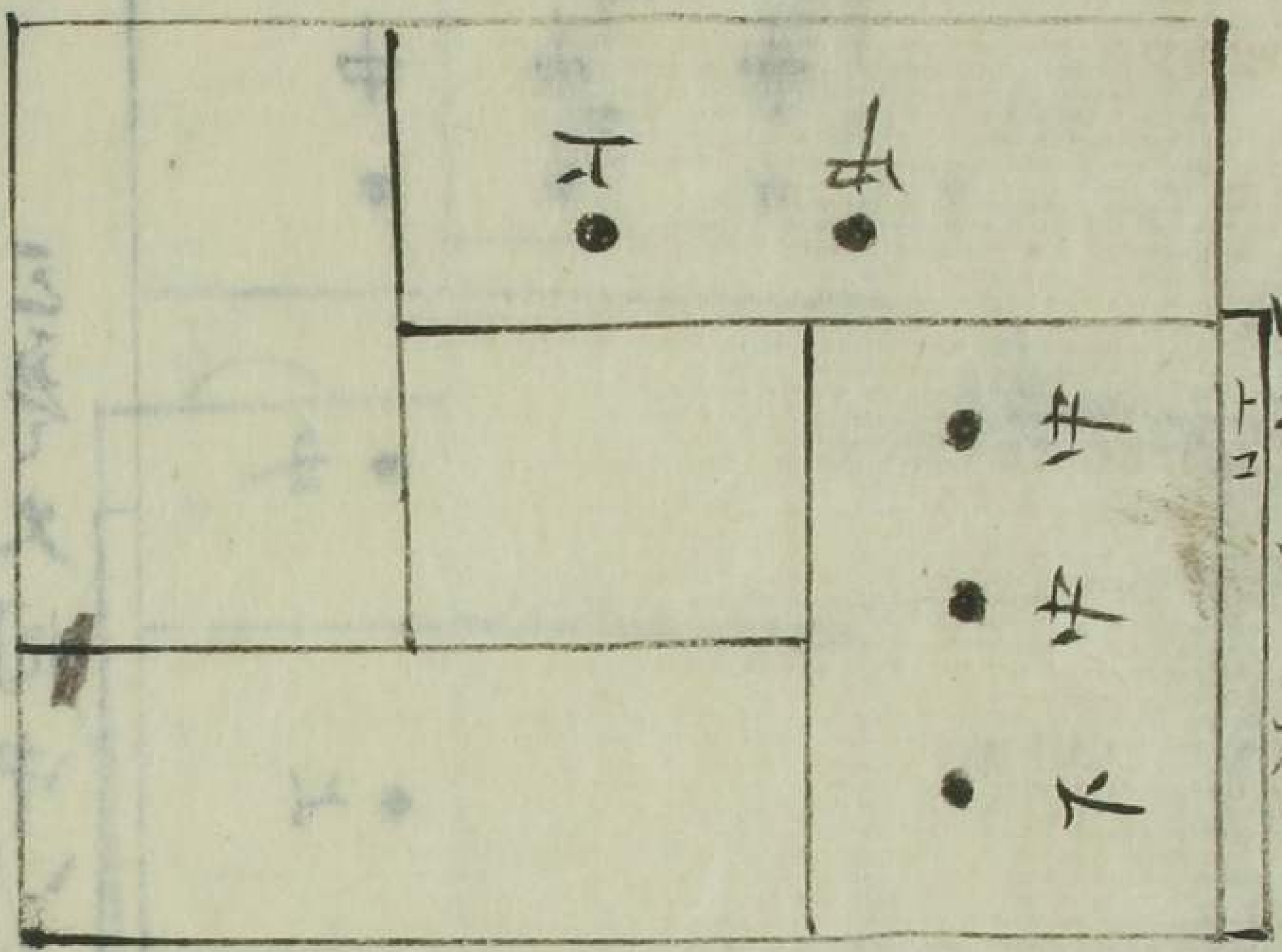
三番大円中りの座付

ニノ手ハ飾りの方へ付ル



右の図ハ飾りノ三番大円之
茶ノ湯より座付
一風炉ノ時も炉の時も
同じ座付
一炉の時ハ亭主座を
あけてこれをおとし
引中と同し客か
先ノ席の処より
よりて右を又茶
その寺風炉の時ハ飾めの座ヲ座ル

四疊半初入りの座付圖



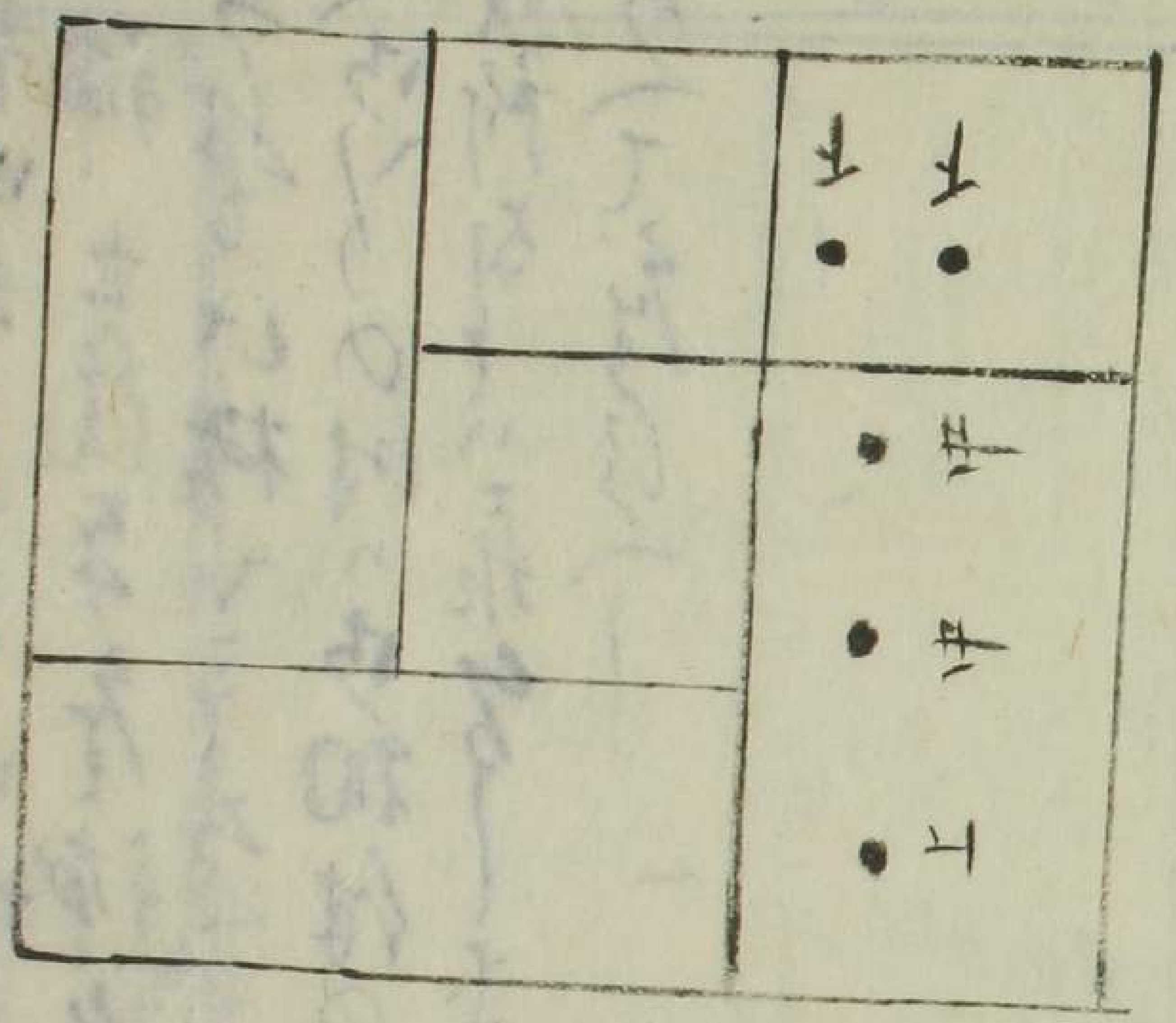
右圖ハ五人客の時初入の座付

一風炉の時も炉の時も同し座付

一炉の時ハ釜を上ルト先ハまわりよりて炉中を見床を見候事なり

風炉の時ハやハり初めの座なる也

四疊半中入りの座付ノ圖



右の圖ハ初めの四疊半茶ノ時ノ座付

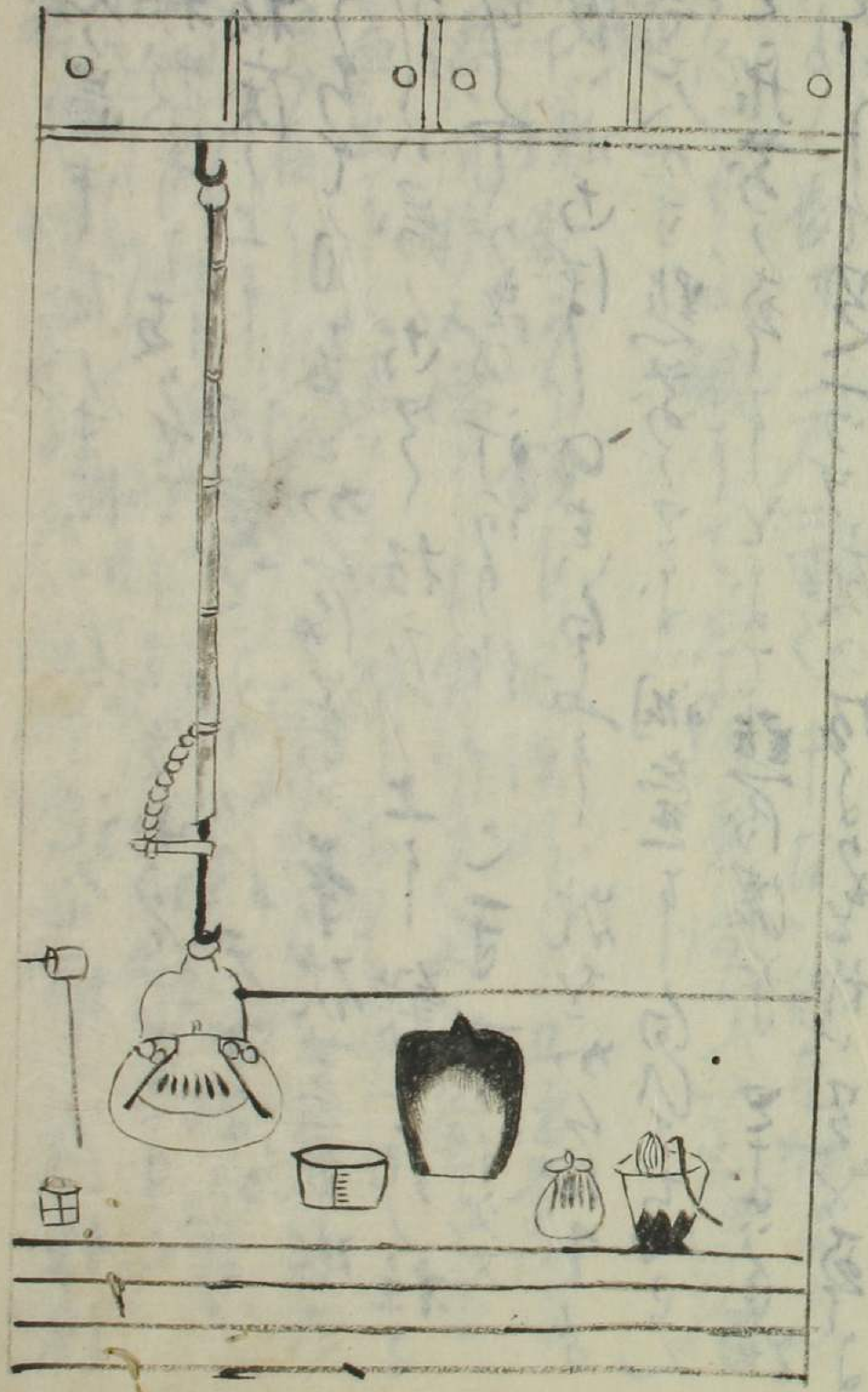
一風炉ノ時も炉の時も同し座付

一炉の時ハ亭主居座へ付て引て下ルト先ハまわりよりて客座を見茶をのむ

風炉の時ハ初め

つくりの時のかかりもとを見て

の座ニ成ル



棚下小台子之図

一此図長四尺三尺中切三尺中切一尺大目
六尺て御書院并座敷角炉也炉の座飾し
何りとても此格をもって座飾候へし
一貴人御成りの時ハ此相伴の座付かた参るへし
世俗の所別にハ最台子しまい物之大法一通り
とこそろへて座候へし

右ノ品中ちノ寸法ハ何れも記スルニおよばず作法
物数寄ニ依テ寸法多小有べし
板床ノ上ニ銅壺をかざりあれハ天目をかざる
うちて自在をかけ薄茶入茶碗蓋置水さし
乃し八品ノ内ニて板床ノ上ニ餝ル也ノ柱ニ
引しやくをの竹ハ竹ヨリ作竹ニテ一寸下ゟイダス
夜ハれたほしのさいのふたし桃をかけ候下台
ニ天九寸點茶ノ時ハ銅壺ニ向ひてちやうん
と飛茶ノ時ハとなて點茶濃茶ノ時ハ燭
とりして足一ツケ床の柱ヨリをかけ足を置る
とまで告ける事なし

棚下ノ自在竹 長二尺九寸或ハ三尺三寸ニ
かまノ長サ一尺二寸也 中ちハ自在かまえた
ざるものなり 鐵ニて造り爰水の
ハ鎖也
棚下鎖釜ヨリ鎖ニ定法なし 五徳釜ヨリ
五徳ハ風炉ゟ五徳ニならし五徳釜ノときは
ハ蓋置ニ 五徳ヲイダサズ竹輪敷とよし
一好ミ石ニ 水とこの 石凡ツヨリ好ミ次第の
石をちり上ケの好みを終し の石は凡ツあり
石をとしめして 好まてさくへし
一客ニ 明させる 亭主ハ囲炉地ノ亭なちりよせの

戸ニ又待合ノ道アリ猿戸ありて何れも客なりし所
きさせしなり　内庭ノ律なりハ寺之台
何れも客をとゝのへしなりよし右路地ありて
何成処ハ三ケ所九寸ありて明りをとりてさ様なり
くよし
一貴人ばかりの時分路地内路地アリ辛苦の
路地なり又貴人ノ供廻り行て路地ばかりの茶
習なり二受師傳
一客ノ濃茶ヲいたしたる茶碗ニ呑さを試ミアリ
ならそいたし事常アリ何成事也　野夫の家
アリハ先師ゟ傳りてきをめて呑さ有之のせて

なれ故ハ東山殿禅ノ律となりて茶の
湯の風流をとりなされたるは本禅の律
儀なりてさ様道之律儀をとりなされたるに備
へ其の上ニアリ直アリとよし候物と飲食スルコト
かし其律儀なりそて呑さハ茶の人アリ
茶を供スル事なれバ主をもてなしとう傳ひて
呑させうのせていたしなりよしされハとして貴
人ハ茶天目をすへていたしたる天目ノ台も本唐より
本朝へ渡りし候事之茶録ノ茶具図賛
アリ　出タリ
一茶碗ノアツキ楽焼ナトハ呑させ下のすゝめなり

おもむきにて心得る事なり是れも茶礼ノ律儀より
みれば道とうしろきのひろしかけまた茶
わんハあまりのせてはつよく出てハよくさすものせ
又樂の古きはアツキ茶碗ハあまりのせそも宜
しからぬ也へよくさすものすゝむまおよハよくて
そうりまてハ茶礼の道ならすし
うすき茶碗ハあまりのせてはつしし又アツキ茶
わんハ湯次スルトキ能湯にて焼ゆへにまいるよ
くはつしよくさすものなし
茶碗湯次の事 春冬秋夏のるものなりて
まつ茶わんを湯焼して點ずべし故ハ茶碗

を能々あたゝめ候て茶をちやわんに入れて湯
まてぬるときハ茶碗のやきをさまし茶ひえ
られて茶味かはるなりよくよく心得べし 是れ一服也
味大切極る心を付べき事也
夙夜の茶の湯の事ハ炭茶の時茶を点しぬる
水を一ひしやく釜ハ入れて其あんをちらして茶
をたて候事也 心得べし 湯をよく
熟湯にて至極のあんなり さまんを大切なり
して點る事なり 水をさして湯のあんを
ぬるくして候へハ茶味おちりて味ひなし
心を付べき事也 湯のあんなる茶碗湯次の事

蔡君謨カ茶録ニ委く拵と記されけれ
春夏秋冬ともに茶碗湯次ハ如何にも能あたゝめよ
ぬるくていふ事ハ一服一味ノ至極ニ叶ざると記ス
冬ハ茶せんと茶わんハはきとさまて茶巾とさゝ
なよて茶わんと湯次メルがよく夏ハ思案ノ
時節なれバよりて茶せんと茶わんハはきて
ちやせんきりして茶せんとありて茶わん洗
湯を捨テ點ル事夏冬との點分さいふ
事野夫ハ家ありかりて用ひ如事あり一服
一味ノ至極ゞ一服ハ出入ありて先達ル茶録を板行
して廣の流布て拵てあるけれ

一貴人老人なとにハいかのやまハ侍合り枝を錺
置きありりとてもの時そいハ数寄やの内に袖
折を置き折りありの時ハそぬりたりのかべ
きりてもへし
一浄瓶ハ茶ハ錺ハりの時台棚に錺へし或ハ
新土ノ水入或ハ中次或ハ棗ハ藥罨などもて
前の茶入までも點へし茶通箱の
ときもありりさもいハ浄瓶ノ扨等の所へし
一客分薄茶持出して当時ハ茶ノ湯を出ふ
事なりなく分の茶入まて點へし客ハさぞ
の茶とさてありもよし さもいせりり客の持薬

の茶を點へし仕舞ヿ茶入をハ棚ノ式ハ床の
上ノ式ハ鎖ハとされまハ附書院の上ヿ明茶
入を置事なり
一炉椽の事冬ハぬり椽春ハ白木椽を用申候
事也く利休ノ日記ヿハ茶屋のすゝや
かましハ冬春ともヿ白木椽ハよしとも
ぬりぬり椽ハ云バ好ミよるへきの心ヿ用ゆへし
なり
一雪隠の餝帚ハちやせん帚よし又ハ京
帚ハあまり物なり九引よ陶物のよし
一夜学の盞臺ハ屋の茶ノ湯ヿいつれも有り

一説ニ夜ノ茶の湯ヿいつれも有り唐ヿて
夜書を見ルに蝋燭火をのせ候物なり夜の物
なる也ヿしかれとかりもちゆへんまて置の
茶の湯ヿいつし申候よまた有り此説ヿ
たしか無候也
一東山殿袖の盞臺といふ物有り東坡ノ南山の
袖とて南山の繪物の袖の金具こ筑前の国
宗福寺ニ紫野大徳寺へ上りて東山殿
ゟ傳り盞臺ヿなりし候よし
一穏屋の盞臺古ハ唐ニ而ヿ有りてハ餝ら紐
事なり唐まて天子ノ星空に祈といひて正月

元日の夜一年の當星ヲ祭香炉にて焼といふ
事なり故に星香炉といふ義政公之時代より
本朝へわたりたる候とも云ひ又ハ東山殿より以前に
わたり候ともいふ穂屋といふ名ハ本朝にて
付候名なり
尾花折くるゝのめてみち一村ハ薄
あれは秋のこの山といふ和歌より付候よし
この山にて焼穂屋の形ハ似候ゆへハ穂や
香炉といふ
一惣物の風待ヲ表具の床中ハ付ル事なり
一幅付ルもなり二幅付ルもなりいづれも本なり

傳へ候事なり是ハ習あり
一惣物打と花生の打と竹のかけめを上と下とへ
すれハ惣物ハ物の打ハ竹のかけめを下へして
左花生の打ハかけめを上へ致して右事習
なり惣物ハかべ分三分のきそかけ候下ハ釉ありて
くべきとよく候一様かべハちかう候かべきと候た
見るに竹のかけめを下へ致し　かきぬのすへき
やうなりすべく候もし
一花生ハ水のいりてたまりその内へハ立つたりと
かべハそふ中ハかけめを上ハなして掛る
一利休の日記ハ此ゆ法あくまでハ六尺ある

以上の座敷ハ大輪分一寸五分ほとまて中二五て
分四五まてハ大己分九分ほとまて七分もス
一風炉先屏風ハ杉戸を中車より名物ノ餝
のときは杉戸を用ゆる　口傳
一東山殿御時代ニ連歌の茶の湯より中立
の後座敷ヘ文台を餝りけれは茶すまして文台
を床へおろし　重てそれより連歌の式法と
一三羽ハ何棚ニも餝ル又捨羽ハ茶道口ニと
重ねもよし　捨羽ハ餝ノ外なり
一花見ノ茶の湯ニハ花をいけ候式ハ長盆式ハ
香炉なとを餝るへし

一水指の上ニ茶巾を置事金物ぬり物の蓋に
ぬくさをそめくひてさく焼物座ニおめ抔との蓋
をぬくはさをたゝみ　坂ハ座ニおめの蓋ハ志るし
てそれ焼物の蓋ハぬれ色を見せ申へし
ぬくさをはりをさすへし
一晩ケきとの茶ノ湯ハ一度ニして　釜の蓋ニもとり
一座補ニ而　餝をすれは茶具ニ而　指合
取物を餝へし　出院違棚太田おゐて
一炉中の灰形ニ而　仕やり何ハ灰西方
の角を切ル又三角ヲ切て縁の角をとりおかれと

て至事なり

一ゆりさき灰の事ハ何事の角をこすりて三方を
ゆり残して至事なり 丸く灰にて
習なり

一いろは雪を見ぬ事の茶の湯なり 炉中の習
なり

一炉中のゆりさき灰ハ灰付 灰もなり 枚灰もなり

一穂焼灰ハ利休の物数寄にて作

一鐵棚ハ棗を餝てハ補棗寸法事と補
棗中の寸法 棗の大小によりて定法なし

一茶巾の寸法茶碗ノ大小によりて定法なし

古織殿寸法小なと数寸法利休翁ノ寸法にて
御治有之候も在之

一茶入の寸法も茶入の高下ニ有 濃して
いろいろ 濃の茶入 薄の茶入ニて
二品なりこれも寸法ニ定法なし

一茶道ノ肝要ハ第一茶の製作 碾茶の口切
水の要用 湯ノ熟不熟なり 肝要第一ニ

一服一味なり

一水を汲む事肝要第一なり 水ハ水をと云物ハ
或ハ江ノ水川の水にても何所にても水のうまき
底にての所を汲なり 其を組ニ 必ず御

有魚有なるの有り汲へからさる井の水もこれまて
下る水もの〻類すあり皆水の毒あり
一茶譜にいはく水を汲時ハ明方の水を汲へし
とあり夜の水性あしくして茶散ス事の水
性よろしくして水ありからか故に茶沈む類ハ
明方の水によからんかよくよくかんかへしてわかるなり
一雪水ハきひしくして茶のいろを能すなる
一夏水ハ茶の味ひと香とそんし候
一濃茶を點候こと湯を汲事ハ候事まて
湯ノ煮まりてものいまた候處のからす
湯の事ありて毒あり湯之しとすれと

甚毒なり散シテわかちやなる事あり茶味なと
あしく故に湯ハ中心を汲むる事
あり湯の毒ハかわらはなり水の毒ハ底し
あ候なり

濃茶薄茶の品

一茶の極上
初むかし　後むかし　此二種ハ最上なり
ありて極ミ上清口味ハ味之式ハ袋一袋ナト
薬そろゆ候なり　極上茶数十斤の中から愚かも
しそれわつか五拾目六拾目ナラテハあるまじと又云々
ありてハわつか一銭目ほとありてはあまり薬ふあり

極上上ニていひて一同の葉なれとも弐ハ葉のアツキ
ウスキ弐ハ白ゲ弐ハヨレ弐マカリナト称有り
よりて味ひも葉の形も違しそのかゝりをかへ有
これを定りそろ由れハ拾斤中分一斤有し
なり一斤の中分半斤有なり半斤の中分
二銭目 一銭目又ハ茶種をとりわけよせて 一例也
となれハ大きに大切なる茶なり
けし擬ひとしたる跡の茶有 極上の葉なり
けし極上分そりてしたる茶をハ極揃といふ
これをいてさる粉を極の粉といふ
右の称なりし後なりし有 上品 中品なり

一極諸ハ諸ノ極上なり 極上上の中分いそしたる
茶なり
右極上上称なりし 後なりし の後ハ 極諸
みて諸とれハ別て如き物なり
極諸有し 上品中品なり
一別義諸 け諸ハ極上葉よりいそしたる葉にて
われハ別よ諸茶有 仕立し物し別茶より
上品中品 下品なり 上品ノ別義ハ中品ノ
極諸有とそら見茶なり
一上揃これハもしなとハいふ茶なりて 極諸別義
諸有といひちらひて茶の形乱してとして 肉あ

はくいろも青黒く物じて葉味こびしくして
すなほなり
一紙袋　一袋ニ付　茶ノ目二拾目
一半　一ツニ付　茶ノ目拾目
一小半　一ツニ付　茶ノ目五目
一極品の上茶なり　熟茶といふ訳は味ひうるはしく
していさゝかも土臭なく味ひ和し茶ノ気に
なほくさわやかにしてかうばしくいろ青く
して白し　舌の上なり　さわやかならざるなく
物のいろにて和かなる事なし　葉形あざやかに
らかにしてうすくすゝむるときはなるを

此茶を點ずる事壹人前に茶ノ目六分或は七分
或は八分にても風味いさゝかもきびしからず
四分又五分ノ事なりて八茶味かはりて土臭
なしこれを和ゆるなり　七分八分の茶はいよゝ
まりとかうばしく土臭も和かなり且極製にし
ぬるまゆ茶なり
一極品なり　清茶なり味ひすゝみてかう
ばしく香青くはくしてうるはしく貴味なる
として臭口なり　味ちてうるさかやなり
飲をとりて露口よあはくすくしお味ひ
なり葉茶の形物濃よ大形お形　物じていろ青く

して白し然ほとうすき物也
は茶ハ老人なり 五分まても六分まても
七分まても味ひ来り宜しくすくても
又さしても茶の香味いさゝかもたりぬ茶
上々極品也
一極上ハいさゝかきひしき茶なり 風体なり
きうそーして すゝでるなり いろ青く黄なり
茶の形鳥嘴ノ如くいさゝか細くして白毛なけ
のもよきものなり
は茶ハ老人なり 茶ノ目 四分五分よし 或ハ
六分七分なと いれて味ひはよくして志好し

一茶極上品なれは色かはつすくして白く肉合
うすハしくして青くすまをと無之して
無之と上品なれ
極品の茶ハ来ても九分ヲ入れて 麁々ハ七分ニ
然れ茶のかろまは老人なり
上揃なるハ九分ゟ九分ほと
極詰なると落茶ニ而點而無ハ茶をいちやちやく
にまつかりとして湯ニ而もしやう 六分ホトよし
極の揃極の粉なるハ湯ヲ七分ホトよし
上別義なるハ茶をハちやしやくるまつかりと取り
て湯七分八分ホトよし

上掛なとハ茶をちやしやくてうかろく計とかい
よりて湯ハ手前ホトよし
一茶しやくハ大小あつて其れヽし利休の茶
しやく能分ホトか能候
をを利の二重棚ぎなとハ三分ホトか能候
那智の小貝なとハ二分餘か能候
其外新作ノ茶しやくまても此けんの能くろく
て湯ハ少き也すへし
主人常ノ茶ノ用ハ大分ハ大法ノ形より形なり
茶ハよりて多小ありて湯かけん一服一味の大
事極道法なり

一湯ハ蟹目ノかへなとを極湯として點候也なり
それをすくはと老湯といひて老湯すれハ茶味
かわりて真香うすくなりていろ飴し
一初めの炭をはよくしてたまらせ候湯ハ
初ハ初めれハ下火ハよろしくして釜の蓋落て
なつかりてこうへのぬほとり下火をいれて後
の炭入て大きからせ候ハよきなり
数寄やかいちや點の下火皆一むくりよ物く
初ハよりの炭をはつくすれハ中ハよりのまよ老湯
しそ湯のはやく有初ハよりハかけの湯して
中ハよりなきまからせそ點候事しかれとも終

ちらひて稲以りハ陰以りハ陽とえかり あほ人ニ添ハ
ふ休然事なり下火を大事なり かく添けハ
け湯のひねれこりて守一なり 土かなり
一白炭り炭所り利休の目紀り 白炭ハ灘の流ノ
ちくなりをくる候り拙ゟ炭ハ山川の宗宰をハ
うたしよ薄らよし白炭のをとよ彼ハ火紙の上ヨ
をし事なり故ハおゟ白炭ハほくちなり炭なり
大をうたしさよゐへり 白炭をほくちなり
土添事なり
右土筒ノ寸法
一数長ケ 八寸三分 下の端ノ長ケ六寸 三分

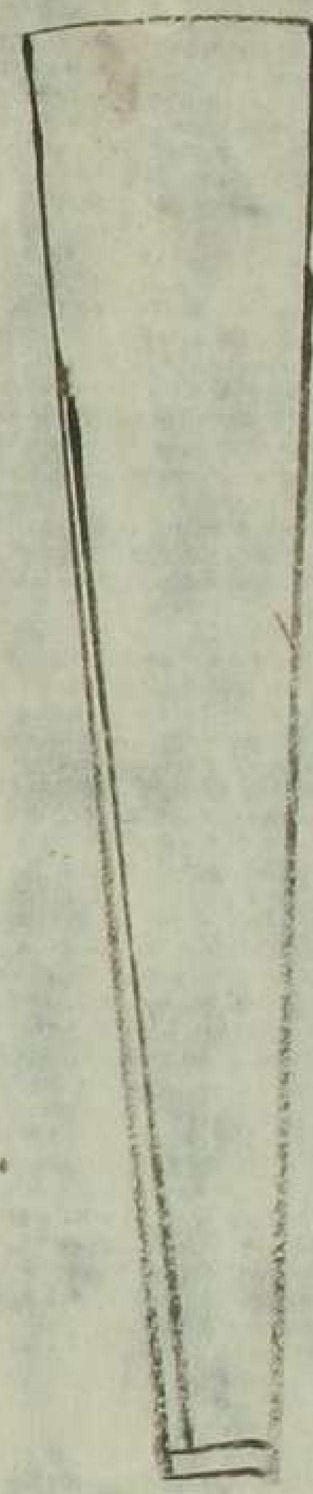
右口ノ分 一寸九分 上ノ端七分
川切ノ後幅 寸 三分
灯台の穴ノ上七分 穴ノたて六分 横四分
右の寸法大法ノ形なり 利休の箱根きり
の寸法ニて品を似り 或ハ 高野聖ノ形 或ハ
鳩ム子ノ形 或ハ 園成寺 形 或ハ 十八ノ形
右いれも利休の作ニて寸法あり口伝
竹ハ三ツをかりよ添竹をよりて上ノ七分ヨ

ふしある竹をヨシトス

鞴枝　枝ノ寸法

長ケ　二尺八寸　先ノ幅二寸　持外寸二分

中ノフトミ　一寸八分　アサミ　二分



右アツミヲ次第ニうすくなり角ノめんと

半分トル

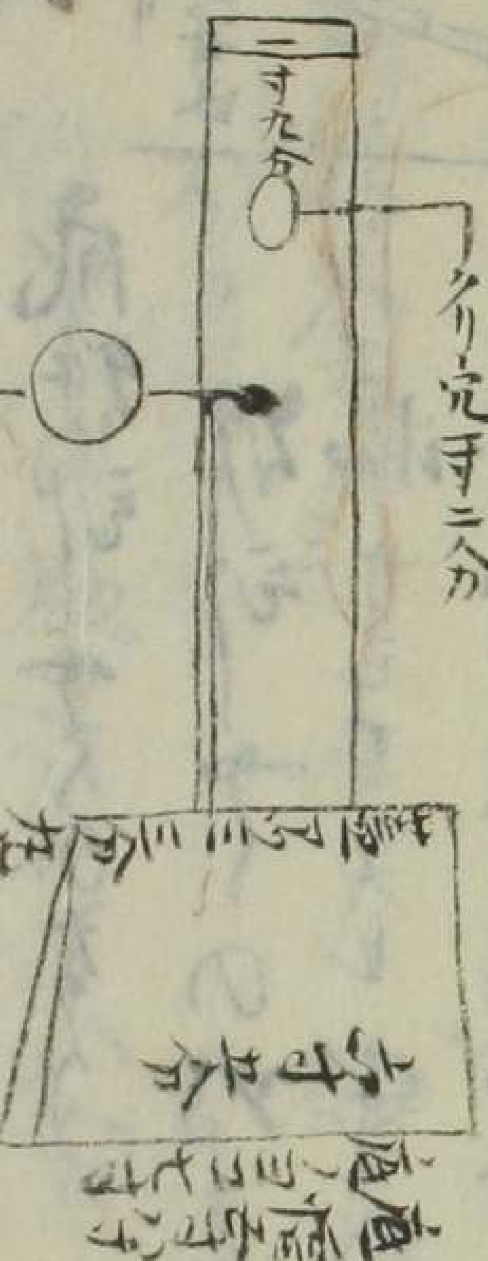
短檠ノ寸法

干ノ長サ　一尺　二寸五分　箱ノ高サ五寸五分

地高サ　一尺八寸

竿ノ幅一寸　二分　竿ノアツミ五分半　四方又一分ヨ

ホウメントル

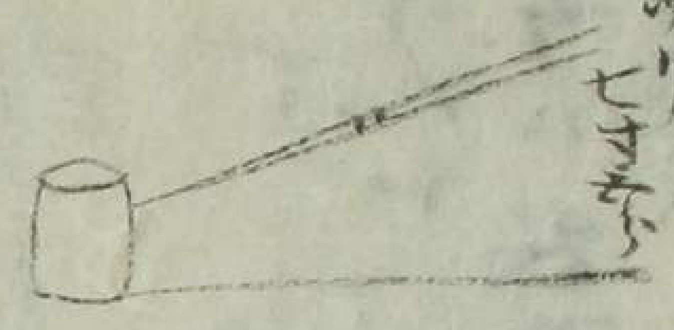


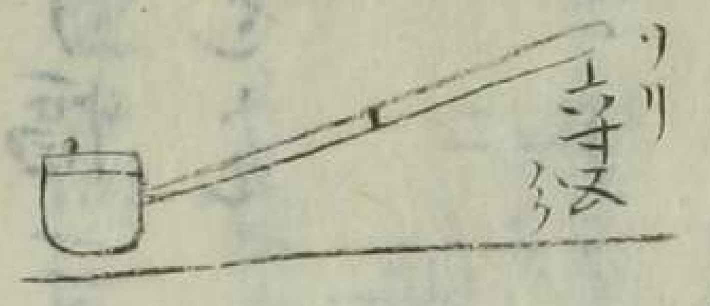
右なりもあり

きんけいの箱の内の油ツキノ竹輪二五分ツヨシ　四トカハ

うケハ物数寄ニ依てよまるなり黒ぬりスハ

春慶白木トいふコトナシ





杓引ひしやくのそり
利休の好み湯組ハひしやくのふかさ一寸
九分 縁ノサシワタシ二寸半アリ二寸
月形一寸二分
柄ノウラヲ布やぬれバラトツひて丸クもノ処ニ
フトク

風炉
杓引ひしやくのなり
杓引ひしやくの深さ一寸八分
縁サシワタシ一寸八分ツヨシ
是ハ家々の形アリ
利休ハノギヲ用ユ其外ニカキゴ

利休さすの引しやくなりハ水目四拾三匁五分ホト
仕水やりて弐分三分ノ多少あり

雲龍釜ノ引しやくハ柄もすこし細く短く
もあるべし
ひしやくの深さ一寸八分
さし渡し一寸九分半ニ八分半
雲龍引しやくの水目四拾弐匁ホトイルこれも水ニ
よりて弐分三分ハ多少アリ
恵美子胴の形ハ たくさ厳物数寄なり これも
のふめる湯を近比ねみりなる引ともちひきる
まけひよくしても水目かはりなし

恵美子胴

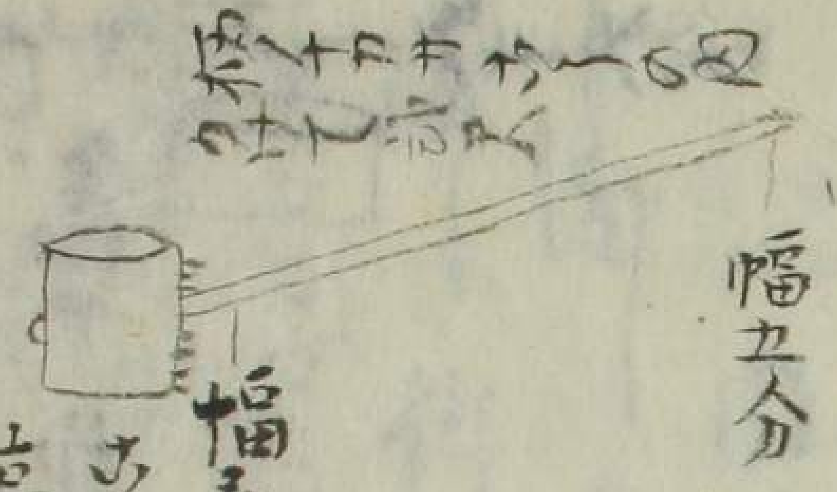
、かしの長さ一寸六分半
さし渡し　二寸三分ニ二分
水目四十三匁五分ホトイル水ヲよりて
引分三分ノ多少あり

宗和形
かしの長さ一寸八分半
さし渡し一寸二分ニ一分　水目四十五匁ホト

遠州形
かしの長さ一寸七分
さし渡し二寸三分ス二分

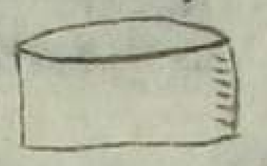
水目四十三匁六分ホト
細川殿物数寄まて石州の引切や象の引切や
とし二品あり

一水引切やの寸法
太枚の長さ切入りて長く掛梅も
長ちゃ枚長さ弥あるあし、
けしびの所し、長さ一分ホ



めんぱうの寸法

口一尺一寸四分



高サ弐寸五六分

太枚の綴めりて綴ハこれも
竹ふちめ綴く ワひめ綴し、
綴さめ一分ホトツヽ點空ケ又まハ
とちめを客の方かへ向ふやうニ
置べし

香座の寸法

さし渡し一尺三寸　アツサ一寸三分
内腰ちきの香座ちいさきハ渡し、あさしまわ
物ありり

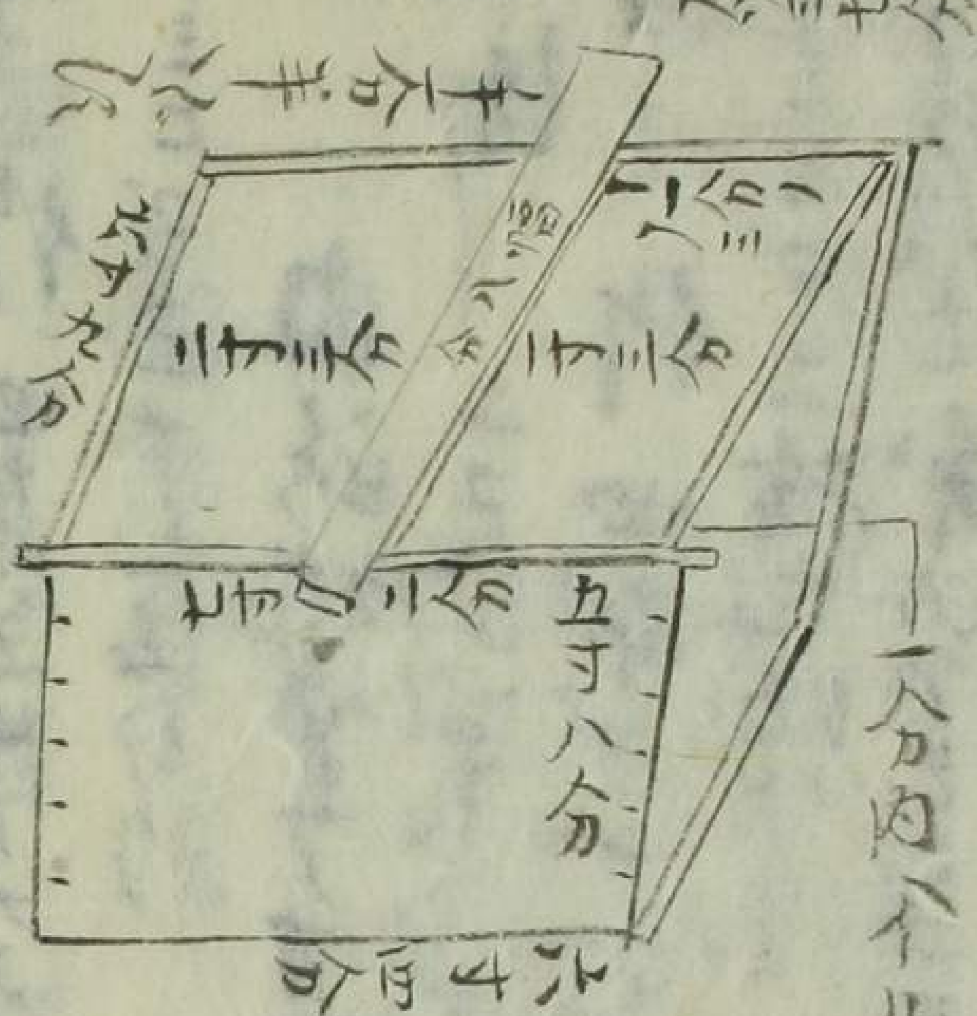
外・露地笠ノ寸法

一さし渡し二尺八寸　外のアミヒゴ三拾六筋切り
内渡し竹四ッ割を十文字ニ入レ
内アミヒゴ三十二筋切り

内路地笠ノ寸法

一さし渡し二尺六寸　外のアミヒゴ三拾三筋切り
内ノ渡し竹四ッ割ヲ十文字ニ入レ
内ノアミヒゴ二拾九筋切り
たゞしいずれも外のアミヒゴヲ煮竹ニしてアムも有り
内ハ白竹あり　外も白竹ニて編みたる笠も
有り　あかね笠あり

釣瓶ノ寸法



太金釘ノカシラヲニセテ
五本打ノ
箱ノ内四方コクソニテ
ミヅヌヤウニツムル
蓋ノアツサ二分
クリブタナリ
手志中ノクリ七分　上ハ三分半
四方ニメンヲトル　松の木さめにてさし板すゝめ可く

はしめには　茶わんをいれ日ハ茶二方合　水を入れ
てから水を茶碗へ入ぐりそそ飯を見しをまて
水を四五匹もかへて　錺合スルトキ　水をこし洗て
つかうすゝはひしらひ口伝
一すいてきのちやいれを錺るは口を横ニ一　錺ル
茶を茶碗へ入るまゝは口を茶からして横ニ合
付く
一たもはぐのちやいれも右の水てきと同前也
すいてきの錺り　口伝有り
一濃茶の跡ニテ茶碗とかんの事　下座ハ上座
かへして上座からちやせんをかへて下座へ渡ス事也

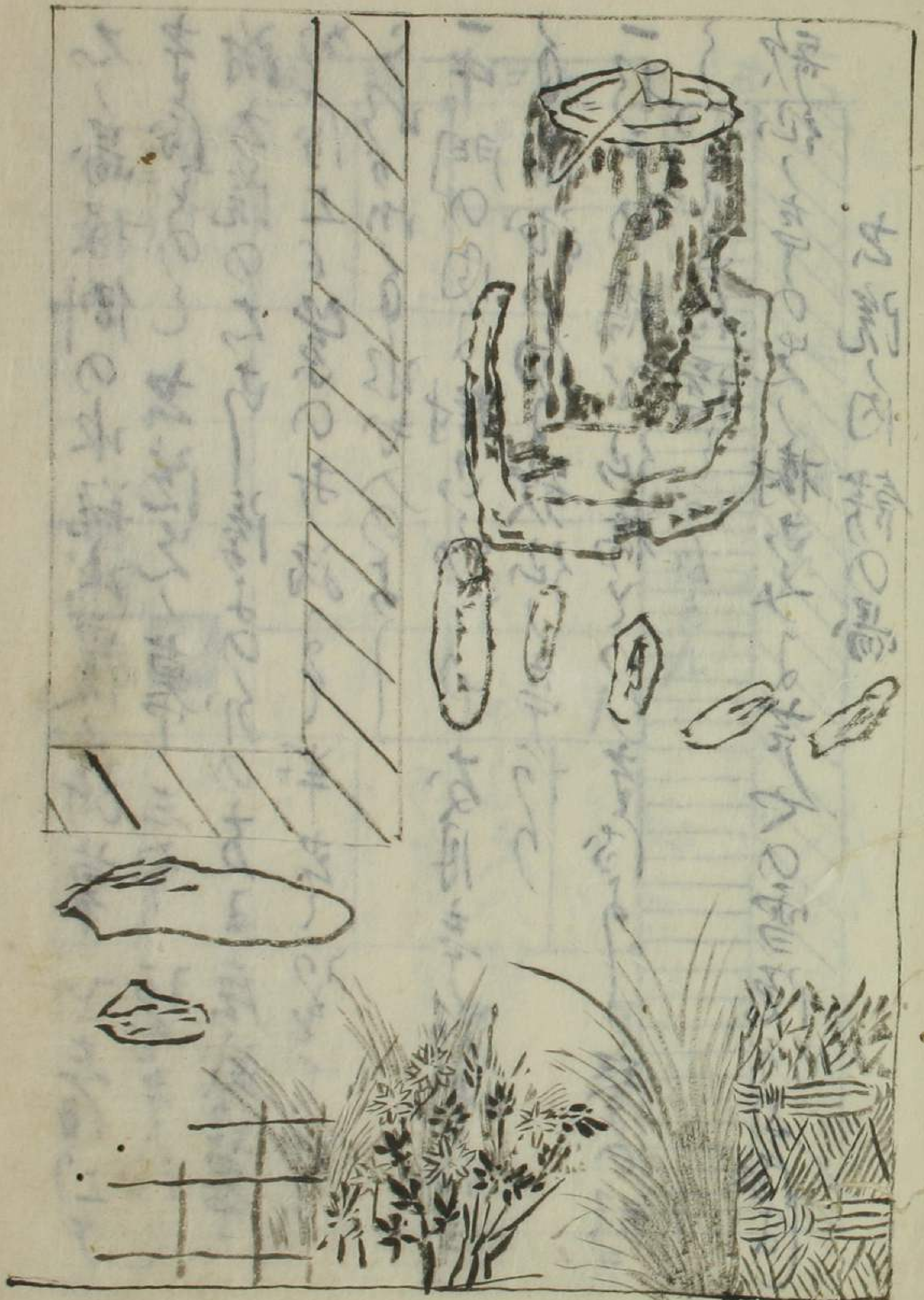
利休南坊のあまりし茶の湯なりゆゑて上座也
られしそれより下座は茶を飲し後ひて茶碗を上座へ
かへさずすなはち利休のいはれけりまづそれ
なちやうんをとらんぬしきれ給もとよりかりて
下座から見せられし事なり仕舞を後まて
孫られけり利休さて後には後日の茶の湯
やうそ着り たるひるんとあるすりそれば
とよゝはなきの地体なりむも極て茶碗にあれば
結構なとはいふしれきれ茶きもの人をなし行けり
なりて其の人おきまは師匠へといひてかく行たりけり
まやし後りをさまかへし

東山殿の時代よりは数寄屋かこひなくして
茶湯それおきあたもちまち候台子の書院にて紹鷗は
茶の湯日記は此所にては世上には得たる事もく
今井書はゆいりて南世書院點として四畳半は
それおこなはる
一紹鷗より利休の時よりかはりて道具をも据置にて
いふあり後は炉の切もかはりたり
或は向炉あるは中囲より或は三畳中きり
二畳中きり或は棚下　銅臺　棚下小自在ある
いふ事なり
一三畳は太閤は織部殿作そいふ説有ちかし

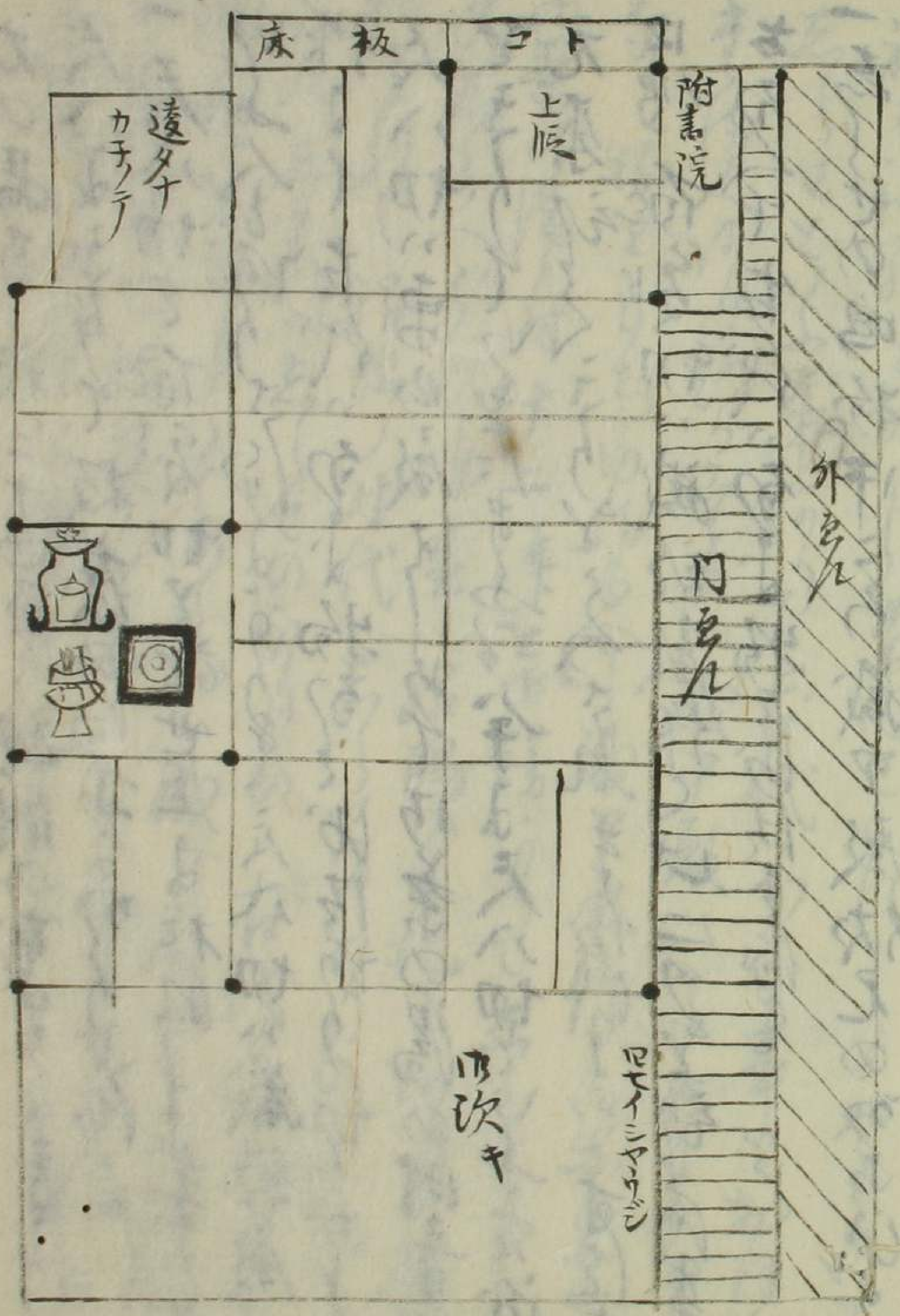
去れともきいかにして織部殿作意もいひくし故ハ
利休ノ日記ニ此方法ハ利休ゟ細川殿へ
傳ル日記ニ二畳て大目 三畳て大目 二畳て中切
三畳て中切 四畳て大目 切の事なり
一風炉之屏風ハ式ニ書院又ハ大座敷草庵
向ニ風炉を餝山ハ茶湯ためにあらく
たゝみこの所ハ古ハ臺子屏風なともきハめて
さまそたゝよしハ他ニ足ハより中比ゟ是れを
用ゆる事と成る也 数寄やかこひ風炉先なとも
茶湯ニうつくしき又路地仕舞の時茶せく
事ハ所望し

東山殿数寄ハ書院飾ノ図并餝

一床ニ義之ノ墨跡 其文字之図
一床ノ釉ハみに 青地ノ香炉ニ香のは
太香炉も小皿も唐物也
一附書院ニ 鯉ノ硯 前ニ筆庭山印硯屏
同 茶きん太皿ニ 太海ノ茶入五ツの物
太香炉も唐物 書院の内のをかしきを唐織幕
かけ
一板床の上ニ林和靖ノ人形 唐物
一違棚ノ上ニ十二律 寿福の娘さゝ之の物
同 左ノ方ニ枝さんご珠 串釉ノ筒ニ入物



一遠棚ノ下ニ七絃ノ琴唐物之椽側ニ
二重幕かゝり長椽ノ端ニ水瓶
水西復作り出院庭ノ図



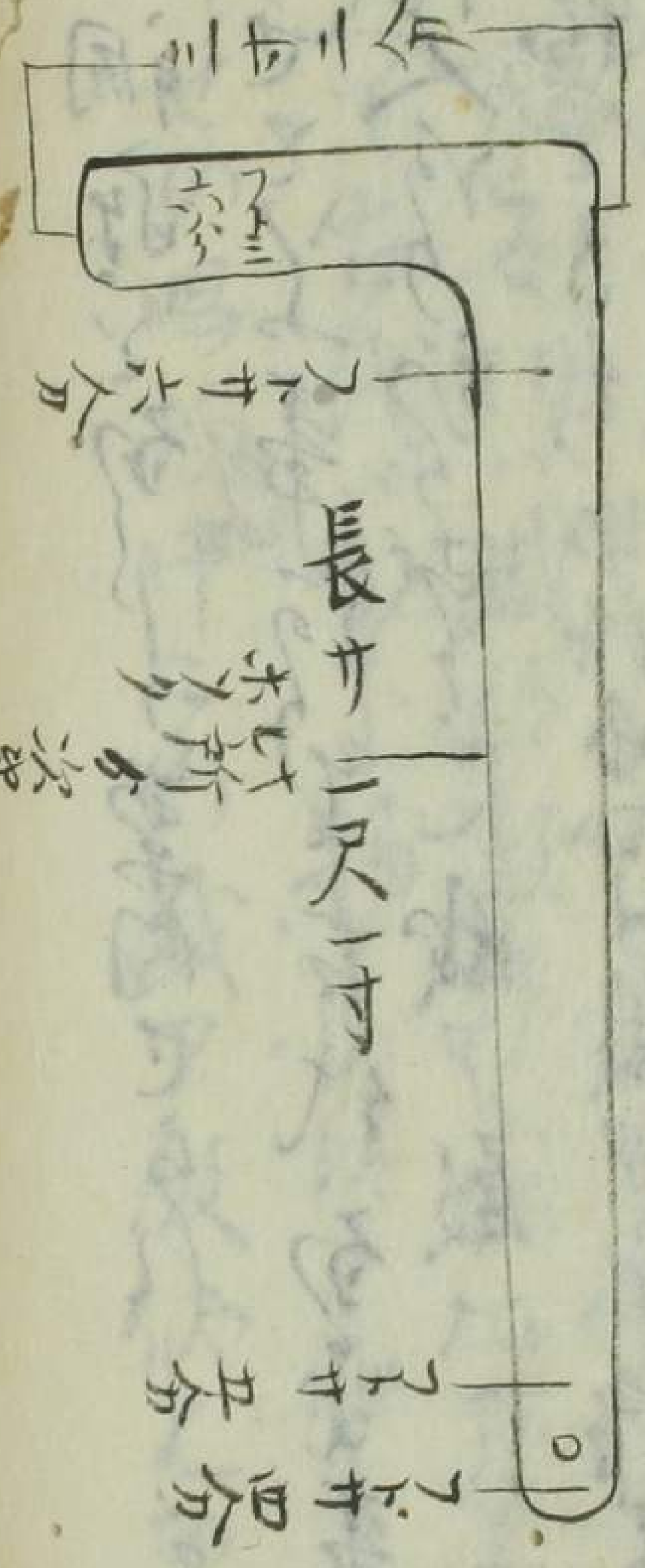
大ノ扁様側の水羅水霞ノ許幕を志ゟり上ケ
まゝ候ものし 出院先ノ幕 志ゟり何をまゝ候く
附書院の大きい障子の外の方は唐織の幕
かゝ候上より紫の斤緒まて半出をて何り
これゟり外は水も入のよし
一中門の内は樹木なみ何りて友月亭何りまゝ候よし
自水御の向は歌仙ノ亭何り
一形戸の橋と仙橋といひまゝ候よし 琴の形ゟ
こつし候橋と何り
歌仙ノ亭の先ノ樹木なみは苫屋の雪隠何りと候よし

出院ノ内 飾の図

右の器并ニ枚二十四并ニ此時の尤せる青竹を
尺八にきりて枝康の何ふにかりさ候よし
一尺八切とも一節切とを世上にたれし事と
いふ人も有りさ候によりて尺八切ハ義政殿ノ
作にて古代ハ尋ル物にと沙汰有りしげさとし
尺八切ハ東山殿はじめて御茶の湯の時青竹
をきりていきたまふか今に尺八切といふ名残
元来ハしくきりとらされまじひしと才阿有
口伝一節切ハ義政殿作にて此二ツを記す事ニ
おかへて古代ハ尋ル物にて沙汰も有し
一尺八の鳴物中ころ義政殿作之のかたち給はず

弥る洞簫と尋し業内せられしか今にいたり
尺八と云ふ事有りて古代ハ尋ル事にておほく
唐人より云ひつたへし義政殿以さ世にありし
尋り物とわからぬゆへに義政殿作と云ふ東山殿
御茶の湯の時十二律を御鋳有りて尺八せし
吹尺八へられし事沼鵠の日記に有りそれを
ホそれて沼鵠ノ時代ハ尺八せしと
されハ尺八の尋りものハ古代の作り
洞簫と尋しその後ハ義政殿作又彼の弥
まい御付七弦の琴を尺八て尺八せしをひ
も有りといふも沼鵠の日記にみえたり

一喚鐘をつかうして喚させりする事になれとも
世に利休に後の やうにかくおもしろく庭へあり
紹鴎の日記には樹木のあるの声をききて娘ゆかしき庭に
よりて喚鐘をつかうしなはおもしろき事にある也
物と成り
一喚鐘ノ鐘木ハ桑の木ノ自然に成りくて作ル
相合にめんをそるきる事口伝



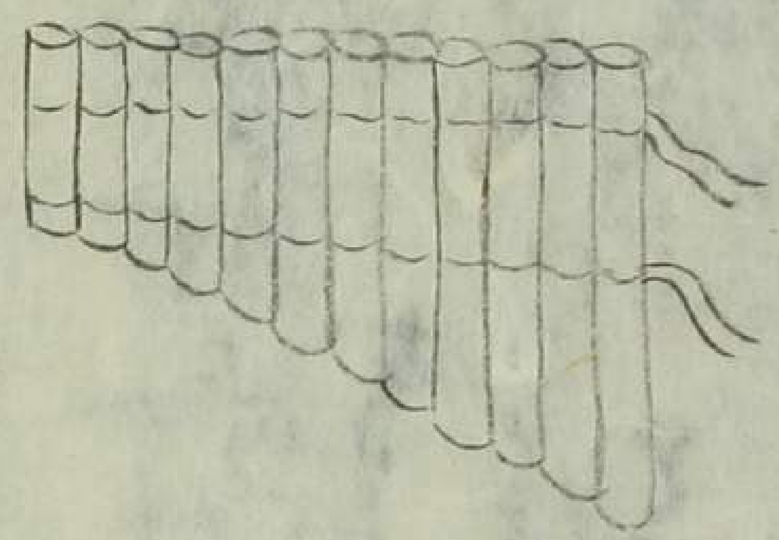
下ノ穴ニ糸ヲ付テ打ツ惣

右鐘木紹鴎のすはと利休もこれをもちひられしと
利休の作の鐘木武列に行はるよし又さし渡
の鐘木ハ近代の物にしけ法ハ鐘ノ大小によりて
長短あるへし
一紹鴎ノ茶の日記に樹木のあるの娘ゆかしき処にて十
二律のうち一つあり おもしろき事にも物と成り
されとはなはの音律と考へて吹きなはハ
ころよき物なるへしと云ひて図にあらはり
のこしおきしと今の世にしるす人はなれあし
今はなきによりて

十二律の図

壹越　断金　平調　勝絶　下無　双調　鳧鐘　黄鐘　鸞鏡　盤渉　神仙　上無

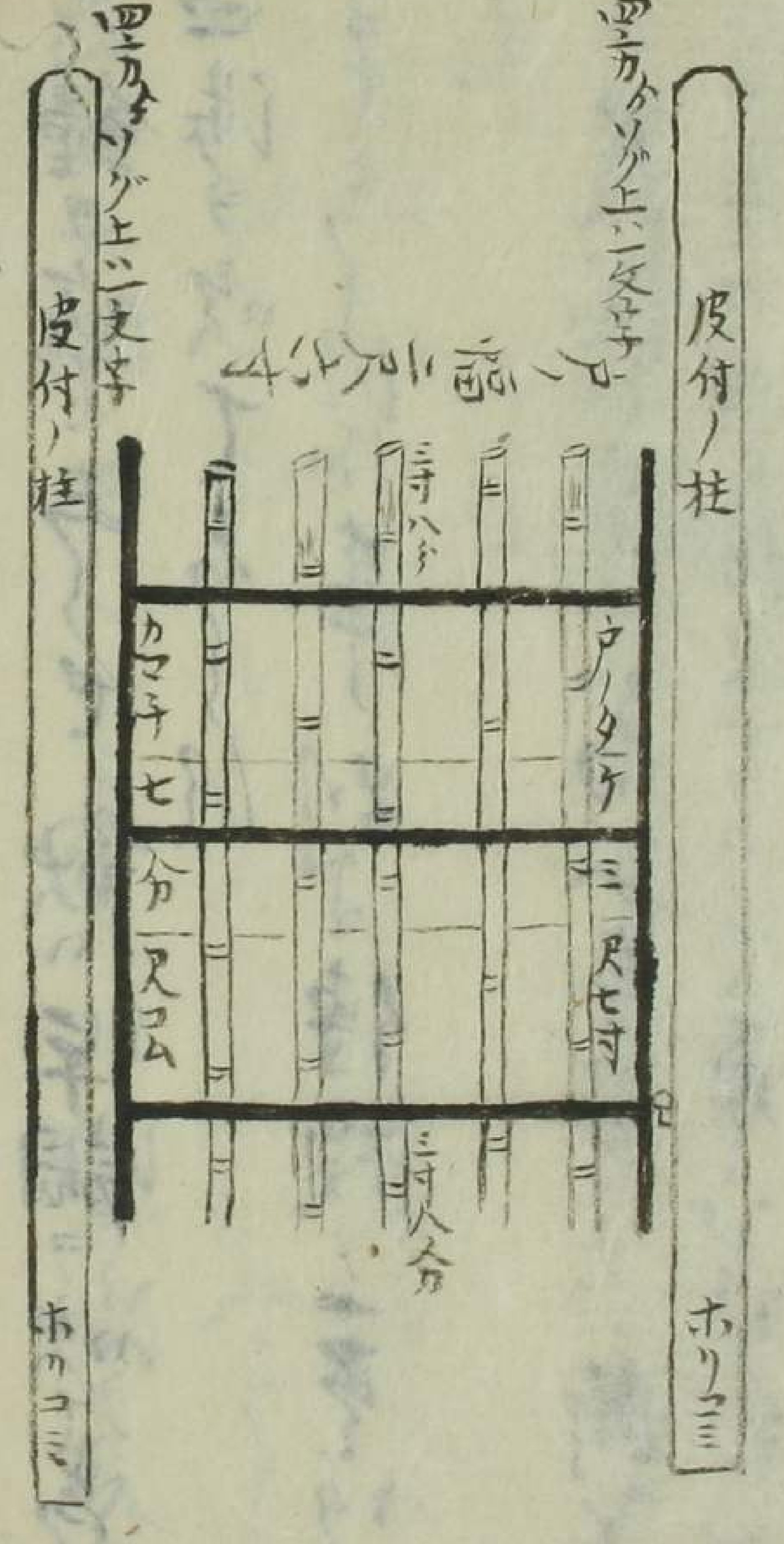
右十二調子也



春ハ双調ヲ吹てあそはせ

夏ハ黄鐘ヲ吹てあそはせ　秋ハ平調ヲ吹てあそはせ
冬ハ盤渉ヲ吹てあそはしけ
一調成すそあそはし深秘事別ニ傳授ノ一巻有りて
秘事也
一西東中蔵陽の事ハ両手あそふきの所を記つ
ますりてあつ手ニ向ますりて両手をいれてそく
ゆまきの人九すまりして床の間より付ほして
四ツに一を打絵の物打ハ打打し此時より東山殿御
地門をつはりして猿之居しに深さ深きの付
所ハ或ハ路地として庭ノ内樹をみるのをの道の
又ハ待合の尺付り又ハ長路地のあるのもかゝハ

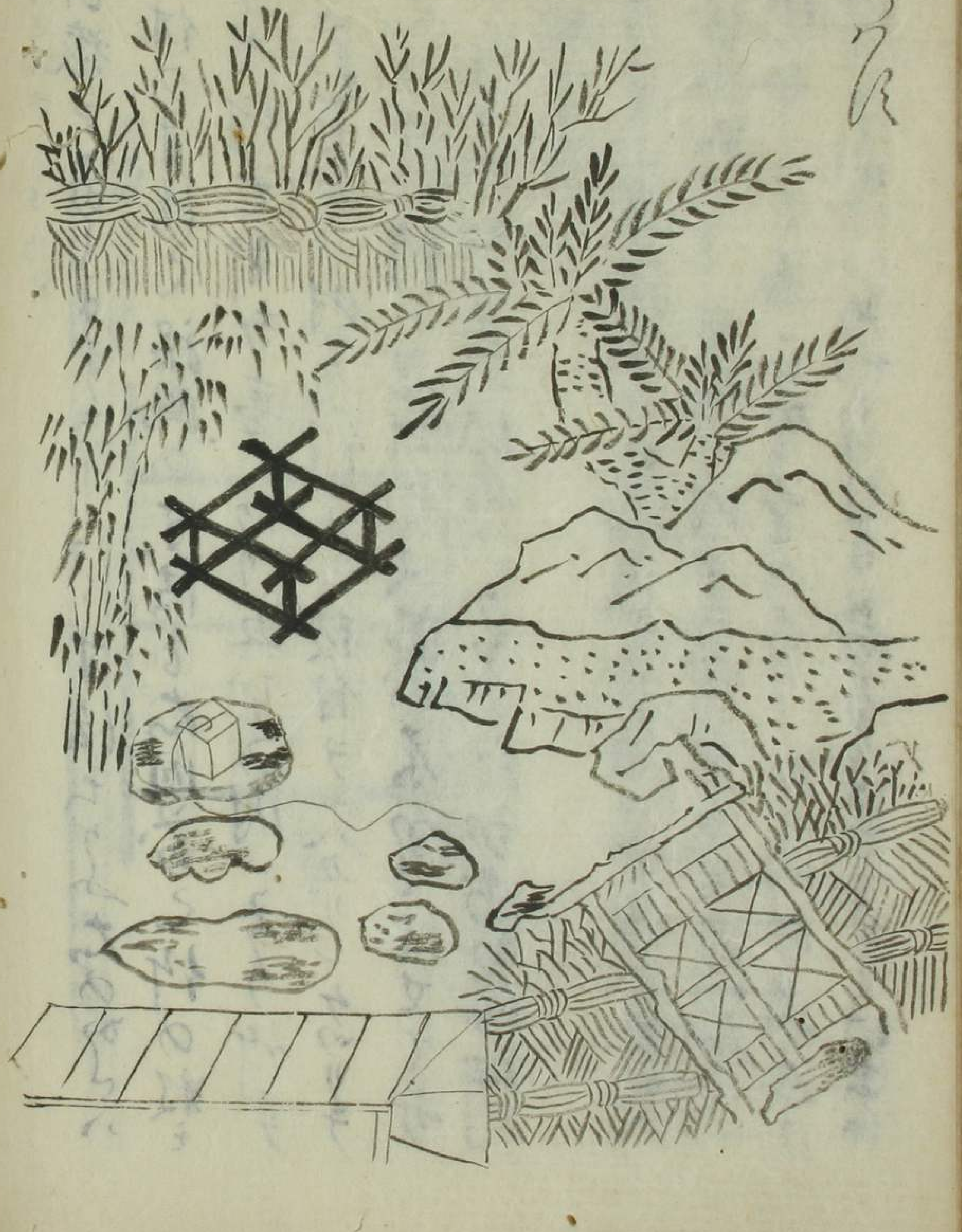
あまりよく〳〵と加減見所に付る事也 何か
少あまりきすへやさしからぬ様に戸中へ
よろしくの首をもりくるを取しに戸のヒヂかた
取とのしやうに三段厳物数奇の所によ
図をいたし



右の猿戸大概かくのことくにて寸法ちかひあり 右のかこいハ
利休の寸法也 沼鵰の寸法も大同小異也 竹の数も
ホソキ竹七本か五本事有り五本の時ハふとき竹ニテ
もさむ七本の時ハ丸竹まて 板付ヲ一分カリシケツリテ
并に上下の竹ハ丸竹也 又萩の本所を使せて并
事也 かくのごとく図の外をとり称しかか称細川
数物すきあり
一四畳半の図 沼鵰の日記に見えし時ハ今ほとくせとに
まは内取し 沼鵰の時も図のむかしまで覚ひ
家ハかくして図もかりをのましおかれたるやまる
うらしされともめつらしき図なるゆへ有けるに

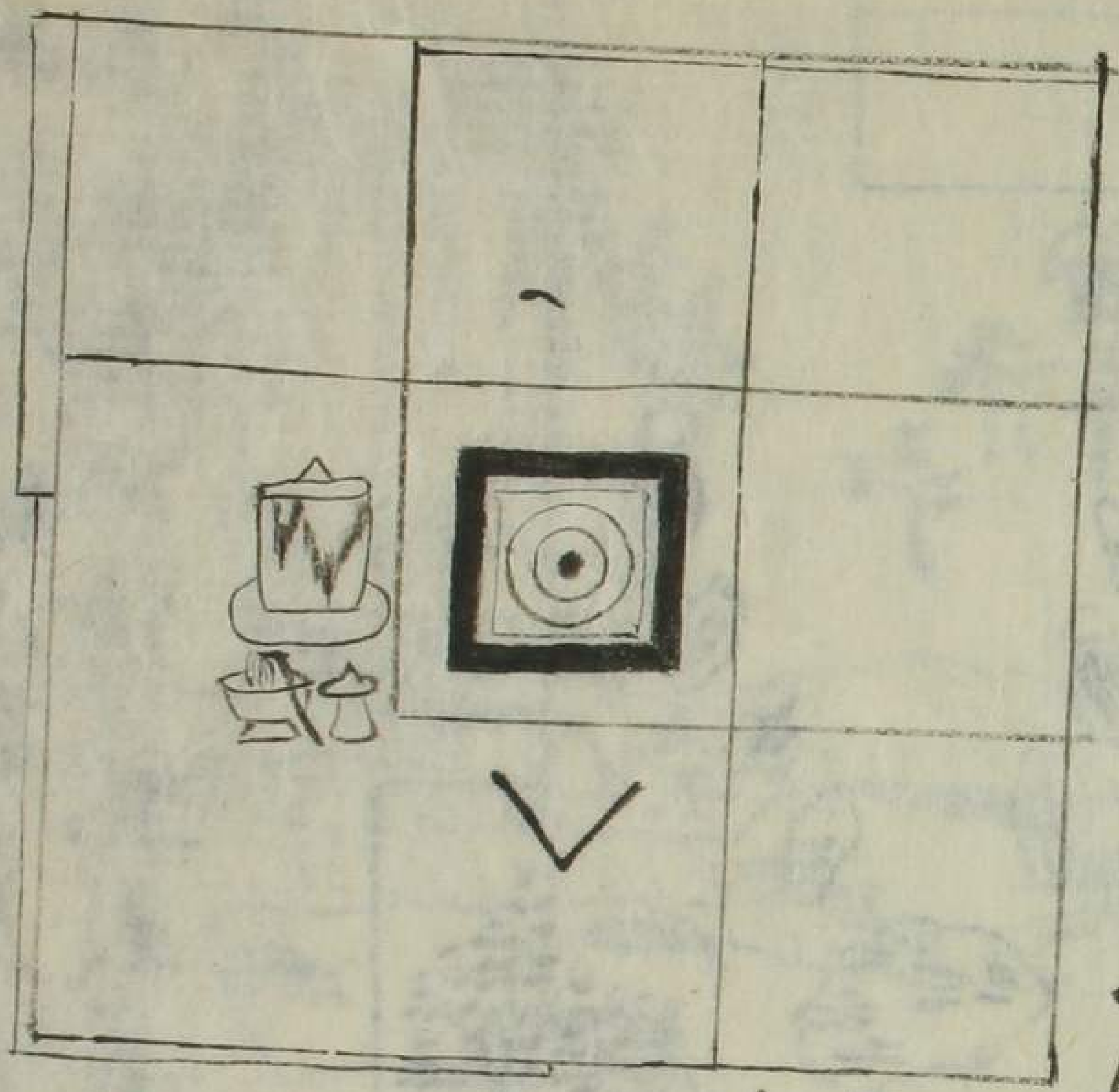
右の圖ハ猿戸を構ての道ニ付たるものなり
庭ニ井をほりて井筒を足自然作りの柱
ニ釣瓶をかけ候その
手水鉢の向ふニ枕露を仕候事も此附合物
作りて當世品々の物数寄有り
古代ニ庭ニすりし戸といひてことろがらし
のおくしし候さんころをうつして猿戸ハ
物数寄ニ候といふ説あり又一説ニハ平地門と
よつし候ともあり沼鴨の日記ニハ東山殿
平地門とうつし候ともあり
一西ニ其ハ能阿弥の物数寄ニ候と利休の日

ゐつゝ

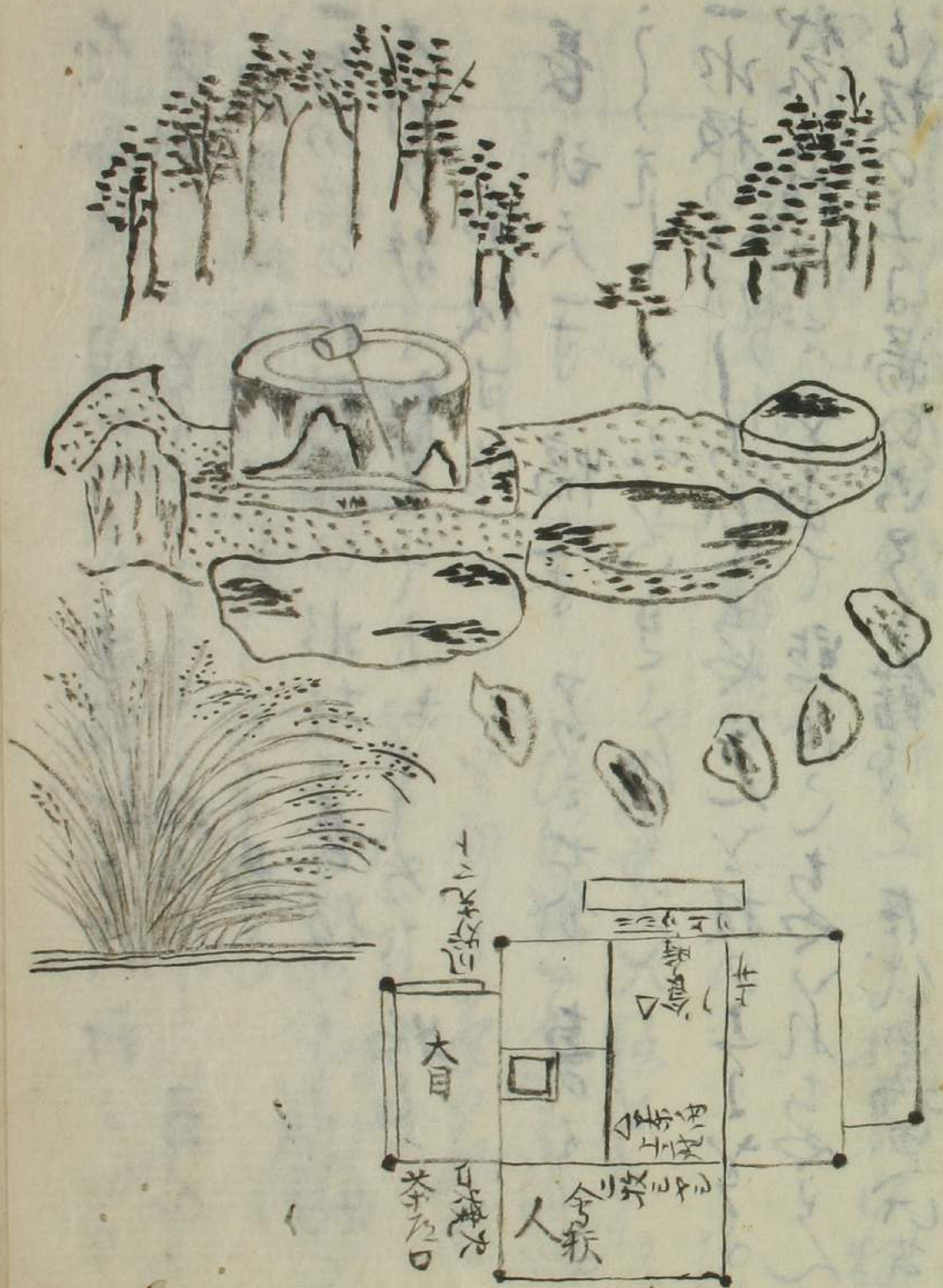


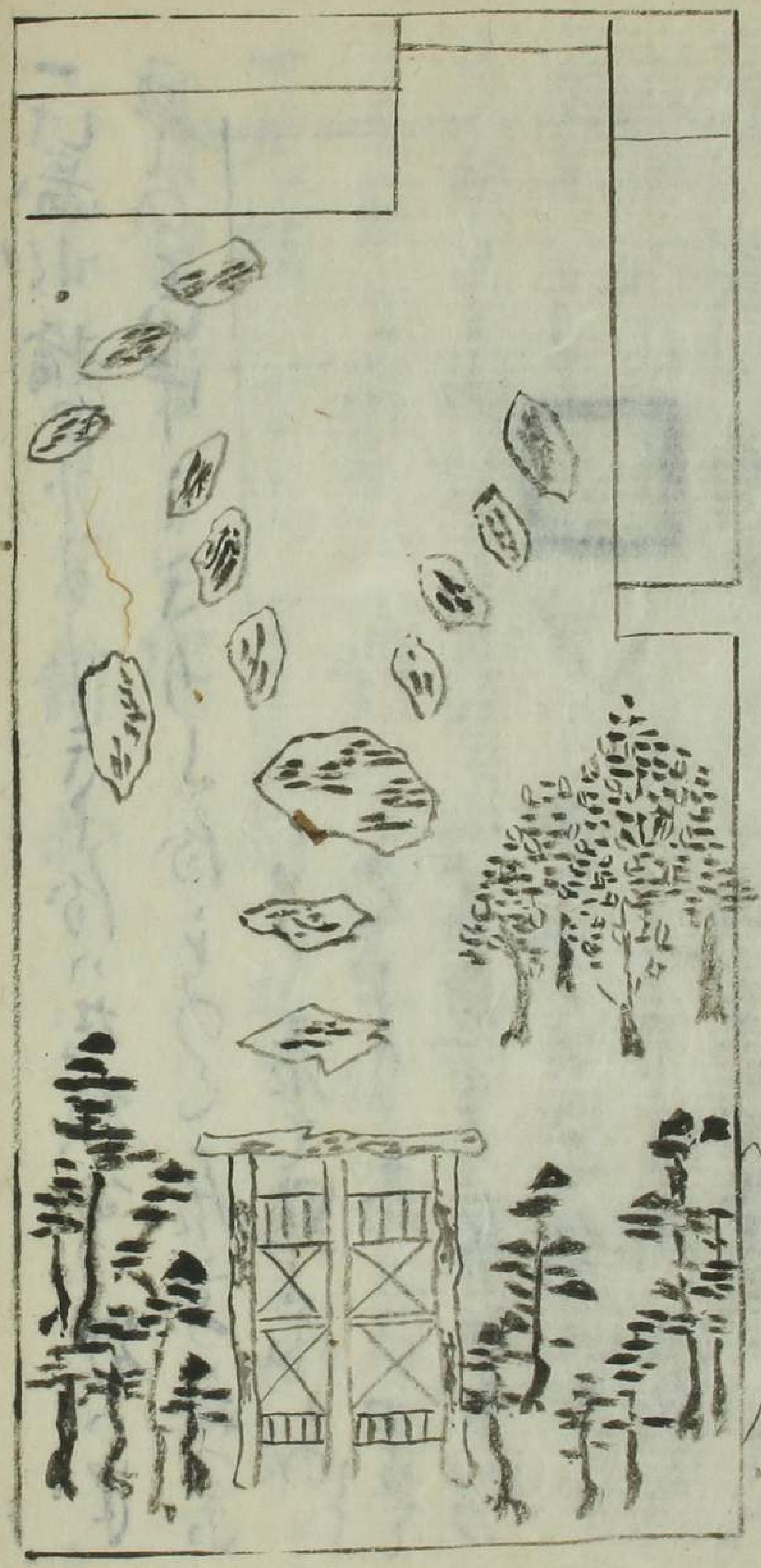
記にあり右ハ違棚なとの上ニ茶入茶碗などハ
飾て點ずるの时これをかよひて出して置物と
南せかよひ手前といふ事これ皆おなじ事也
右ハ炭の跡にて湯わり香あけし也
一此时代ハ四畳半の中ノ半畳に炉を一尺六
寸にきりて土壇を丸クぬりし事也
一此时代ハ水板とひとて水指の下に丸き板をハ
しきて水指を飾りし事なり
一丸板ノ寸法 さし渡 九寸 アツさ七分ニ
本ハ黒塗ノ生地
四畳半 飾ノ圖

一此圖水指の下にしきし板ハ丸板なり炉ハ半
畳の真中にきりし物也その后茶の圖の古



そく居て點ずる物也て
又ハより點ずるハ南せの四畳
す點ずるハ居知名別
茶をのゆへ今此法に
うつしいれ此圖ノ
古法を湯わりて點ずへく
書にハあらされとも
圖出スこれに記ス





一織部殿ハ細川家へうつしおくられ四聖坊よ
の露地也松何強の物数寄のよし 細川家ノ
出よ又ハさうり

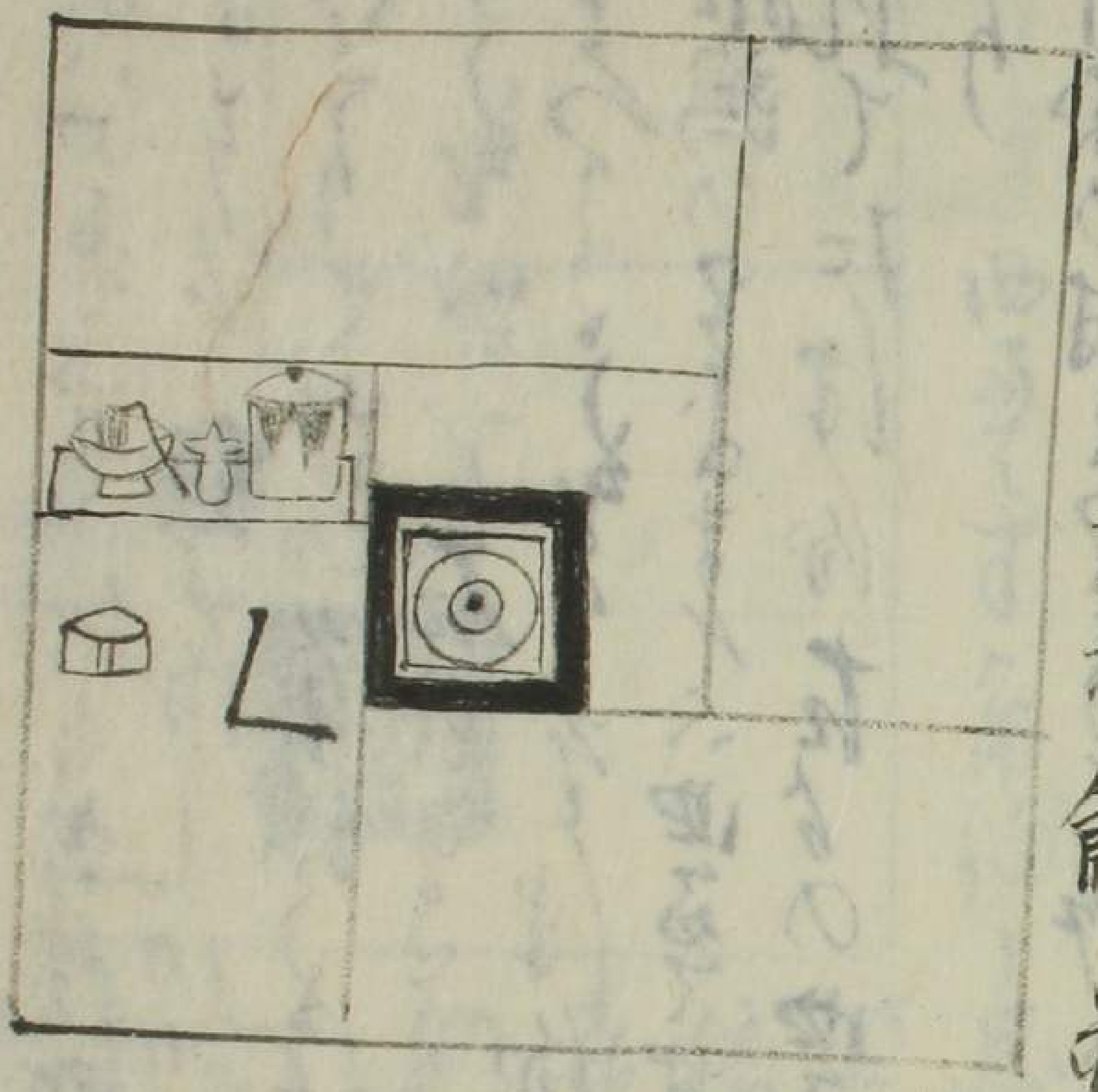
右の圖床の内かべにて懸物釘も竹釘に有り
違棚なとよりてこゝに好みなきの事なく
又長棚をはりおもしろき圖也
一相阿弥の物数寄の水板ハ長板のさしとなる物也
大目の台子に飾りてもおもしろき物也

水板寸法

長弐尺一寸　幅九寸　アツミ七分　表のまゝに
うるし　たゝみといきとなるもの也
一水板のあしらひハちやきんを板の上にをき
袋も板の上にをきて點て候ちやいれちやわん
も板の上に置の古く飾候古代の物也へ出ス

ふりいれ此時代ニハ四畳半ニハ相阿弥此板
如く飾り候由

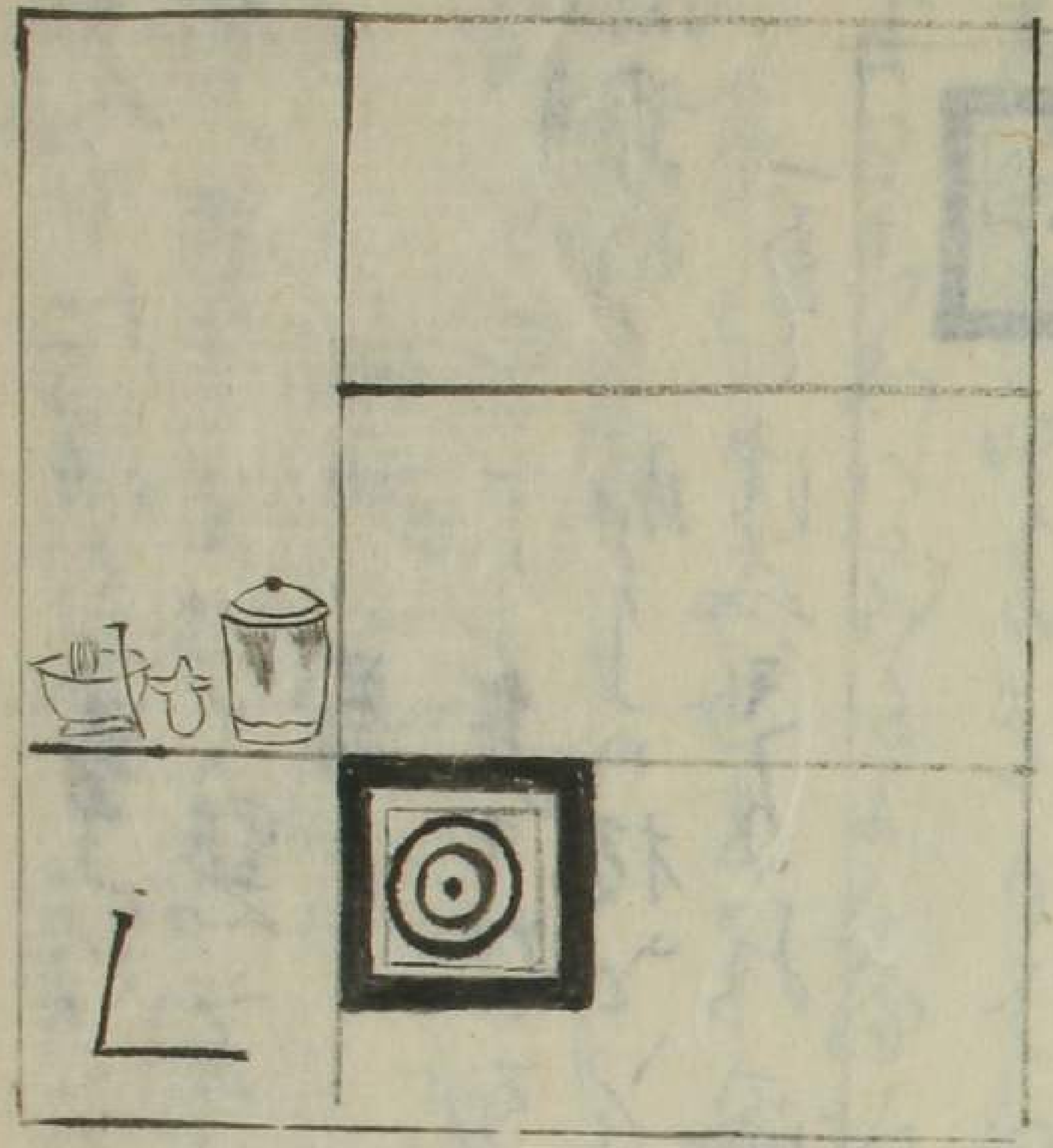
四畳半水板飾圖



当世ハ此板をおもひ
ひしと點せかつかぬなるに
てなし茶入茶
碗ハ下ハ水さしとて
常の古く飾候
こと

一 古ハ四畳半にても書院點前にても炉をハ左ニ
向ありて點前ありけり 紹鴎利休の時ま(?)
まてハりて炉の角を切て 水指をたの方に
まうを炉を右の方にまうを 台子を
ひとつにまうそ 其は間(?)事也
一 紹鴎のころまては四畳半の書斎 下炉と
いれてたけ(?) 右の四畳半 今銀閣寺に
あり
一 利休の時よりて炉も一尺四寸となり 土壇
を角にぬりて灰をて 丸き形としたる炉
中の灰ノ角させれと 古代をあらためて 灰ノ角ハ

きりさばきのし 其後穂焼灰なとの風情を
物数寄て 茶の道おのしかくなりにけり
四畳半角炉ノ図

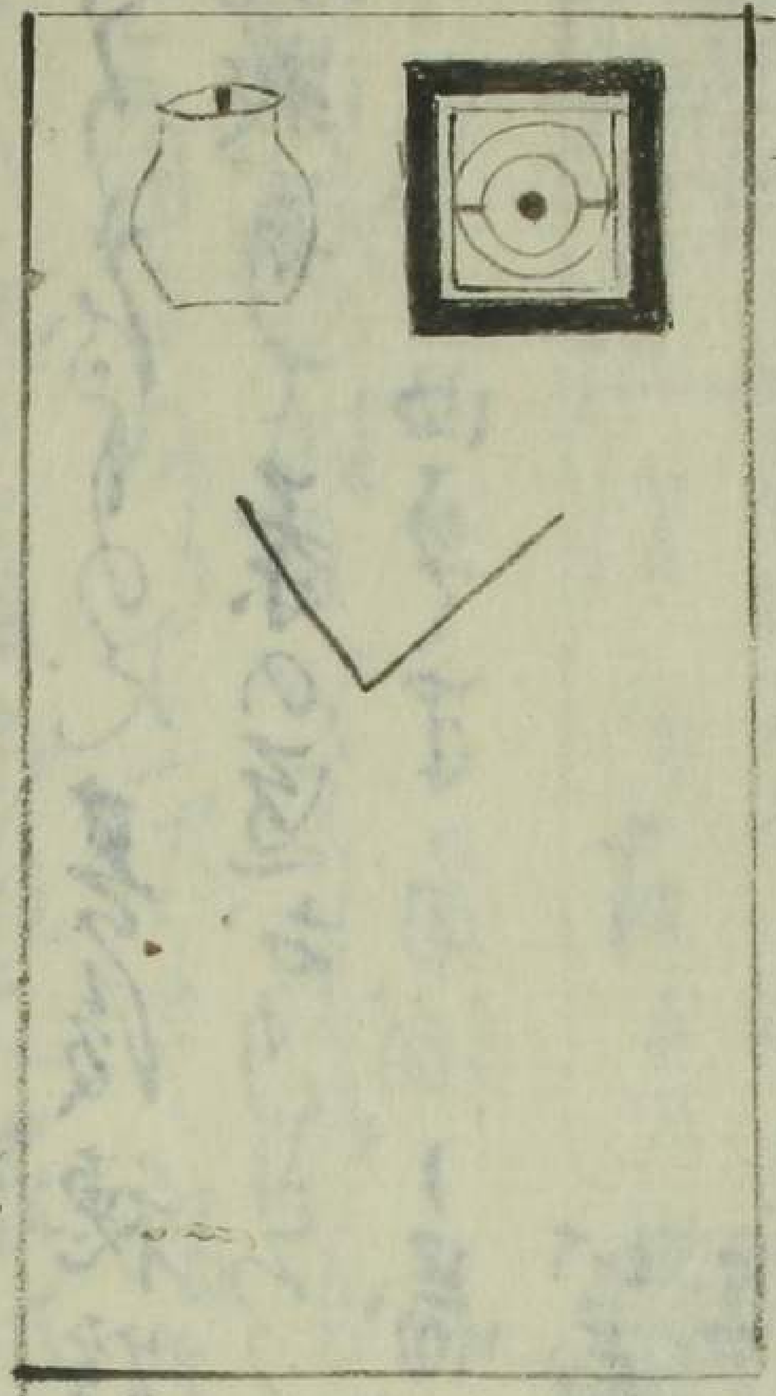


此図ノ出とく 其餘(?)は
絹(?)のかさ(?)のすみ炉
所畳をよくしてれ(?)
のむりふと床(?)
とり添れ 三畳の餘を
客(?)とみえり しに
主(?)のさハの角(?)
炉をいれ 或ハ中柱なと

すへてたはふ事なりこれハ席の前より見れのまて
裏ハ四畳半にて點茶ハ三畳大目の格也

向點の圖

此炉ハ世より多キ炉なり向ふのよせ板何枚と
同茶なり服りハ板といふ所ニあるか又半席迄
一畳ハはつきりみる圖

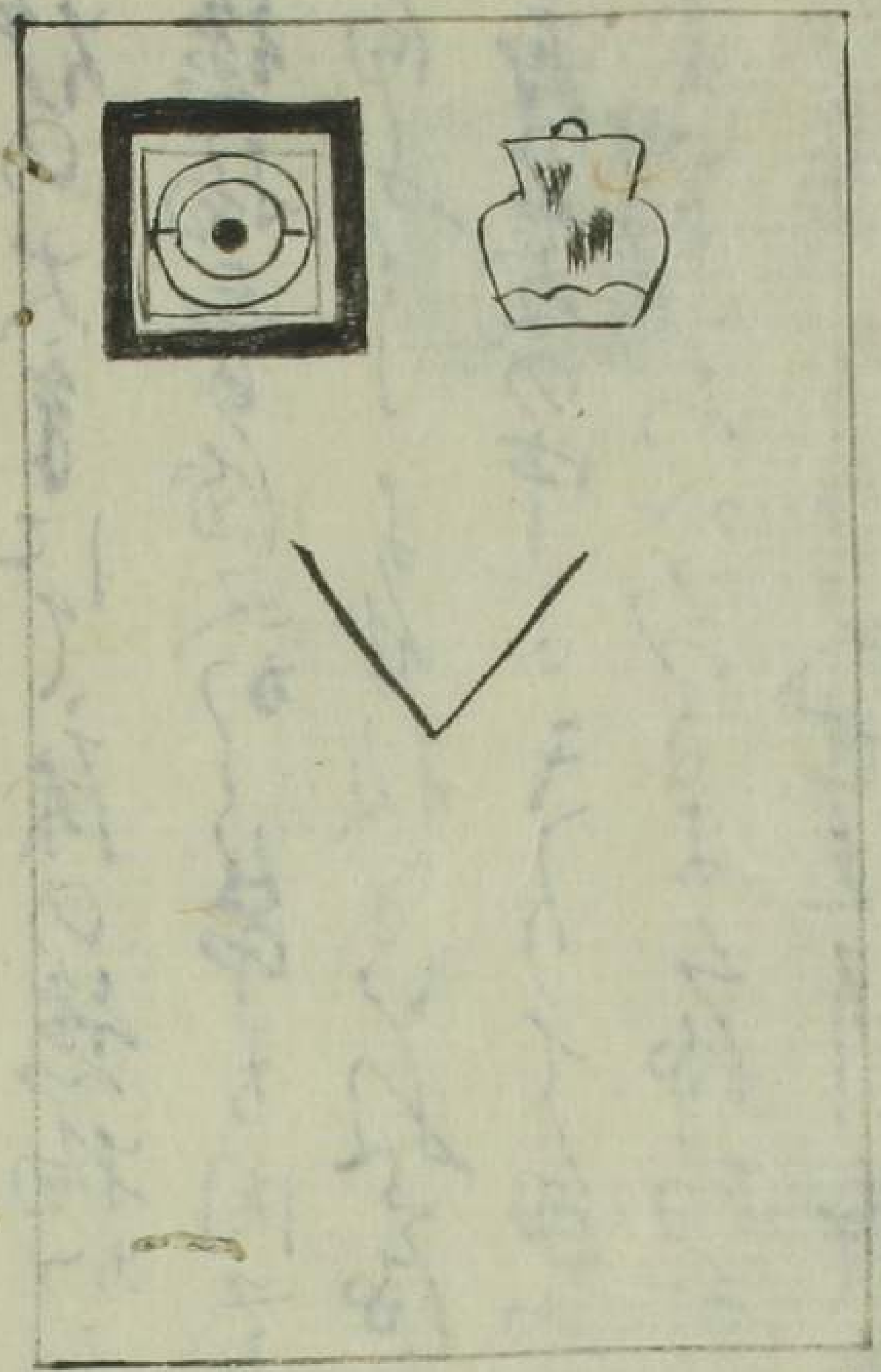


前との座中ニ切し
とをいハ向ふの板もなく
てもよし織
向ふ席かこ也
前との時ハよせ板ヲ
いふ事に故なり

炉の大字にて席の總構かくく又ハかこの湯をまて
總構を向又かこ也も同茶なれともよ所なる
向ふりよせ板といふ席ニよるよ所也へり
席中の中にきりて向ふる席もかこ也もなり
むすふハ前ニ入席構なりよせ板なりあるハ
ぬ事なり又世にあり席中の中に向ふきり
に炉をきるなりそうし　略なれ事なり元来向
きりハ或ハかべのきハか席のきハか又かこ也なり
きハよきな事なり點茶ハ前ノことく炉をきり
極をとりて向ふ事なりこれにちかひある
いふすなりそれ茶室に記ス

角折の図

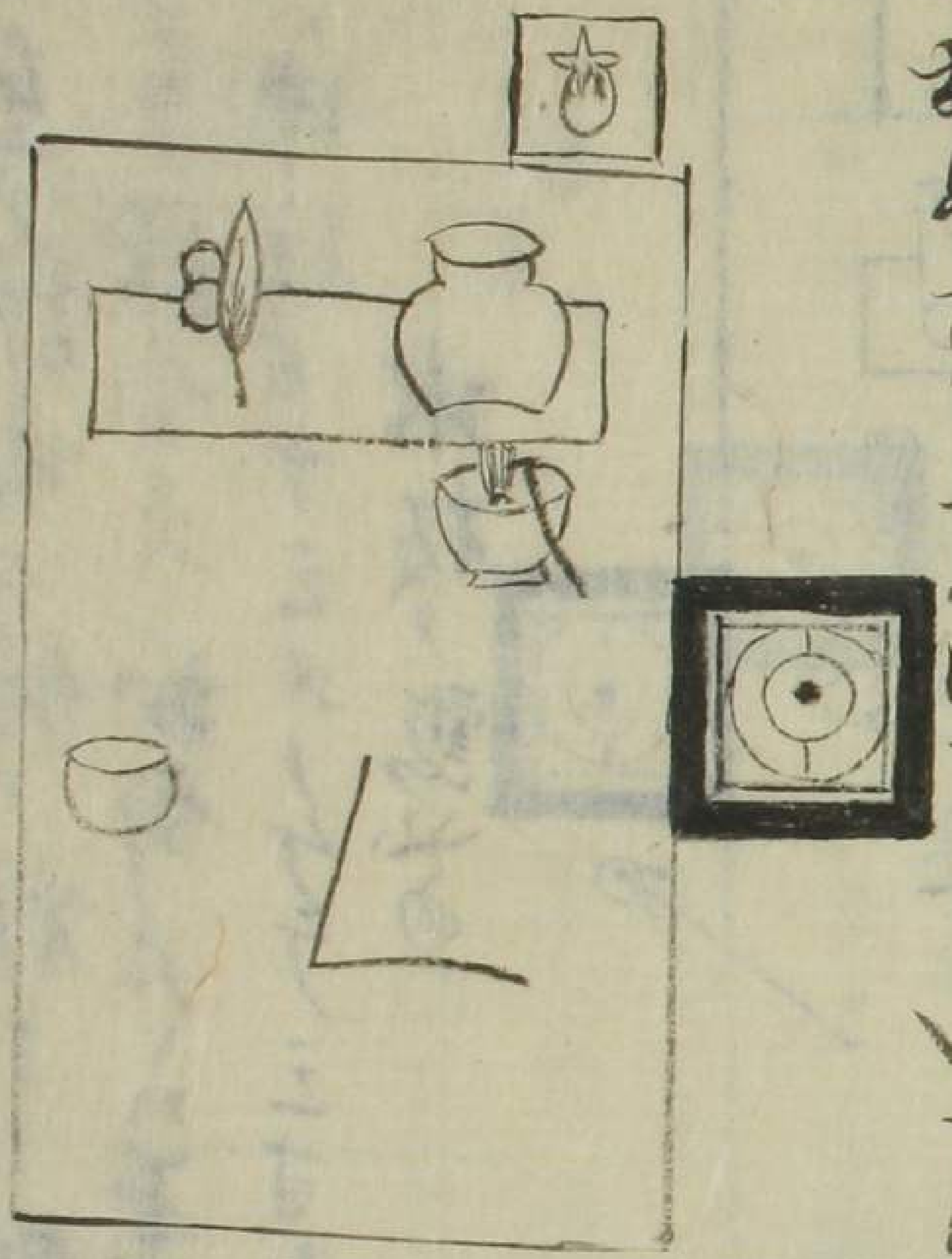
此折も世上ニ多く筆折有り白ニてかくべきハ白ニ
まぜ板ばかりこれも白ニ而折ニ同しく有り床ノ
内をよきをかくべきハ少しまハりをよきてかき板
をいふ事有り白ニ二寸四方ニ縁手ハいつれも七寸
ま板をいふおかみ合
ま(い)ふもかり一文字ニ
いふもかゝれも
ちしかゝれ床ニハ
図ノ古くかくべきハま
水古ほしそくれ



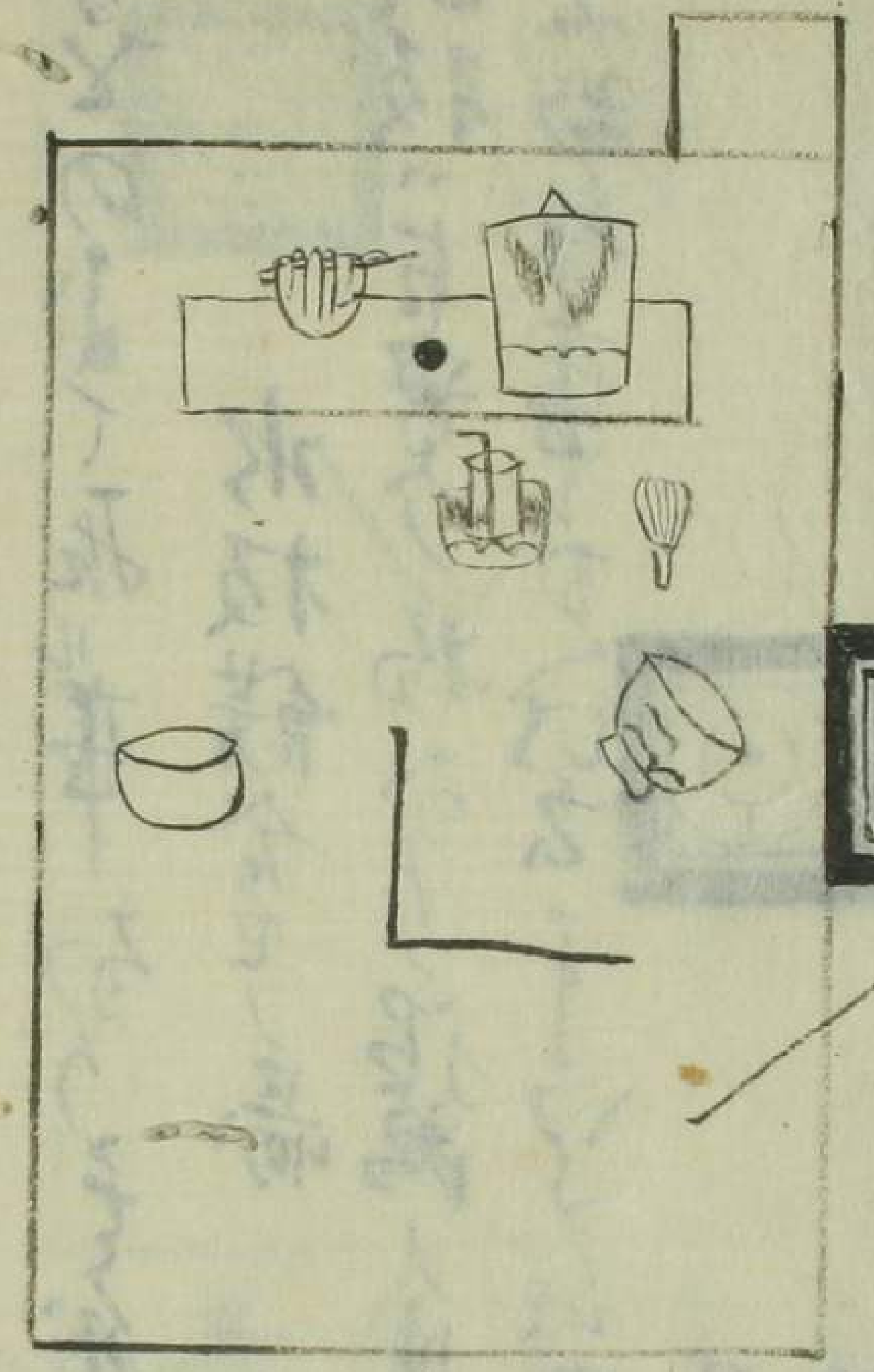
百をのせて居ル事有りさも分ニ書ニ候よ

水板餝合セノ図

此板ハ古實ノ物有り沢鴻ノ目記ニ此法有り世
上ニ多キ事也此図ハそれ點無ハ別ニかなさい
又有り葉入ノ袋を
鉄羽ノ踏ミをよ
茶巾を水指ノ左リ
板ノ前ノ上ニ
事有り又葉
茶碗を板ノ上ニ
餝ル事も有り式ハ



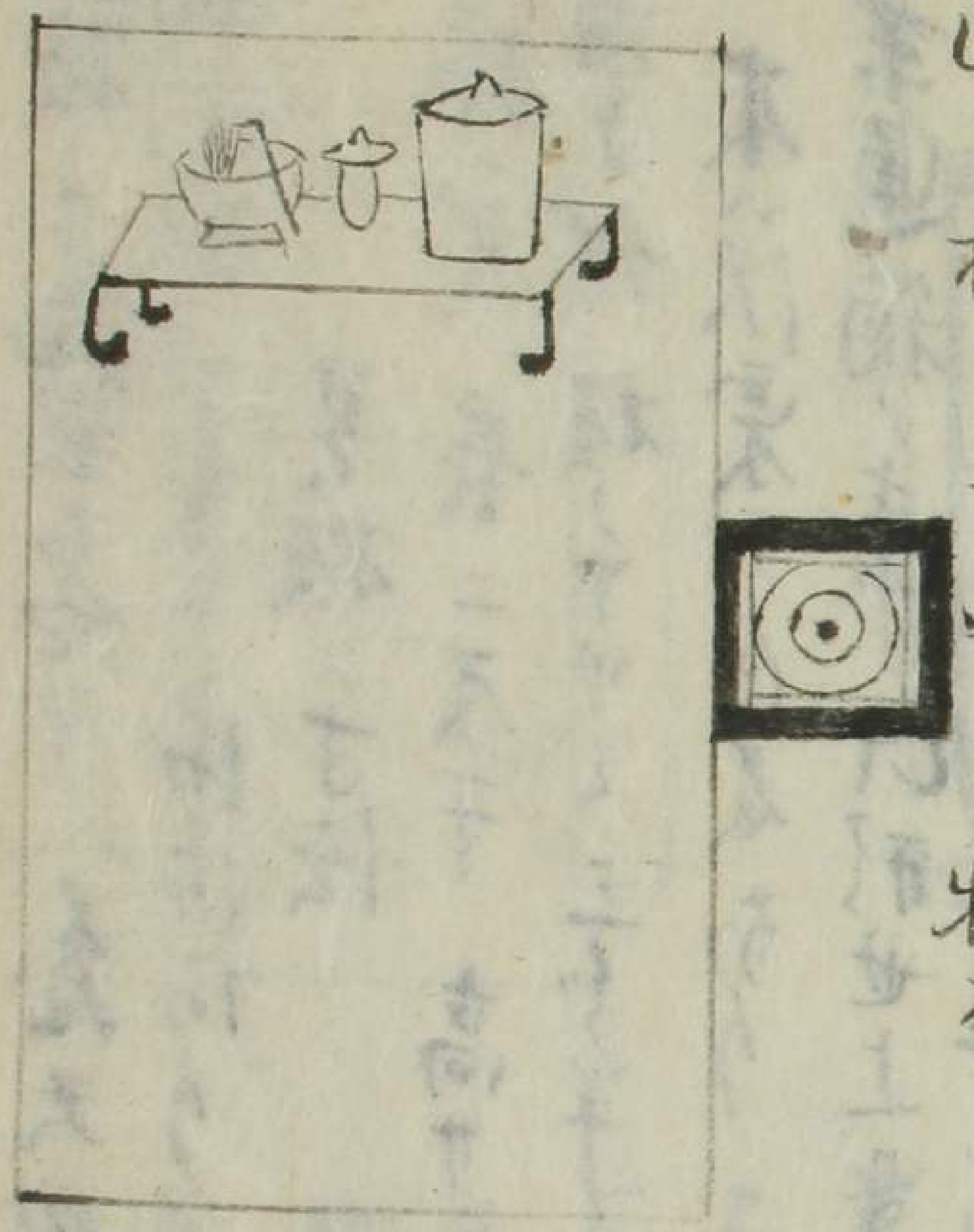
自在ノ炉式ハ鎖ノ炉アリ餝ルトキハ三羽ト竹
箒トヲ餝合スヘし去りなから茶入ハ餝ヌカヨキ事也
板ハ中柱より十三メノ所テ三寸程向ふへよせ[illegible]く



水板ノ點前

一 右縁ニ大縁ニ
いつれも水指を炉
の方ハ餝ル事也
茶巾ハ板ノ左ノ隅ニ
し入れてをく水
指ノ蓋ハ板ノ上ニ水
指へよせてをく

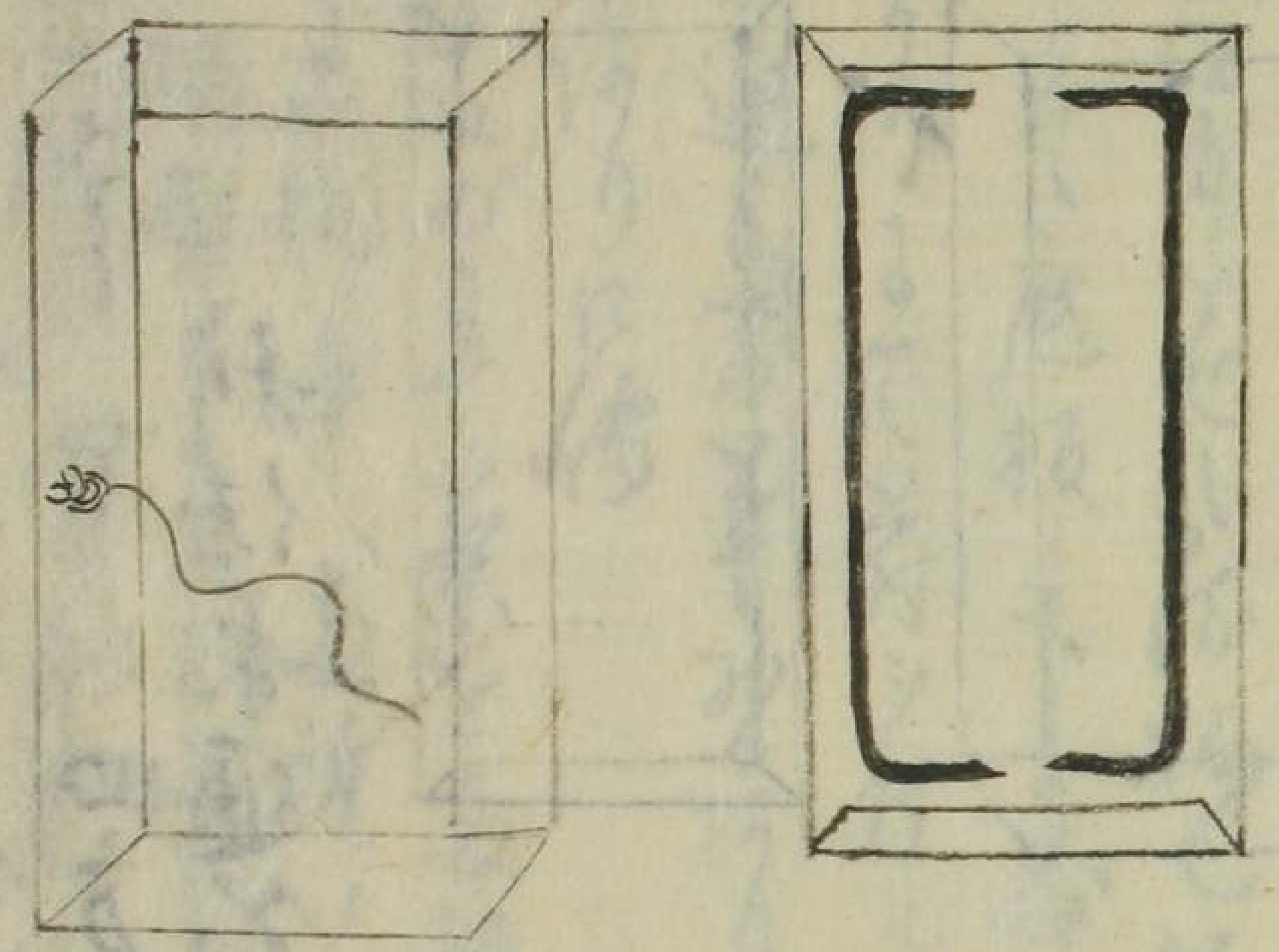
事あり仕舞ニ蓋置を板ノ上ニ置跡ニてをく可
もあり是ハ外常ニかはる事也



足板餝合ノ圖

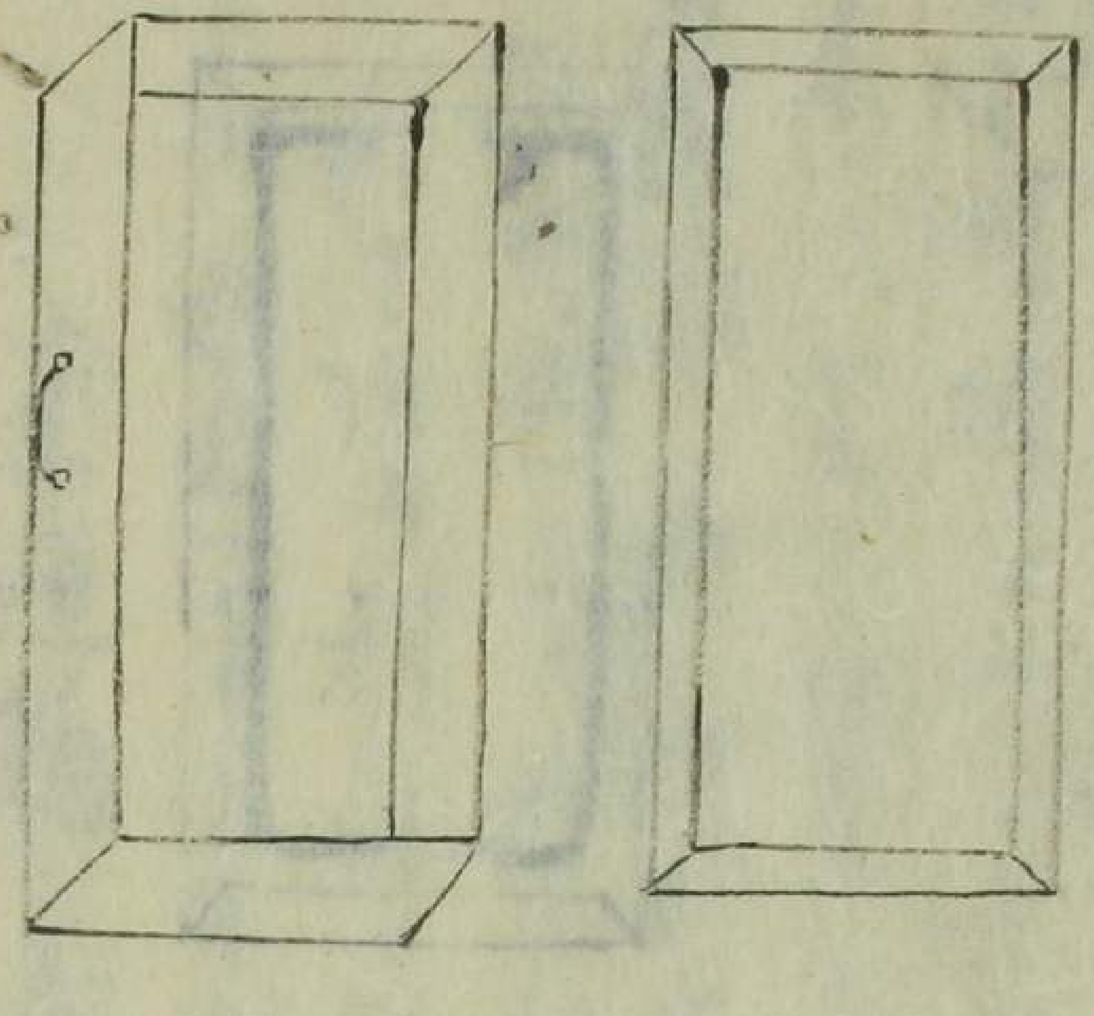
一 さし足板も古實ノ物あり これも紹鷗ノ目論見ニて
みくしり世上ニ
沙汰ある事也
さし出しいたし板ノ
形ハ文庫ノふたのことく
物と足四角ニ
有り點前ハ水板
と同事あり古ハ

此板ニて袋ちや入をふ天目取て點て候よし
細川殿ノ書ニも此法有り
足板ノ寸法
一幅一尺 長二尺一寸 高サ一寸八分 足ハ四寸ト
角ヲ付 板ノアツミ三分半
本ハ沢栗ノ白木なり
一茶通箱ノ事 此形世上ニハ流布なり 利休分
去大家ヘ進上ノ形ニ而利休ノ袖箱ト申ハ
右ノ形ニ有り利休ノ作りも見え又他人ノ作た
なし 世上ニ有り流布ノ形也 以上
茶通箱ノ図



箱ノタカサ二寸三分
一幅 二寸七分
タケ 六寸 三分
ふたれも内ハ同し
蓋ノ方ハ少しふちら
なしをみ有り六分
蓋ノタカサ幅一分
タカサ一分リて
無板ノアツミ一分リて
底ハ一寸上ニ鋲ヲ付ル
ふちまわりを付ケ

左のごとくに蓋ヲ付ル　木ハ鴻桐白木之
箱ノさし　やうは四方おりみぞするすなり
利休茶通箱ノ形



此形ハ筑前宗福寺ノ
禅師ヘ利休台子茶ヲ
点候をゆるし時
の茶通ノ形也
寸法ハ前ノ台箱同前
木も同前
一蓋ノ点ちまうら
おしきみになりて

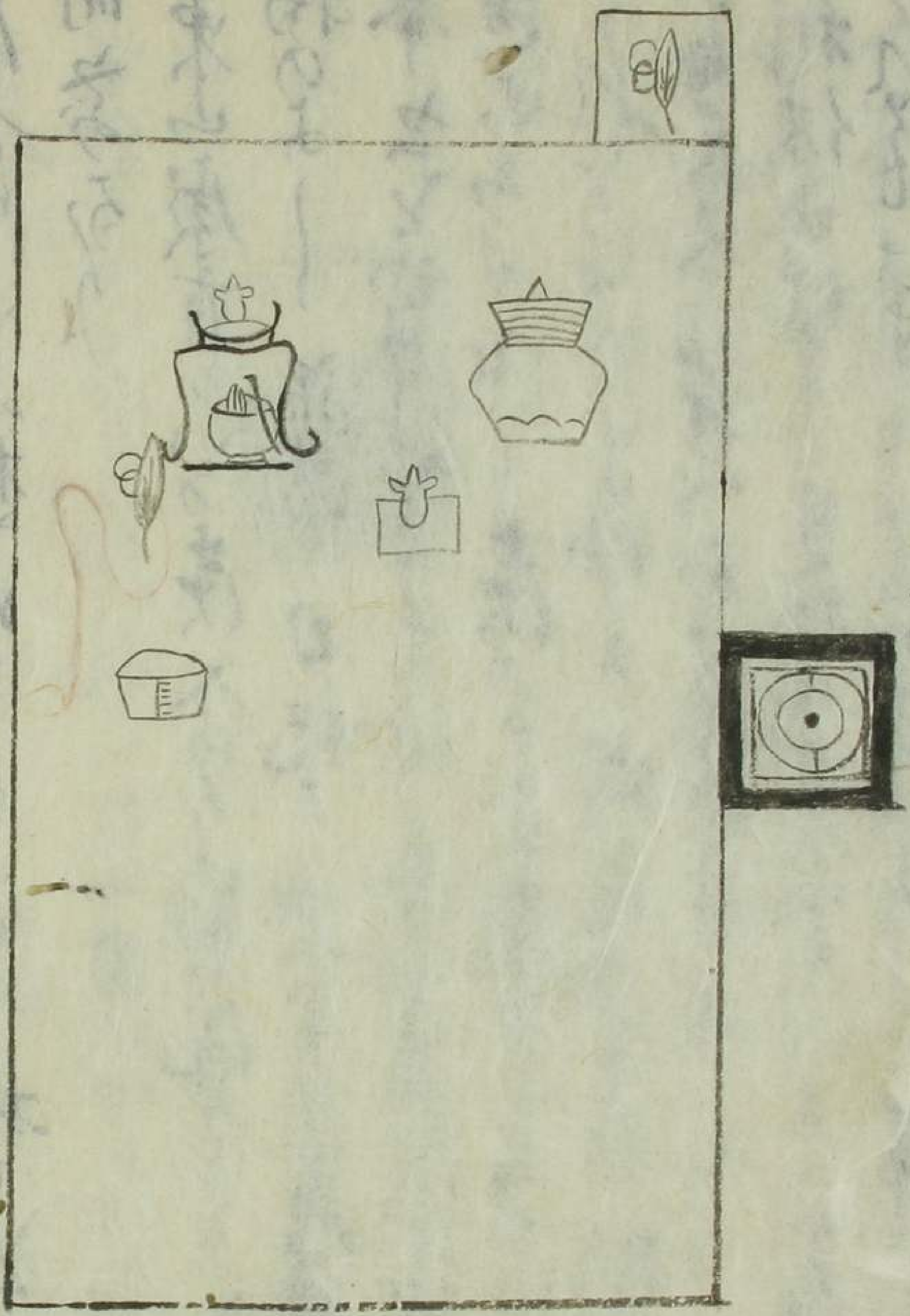
さん吹しおして四方ヲ一分ツヽほどにほりて
蓋をすりあはせし所ハ相違し箱ノ底を一分ホトにほり底
をして底板ノ下ニ出ノ右ふたく穴ヲ銘ツにほりて
ほどりまて蓋ヲ付ル
一茶通ニ茶ヲ入て習ひり新茶ノ箱ニ入て餝合スル
事ほりは傳
又は茶ニて茶を点候ワしたる事にほり
ぶは箱ノ中ハ点候ソれて棚ノ上ニ餝事也
袋棚なりとても上ニ餝ル様ほとて吹
一東山殿茶人は茶ワト云處ほり唐銘
なり上代ハ是を除茶ワトツ小中次を茶ワト云

唐まて数寄を好いれ候物よし東山殿御
て茶ノ湯ヲこのしたまふ時これに炭渋い
いれ来由いしか　さてはさかりて籠り炭
といふ事也

一底に足ノ有り板有り
炭をハ立ていれ候よし
竹ノ底ハぬき物ヲ組
ぬりて漆ぬき漆ヲカキ少ル
物よし
一埋ミかくのさしよまの
候炭入此ほとの足を

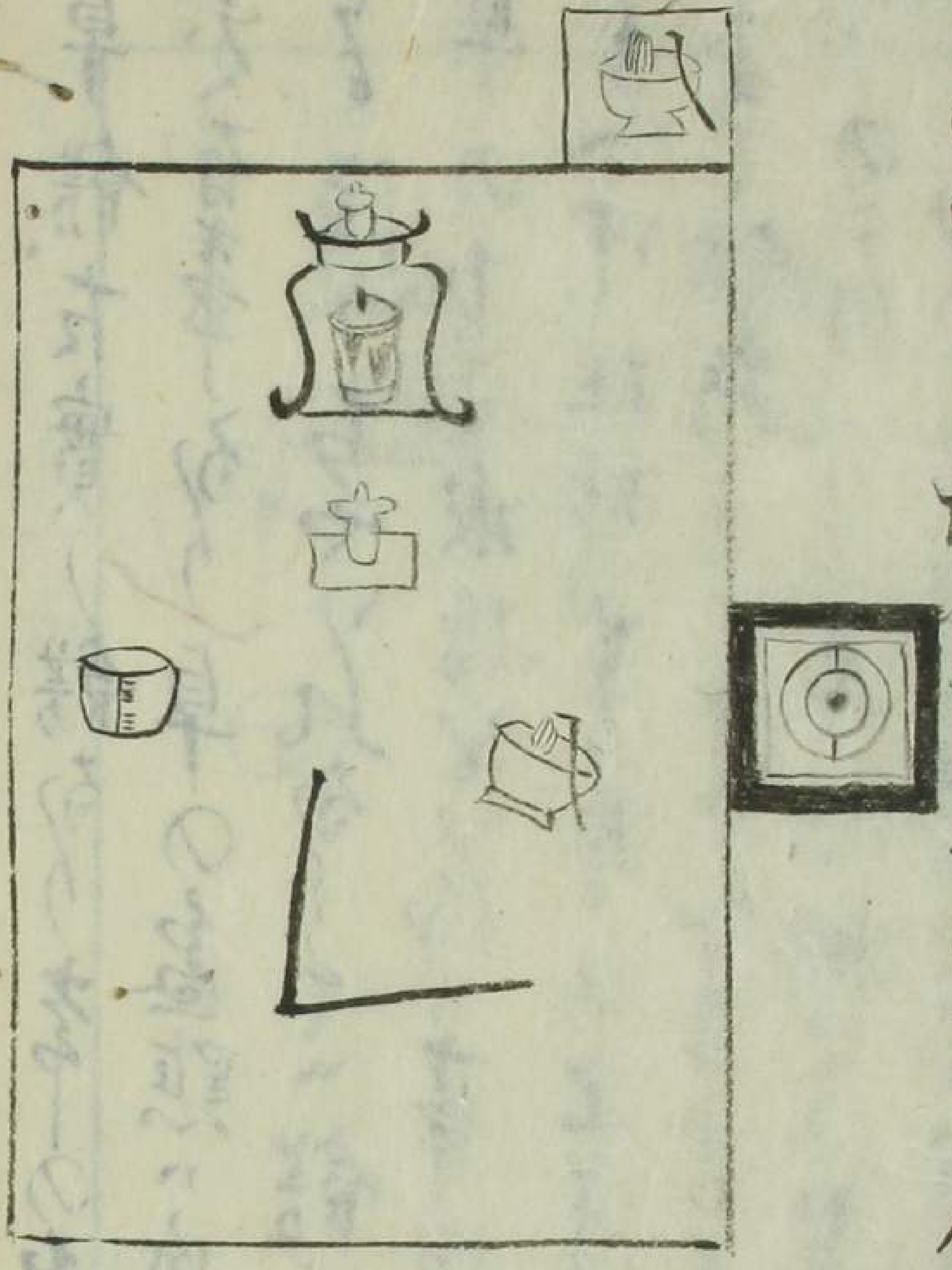
炭入の中ハいれ柄を好ちハあまたて捻ていとは三羽も
同前なり
一東山殿青りハの炭入ありける東山殿その外より節
物のよし　紹鴎ノ日記ニハよりて唐物の足付と
奉書を記すをそて浦を上る炭を御茶有り
近比ろか有り炭のこに炭をとくみそいひ足有
これとは相ひてつすこ弐ハぬり足有　松の足有桐
の白木又ハ好みて所々物数寄なり
一利休日記ニハ足有ハ一尺八寸四方に高サ三寸五
ほれてもはまはてもかるはましに革有り向ふ
ほゝてみハ小ふりな足有をいれ候よしなり

中央の卓飾合せノ図



右の卓ハ飾古實ノ飾なり常の臺子ハ其上ニ
毎度有事なり卓の臺子ハ近きころはやりて
かへる漢ノちやいれなくてハ飾らぬはなり
又卓のわきに水指をも置事有りて茶入の代りハ
置きて中柱ありても卓の上ニ置へし茶
すへて仕舞あれハなんそれも三羽をも一つに
飾りのこともへし卓と棚との習のひとつにて
茶まつて飾ちや點の事は乗じ茶入てを
卓の上ニおくへし引くや臺子ハ卓の下
ま何もそてもし
一段とし置いて錺を縁ニ置くなり常と又置し

きく事もなかりけれハ貴人かりの時の餝なれハ
鏁をいやりのよし　きく成り古實なり口傳
一かうの古ハ水指と卓の下に餝ハ常ハ大



目の上に置りて
卓をかけりて
茶入ハ棚餝
にするもあれ
貴人の時のこと
也貴人ハ臺天
目に飾る也又人は
よりてかいのこと

ろく常のちやわん點するまゝなるなりし卓餝
ハ一臺天目を餝合候すハ傳授するなり
一真の臺天目ハ臺子まで皆法候するなり
一大盆の唐物點ハ餝ハ一つ有り茶を通称覧
是よの唐物點なり代記の茶を知習候
一長盆點ハ一　真草行ノ三つあり傳授すること
一臺子長盆點ハ真草行ノ三つあり
一長板盆點ハ真草行ノ三つあり
一臺子ノ式正傳授之
一棚ノ餝合スル臺子あり　傳授事あらし
一極傳授ハ長盆之臺ノ之臺天目　真草行之

一ミしせの吟物十二月晴夜月夜風あノ夜雪ノ
夜雪ノ暁十二月ノ上夜あるよ利休の一覧なり
傳授し

古今茶之湯大全巻之七
一服アソれ茶よなとありひよ候そよハ
二三日も前つ方ゟ案内申候へし
○表中小書日付刻限を書付ても事なり
文字小かなゟ線なとして風流に書たるか
能とあるとて先生乃あうけせるり
○亭主ハ前日ゟ庭落ツりの掃除能可付事
あり戸をでくなしとのあそうハ隙くホとも
ゑものあるきハ能こしらへ付へし
庭の内の掃除ハもとのまゝとの好みがあれ
ろまもしめふたしてやしにまへし

○客外方ゟ返書取へし若他行なとにて
出状をのこしおくときハ留守居見此
ありさまをのべ先一礼乃返書可取へし
○客前日礼に行へき事なり於家用事なと
ありつね行さる事なり又ハ於途の事なとハ願
門迄て久待へし
○客月代洗め髪なとこしらへに湯あひなと
して連衆中へ知らせ刻限を定め前方
に待あひ行ありてよし
○客其日にいたりて五辛の類食を慎むへし
薬味を損するものなり又ハ(?)補物を持

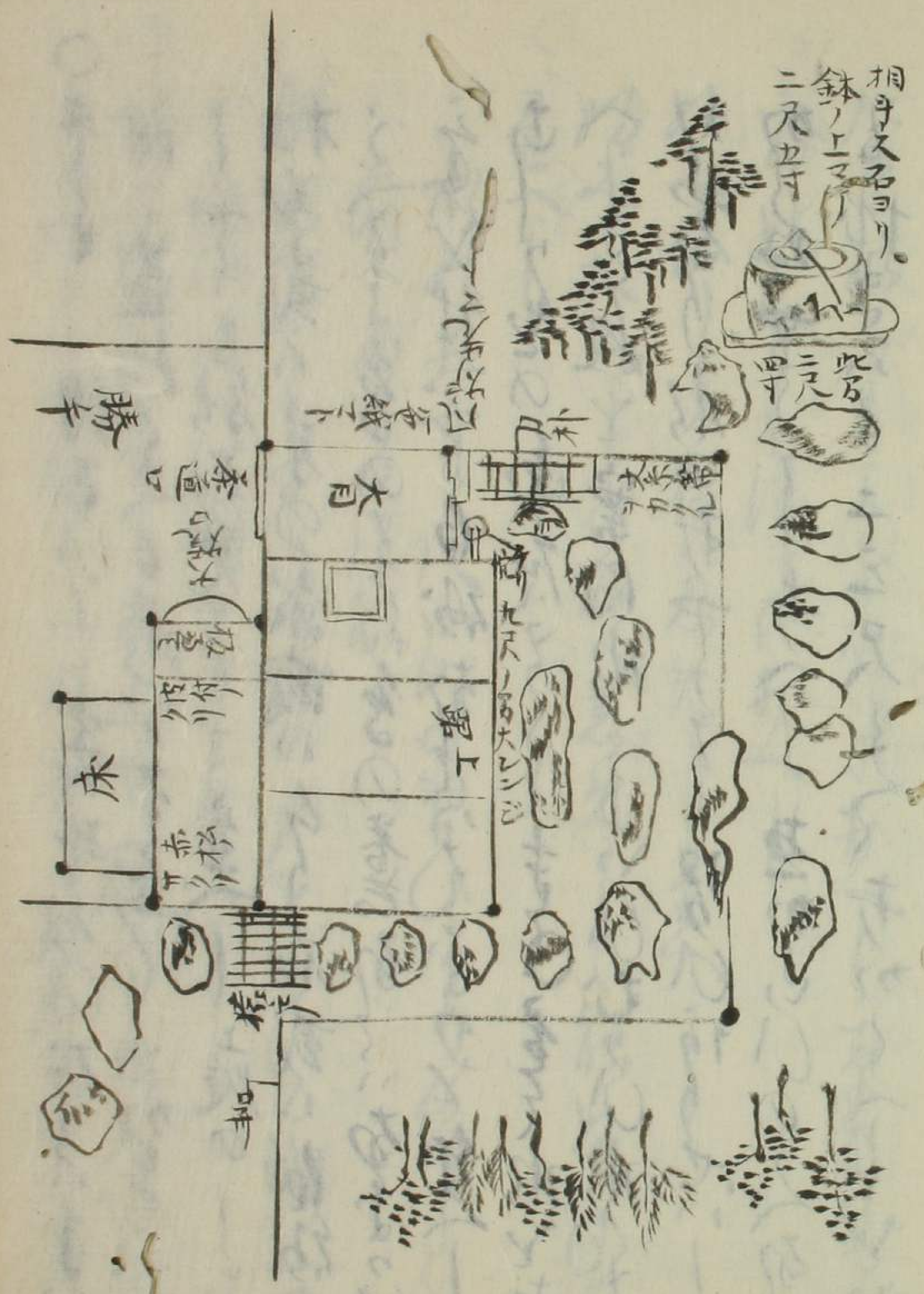
つねに懐中にもよくきよめおくへし 御所なと
にさし出すへし
○亭主ハ明日の茶乃湯ならハ其朝明方ゟ
水を汲置へし かくりなるものにいかやうなる
ありひをも汲へし 水をきよめ桶乃中へいるゝに
どれかきとごとなけれせ晒布にて塵をとりて
汲置たる水一叶ばかりしてかきをつけを桶
いれて汲ておかきとの上にて汲へし
なを二三度もおしてきよふへし
○亭主ハ其日になりて月代なとハ早朝にすらせ
たるかよし 客来の時刻にいそれハこころ

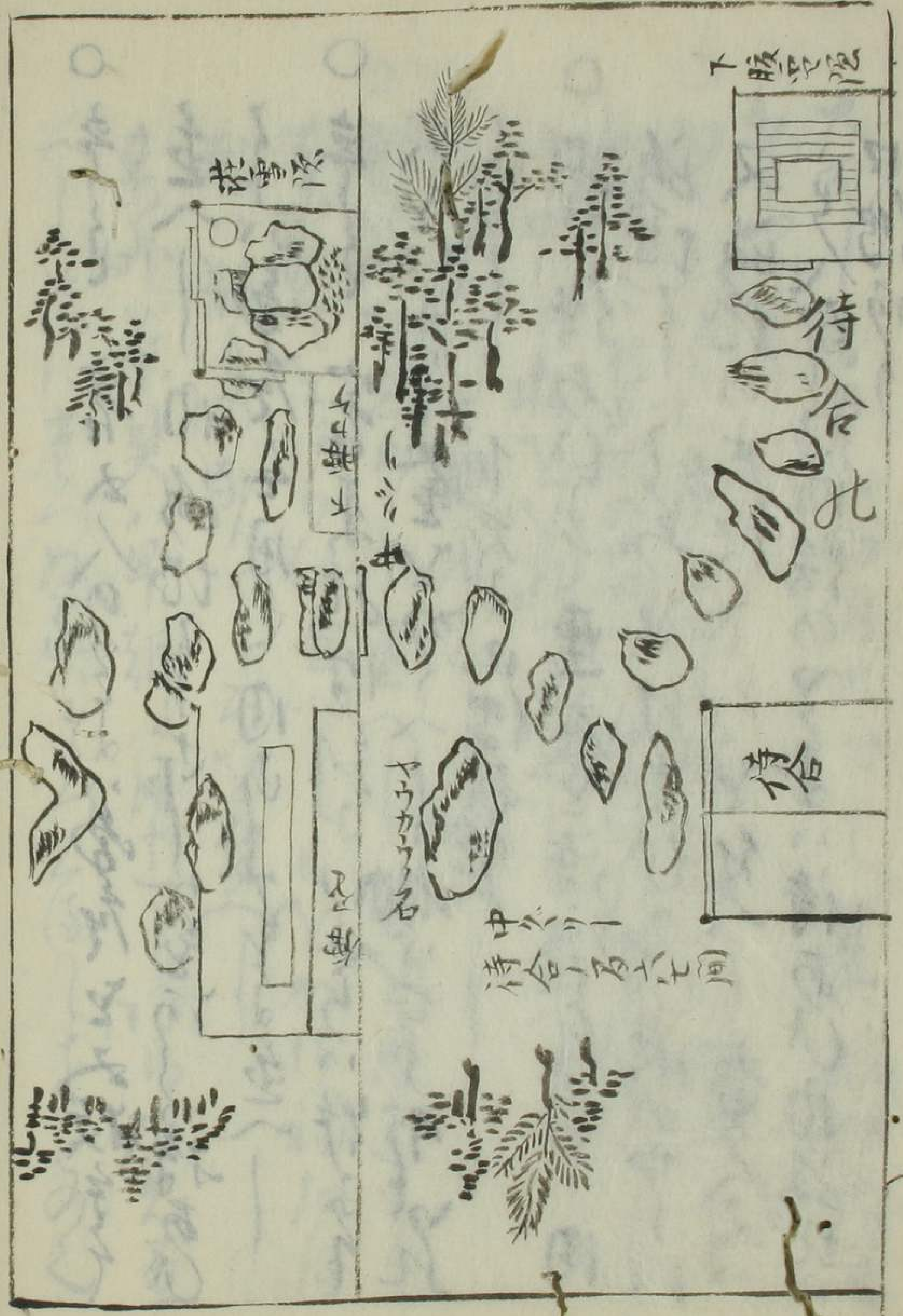
に候しまりのあり
○水指の水ハ早朝に汲ミ置たるよし水
能く溜りたるものなり客待あへ来る時より
蓋の上へ水をそゝぐべしとかきまはし申の
柄も落申し候べし
○常釜ハ五徳に能せ兄釜を候袋
かくべし水屋にかけ釜を用意したま
らせて置べし
○茶入小茶服紗にてはらりて其おし
お候も其いまゝ置べし
○茶巾茶せんハ古ほしに水をいれて洗ひ置

へ茶巾ハてり好きに水をあひて洗ふ
しとからよくのあり茶筅もあたゝめ候へば
洗ひ能くて洗ひ申よくのなり又板
おも洗ひ一二度もといいれ申さなかし
釉のある物よと用へし白竹又ハ古き竹の茶
筅ともちふへし茶杓ハ古今の物なりむかし
尭王より二女あり帝舜にめあはせ舜崩じ
て二女かなしひて泣涕地に落ちて竹を染
たり茶杓これなり
○炭を洗ひとりてこまかなり湯に炭置
いれ置へし其後茶釜を用へし名に好くへ

火たしも冬ハ柄杓火たし　其ハ風炉火箸
きるへし
○すミとりに炭を四ツ餘り添へし　灰さし
白炭又ハ色炭の品しなみいれ当家もなし
作口ニ水をいれて志めし　置へし
○薄茶ハ一通用意し　置へし
○色箱を志めし　置へし　色を用意して
菓子器をならひ置へし　日をかけ花たて
色ハ散もの菓子ころを付へし
其外菓具ハ平朝ゟ用意しなら大先置
へし　後に茶入ぬぐひころ添しおこそのこ

○亭主　客五人のときハ角座を又枚ならべて
置へし　内路地をさしたるをならハ持あひ
のハ角座を用ゆ　内山しつをならべ置へし
○亭主　客来れは約束のならハ灯をみて
火をいれて釜をかけへし　水ハちやう所をいれ
てなし　下火の口伝あり
○客待あひまて連衆を待合せへし　内
路地にうろうを付てむかひ水のやうに
又路地の戸にてころを付へし　貴人又ハ
主人前との法のときハ待あひ内路地ニ
口伝あり


鉢ノ上マテ
二尺五寸
大目
茶道口
勝手
床


待合
北
待合

○亭主も侍あひ了客起ひたつぶハ手水
鉢の蓋おこへ水を出ぶくとかまと承む
しやとも能志見して出へし庭のしよ
松葉或ハ木の葉或ハ又り石或ハ白砂の
うへ了り色のも掃除の善悪あるよく能
浄除と付へし白砂あでハなおよあめと付へし
あしりもとの内庭まて之を出て水とあ
へしこれと案内水ともいひむかひ水とも
いふ有り水の打やう了り習ひありせいし
かよ程やう了打へし趣かいのくあと
も地ぎハ二三尺をく打かくへしとか

た無於下もよ打ち茶打へし草木あらハ
戸外あとしほとに打へし
路みおしの石ハ志見して出へし
路み石ろしの石ハ志見して能々ひて
出へし
水打やうハ四時の習ひあり了りし
前に出もう代
打水をうちて路地の草木をゆひの訳りこり
右ひ候ほとに明らせて出へし
○客水打音も出へて庭のうち志へりは
その主とも内くハ上客と趣客へり了

久しく一礼致して通るへし
○客 躙み出し外石にて手を付まづ久
戸をうしろ二ほど明て入かしこまり行て
亭主をふりてしまひ 御亭主を見まい、
よせてそのまゝ 座しとかまへて 座へ一礼して
茶の湯し
○下客跡続き戸のかきがね掛くへし 上客
会釈いたし跡ふりて亭主のうへ 座敷
改へ一礼して縁の上
○亭主も 客揃ひあひて御案内いたし
へ一礼して それにつゞき 手前とりのかりさ

御茶も参し 炉前置合拝見もよし
○客 よし やとまての時 前よりまかられ
和やかさしみえてし水屋前より参
御茶ほどに時候へし 茶をもよし時を
亭主もの うしろなる様子その案内をうかゝへ
参りへし
○亭主も 庭へしちめの時よく見計ひを
しかつひて縁より跡地下諸の音の走
づりきこゆ御茶やうやく、御かみ戸を半
分程明て中ぐりの口へ行
○客 さしかけ立ちありて亭主にむかひ

一礼は有へし
○亭主くゞり戸を明てくゞりうちより
客すゝむ時て一礼あるへし
これを相對面謁といふ
○亭主もまづにじり上り迄さし行て戸を
露地をろしの石のうへにかゞりて戸をあけて
明て舗居たゞみのへりとまで
ぬぐひおくぬぐひ戸を志めて大の人を
篇にてあふひ跡く志けり御路地の
戸をしめてまへにかよひゝゆか床ぬ
門棚等おなじく茶ならびにおよぶ事を得へし

○新りゝみちよハ明り海で只浅海で風炉之
海どにをたきかくへしうへの明りられを
みすふて明かきく亙へし明られの際
そハ心つとそそして火を重事なり
○客中くゞりにて亭主と一礼して又か
のでしくおしつきてまうしでかり居
を至て志日あの能尺行もせぞ近へし
亭主ハかよひへゆまでかきを拘或ハかゞり
むてのもしれあしかれハ寄をれ事を
何りそぬくいりてハ本てまこ
○客 上客分 無客くいりて中クなどを何い

さいはりて入へし　すくにかけり置候
行戸を明てうちの茶わんかきの袋
帛の紐をやうにところを付へし　扱水の
ところ戸をしめて水指へ行てすゑしひれ
ようしてありしれをはみ引中をされ水指
の蓋をされて茶わん入水を居をひて引
やうの柄をとりはて柄杓をかけし茶へし
石炭錺ハ右を反にて入置へし　扱かたつきの
さかい行さしの柄を刀をもにりけ戸を明てに
おりあうはを見よくあそせし並て床
前行を物を反へし　釘の折やうに

うしろを付へし　川法のやうに一文字風炉大
ぶり中ぶり柄杓にても能おちくたるさし必
人のたつねるものあり　扱棚あれは行て師
とみ候へし中板の汁の折やうたて付の柄
のやうに風炉先はりの仕やう前にたし
うしろを付て炉中にまさを付釜の蓋
やしを入てぬり候ハしの火きぶ程にへし
風引るの炊よいハ引中てに水をとい
れてあとのをて水指の蓋のくうり
並へし風の炊たしとはぬきそめて
○土庭のうちのちり究のゆしのをとをりやう

木の葉のいれやうなどこゝろをつくへし 敷
寄麗にいりて印に類するの加候事也
いり文字を能みがきて かく候へしをたゞ
きのうらにうちをつくへし

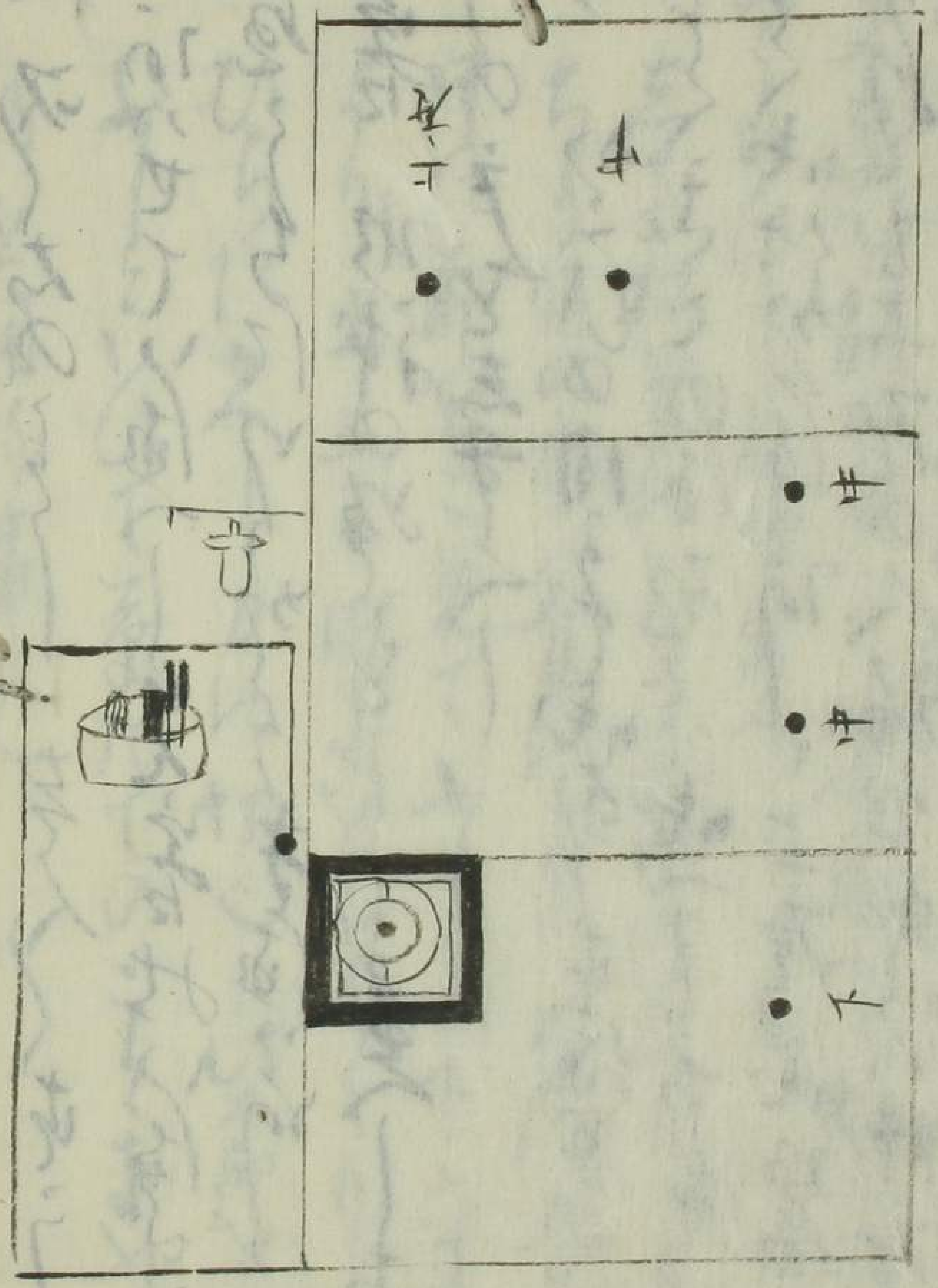
志ほ松茸ん三ツの口傳あり
ちり穴の串ハ青竹にて長さ九寸まし
中に節をこ残て かしらは下寸節
より上三寸はなをとるそくのとを
ひらにくしりて切し け節をたで
ぶすといひて菜たてのうそよめの
竹を用候事也

○客 次くものこゝろし 主人へさこうしつく
侍はハせていれ候へし 又客ハいろいろ座に
付ぬうちにいろいろ当座いかにしい

○下客 此様の如くとして重くし おちり
[illegible]の主人を志ゆすへし

○客 かこひの内にても何とぞ去候ハゞ此や
などくさこゆ候乎とて喰へし 下座も上座
向くもはかか候ハ何し、上座も喰候ハよし
志りれとも上座の人扨公あるハ中座より
分喰候もよし

三番叟大日祈りの圖



○亭主かよひの内へつくばひ能程ひらきて
茶道口の内にて三羽の音計ツミツ〆して
茶道口襖明て一礼有りて附茶相立出
いたさハいたし候へし正客一同ニ一礼有り
て上座な亭主へいたさハあ候へし客合
云流ふりなどの多かりし
○亭主あいさつをみて見れば挨拶やう
に又い掛かくしかゝぬやうにして礼義を
まづしくしし形のやり候りりえづかし
客のこころもゆつまりとお候やうに遣
し茶の事て

○下客分亭主もとへのあいさつハ志ねておく
ともの事なり切先なる候亭主も承れバ下
座にてもあいさつの挨拶やうハ仕かた候
事なり並て茶のあいさつハ云葉ふなげよ
ハあり、

○亭主も　あいさつしてすゝみて炭とりゝろく
持りでかりにくるまその補のなせほどにし
客の方に置　扨かげりまた候炭れをた
のみにより大く持くてかまゑてのこへ
置火ざしをとりて柄を向てへゝせて炭
ぢにかきを置三羽を炭れと炭炉ちとの名

に置　扨釜補をまはし　中柱をさし
客のかゝふ置合んをたのみにより　たの
みひらにくきをたらくをたをかく候た
とむりあへくきをたい客へかく候
くんのくきをやうしも上客ふ座なり
よりてしたたの遣ひ候事とは附
を中柱のかゝふ上客候座置へまた
をあへかく候

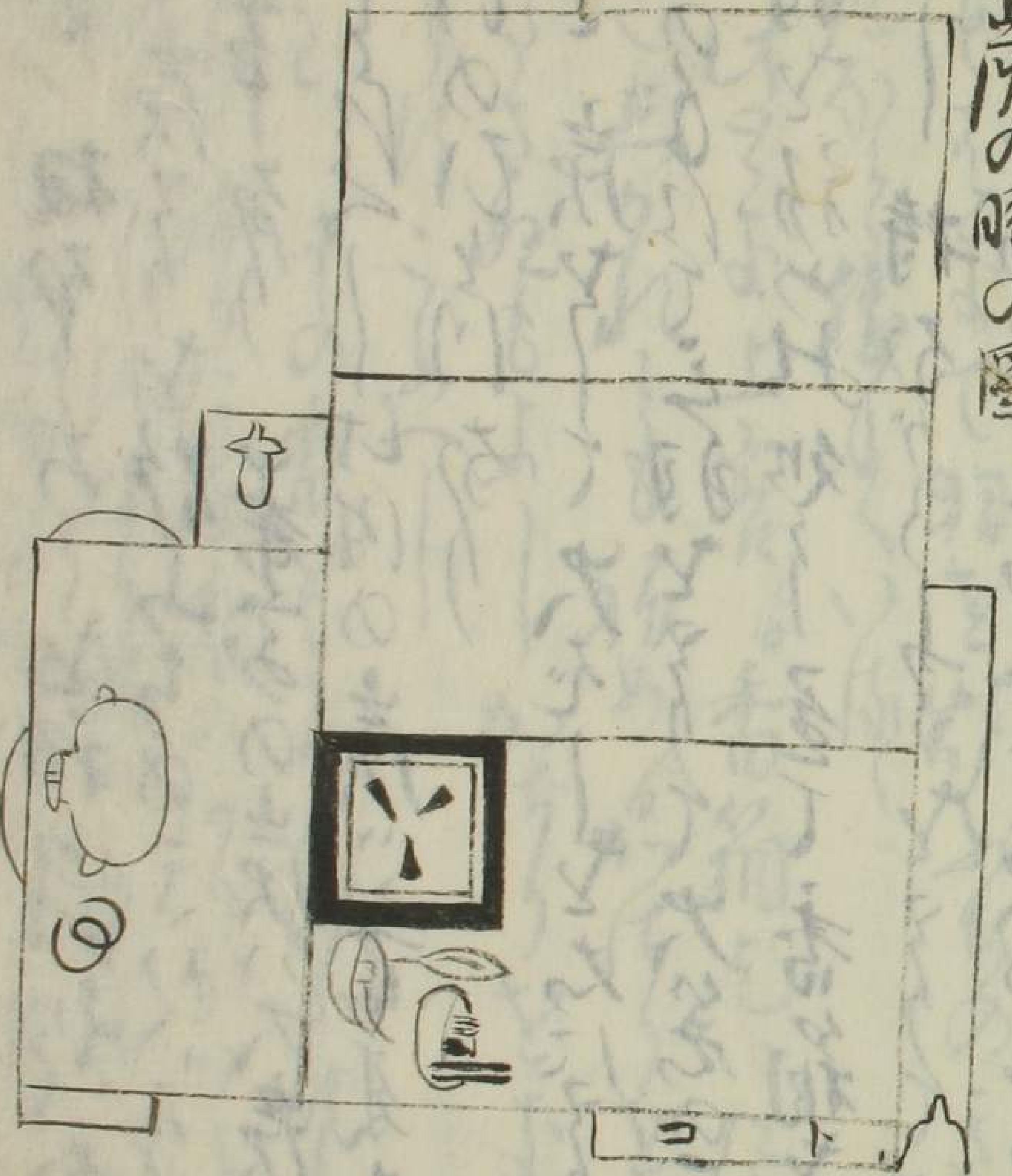
○亭主も　釜をあげ候

○客　亭主の釜をあげ候とま炉へちり候
まて先炉中のきをまいなる候神をゑむ候

○炭のはいさりなをへし
○亭主 釜をおろして其付の柄のさはく
しせ釜てふくさをとりて釜のそば
ふしをく 大たの道ひなし かはに
報炭をそはによ 無客炉のきはくちゃよ
閣きアるべし
○亭主 火箸にて下火をあをしかろく
を炉ぶちのきはへよせ白炭を炭とりの
くはかりに直し灰ぢじを以て灰をそは
ならされ灰に包んとる事なりかろく
の内まてならしとこ竈と灰を出かよ

せてそれをとりいて灰を出し仕事あり

炭の時の図



○亭主　扱ひろくを初め其外なをし
置て炭とりを炉ぶちのきはによせて炭を
出座事なり　並びの出炭ハ大炭にて
あらためへし　けはの炭ハあきま成所
いれりのひとつなり

○亭主　炭をして火だしを右にまはりたく持
かへ左の手にて三羽をとりて火箸の灰をとくら
ひて羽を初めより置て香箱をいだし
火だし持ながらふたをとりて火だし
にて亭主物をもたみて火の夜をかくれよ
ちりかゝらぬ処へ置へし　扱香箱の蓋を

して炭の所へ置く　扱羽をとりて炉ぶち土壇
後てとまて羽を炉ぶちのきはに置て
炭ハかく結ひく所

○客　はこより上客香箱をいだして見る
事になれる初めより客かゆるもどりは
先づ香ばかりもよし　かけりをよくたるのは
かへりにこへし

○亭主　中の香をとりていだしもよし又
やきりおりた香の行ありかくいだして
も所しかくれ物がふしきにて炊て
いだしへし　焼物金物の類ハ其の形にて炊

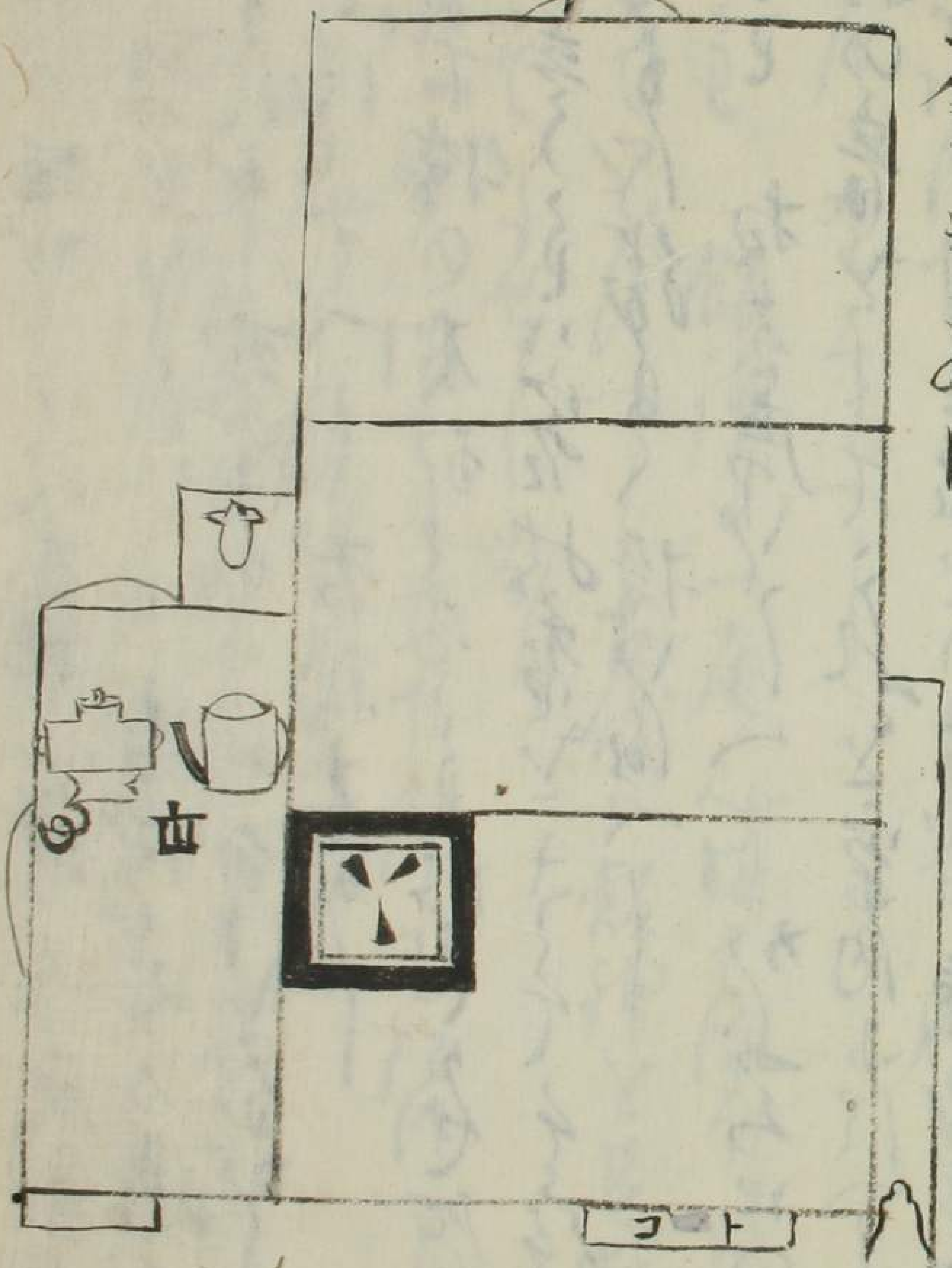
くひてかへし
○亭主香箱をとり坐かへり炭斗を
持出片口ニ水をたつぷりいれ蓋の
上ニ茶巾をたゝみのせ片口の手の方を
右の手ニ持大目の敷居中ニ居て釜のさハく
ありて釜を爪掛之竹との敷居中通へ川
よせ布巾を持そへてはたみかへし片口ハ
右ニなをして右の方にふたをのけ釜の蓋を
片口のふたのうへにおいて布巾を左のゆびニ
はさみ片口の口ニ付て持そへ右の手にて
釜ニ水をさしそへ布巾にて釜の口を

ぬぐて片口のふたをかへして布巾をハ
片口の中へいれ釜の蓋をとして片口を勝
手へいれ釜ハしらんをひきて炉のさハく
ありよせ釜をかけて釜の羽にて釜ハ
ぬらさずとも炉ふち土瓶にてもさすて
勝手にまよ志けり羽を勝手へいれ
みて
○客 右の香箱をかへし 亭主かひふに向
いさいの後もよし 相亭主ハ客にむかひ
ひもと茶会いとまことふあいさつかし
○客 水指ハ次第にかへしぬへし

○客衆入来ありて座をはなれて茶席
通るへしかよひ口のきハを始終むかふに
座すへし
○亭主はしまり或ハ料理なとにつまるの
ある事も何あるへし茶湯やう成附す
釜香炉なといたしてはうをかいいたすへし
香炉の灰の仕やうハ香炉によりて灰の
仕やうかはる事なり
大法始さ灰にしてすつきりと茶め代
持てはみ火の上ふみの紙一重おきて
紙のかいろにありてやき始めて灰をは

へし

釜かさりの図



○香盆にハ　炷からいれ香匙　火匙　又ハ灰おしを
くみならせいれへし　香づゝみの紙ハ奉書
或ハうすよう或金銀しめ紙をたゝかく用り
おりて使ふべし　香箱もよし
○客が雨持の本道を亭主にきくも尤なれども
し亭主ハ客が香をきゝてそ候ふて
盆をもちて縁まで持出べし
○亭主　相客席いたるへし　かこうくちの内にて
三羽の音をしてこれを案内申へし　扨
かこうくちを明て膳をハ亭主持出て上客
より出候

○上客　かよいにおさせ付ら候へば　おなじのハ
さ川所候へし　下客　膳をとりあげて
上座へも出候へし
○亭主　飯鉢よ一座へ持出候わずに飯を
たおて出候へし　古代ハ飯鉢を足打に
のせて出るもあり
○飯鉢一座へ持ちて下座へとに候へし　下
座がかよひより飯をとるへし
かよひ又一座へ持て候わずとおて　下座
よりとれへし　下座よりをくりて上座へ
を出候へし　相伴酒出候へし　酒も

はくづよふそそかりて一座ん済て後なれども
亭主 いそぎいでし何座へし
○客 下座より膳のもよふをみてかよひ口
し上座のもの前を次々に下座へ出て合図
指湯をいたし折ふしにむかひ水つぎ湯のこ
ぼし香せんをいたし亭主へ出すもよし
扨て数寄屋の内へかよひの戸を亭主にいれ置
やうにいたしへし又外ふくりてかよひ口に待せ居
何所へし 下座湯つぎをかへいたし膳も同前
○亭主 膳を何もとを後菓子いたし
へし 楊枝ハ酒うし出すへし

○亭主 此間に中水おへし 水指の水もいれかへ
蓋をしてこあし出へし 亭主ころんで此次
いきるをし 出し かきとのそくはかりするい
菊よりに手いたを 床置外内を出し座に
○客 下客茶菓子いれを取てそぬぐひかふる
口のさんくよせて出へし 数寄へ出し
かきへもへし 此時先後の口のかくへちへくちくロぢ
かしおかく人々きもやへし
茶席の折補ハ 角切折紫 或ハ松の
座よめ或ハ此代物の平折紫 或ハ春紫
或ハかよふ何もせ 或ハくりいろ 或ハ飯屋

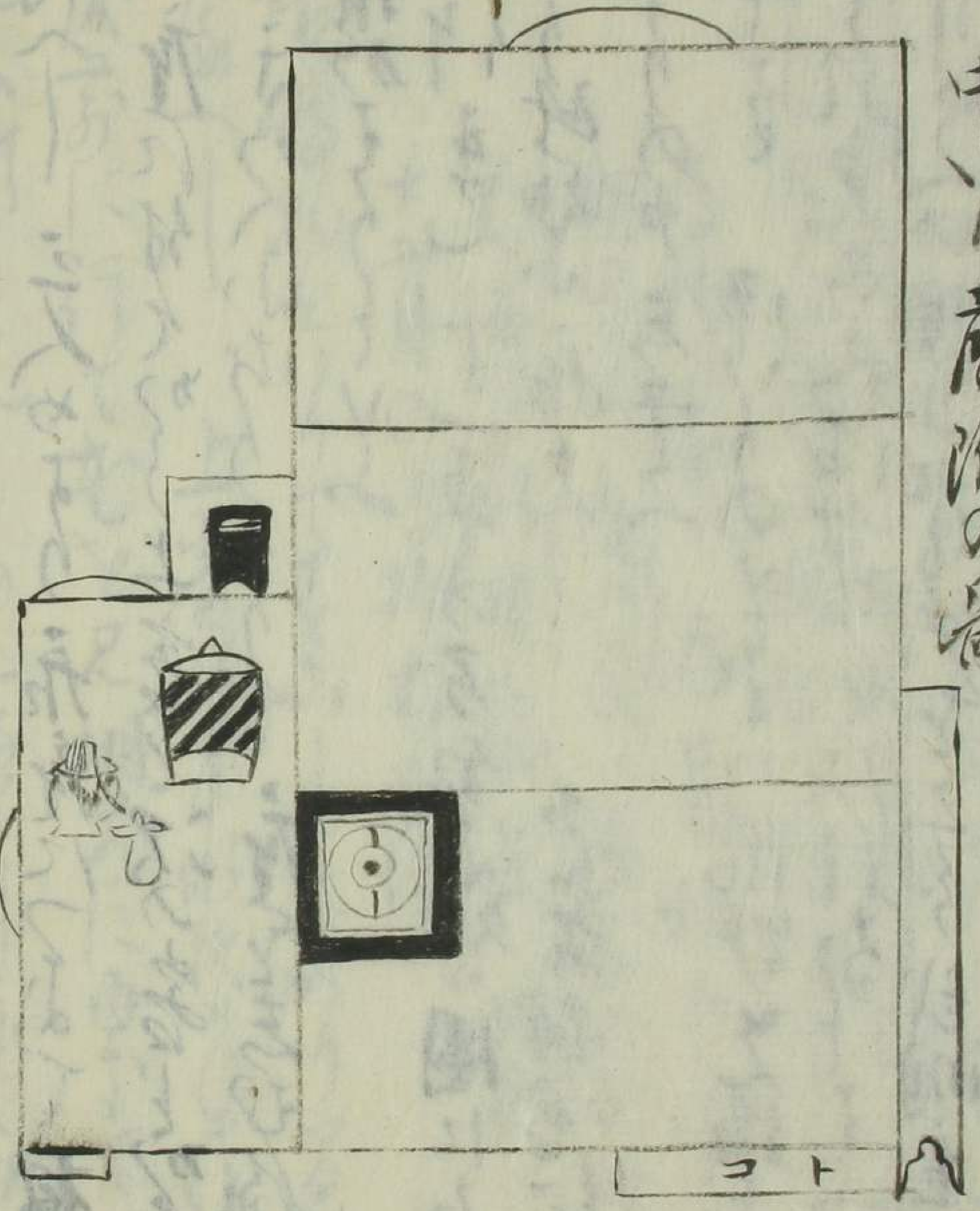
差ちりの類いづれも今ハ無用なり
たのまざひ志候へし　先達いたし事も候
て　古代を志たふところ今ハやきり角切お
杉桶いづれへし
○紙ハそたゝみ置杉桶なりいろいろいろにし
又ハ黒ぬりに志て候物なり　律の道具なり
古代ハ杉にていでし事也
○是非いづれ事も何候へし　物ふよりていづれ
へし
○芦柳の　杉桶といふ物有りなれも古代何りし
事也　落葉日記ニみへたり　律の様とこなふ

杉籠を紙にてはしらくぬりて角あかとの
なりそれを清なびていふ也　今ハ平杉桶を用候
事なり　茶此湯ハ専ら禅律なといでたる
也なり
○料理ハ時節の物をたへべくばけ何より
其年の類たるべからず由宗の物たるべき
かくし　其もる言席へかろくよかるべしと利休
の日記にみへたり
○瓶かき物をゑべしかきひの肉とちよれさといふ
水さしを中祖十五めりてのき薬入茶入
水指の左の方に飾り候とまくべし　相陽

のにえのほどとうかびて庭の内の帷などを受取
まぜ能書はあひを見て鳴ましよも宗り
して其うせの鳴物あらはるへし
鳴物の事　春夏秋冬のとりち
朝の会　夜の会　初客の会　時分の会
春宮の茶　月夜の会　暁夜
十二月の鳴物大小鳴
○客鳴物をりてききしむかりあると云て
い遊へし　上客より水指をとりて遊へし
床前に行て花を見棚前に出て帰域
見大衍まろしの一座て床て次の客と

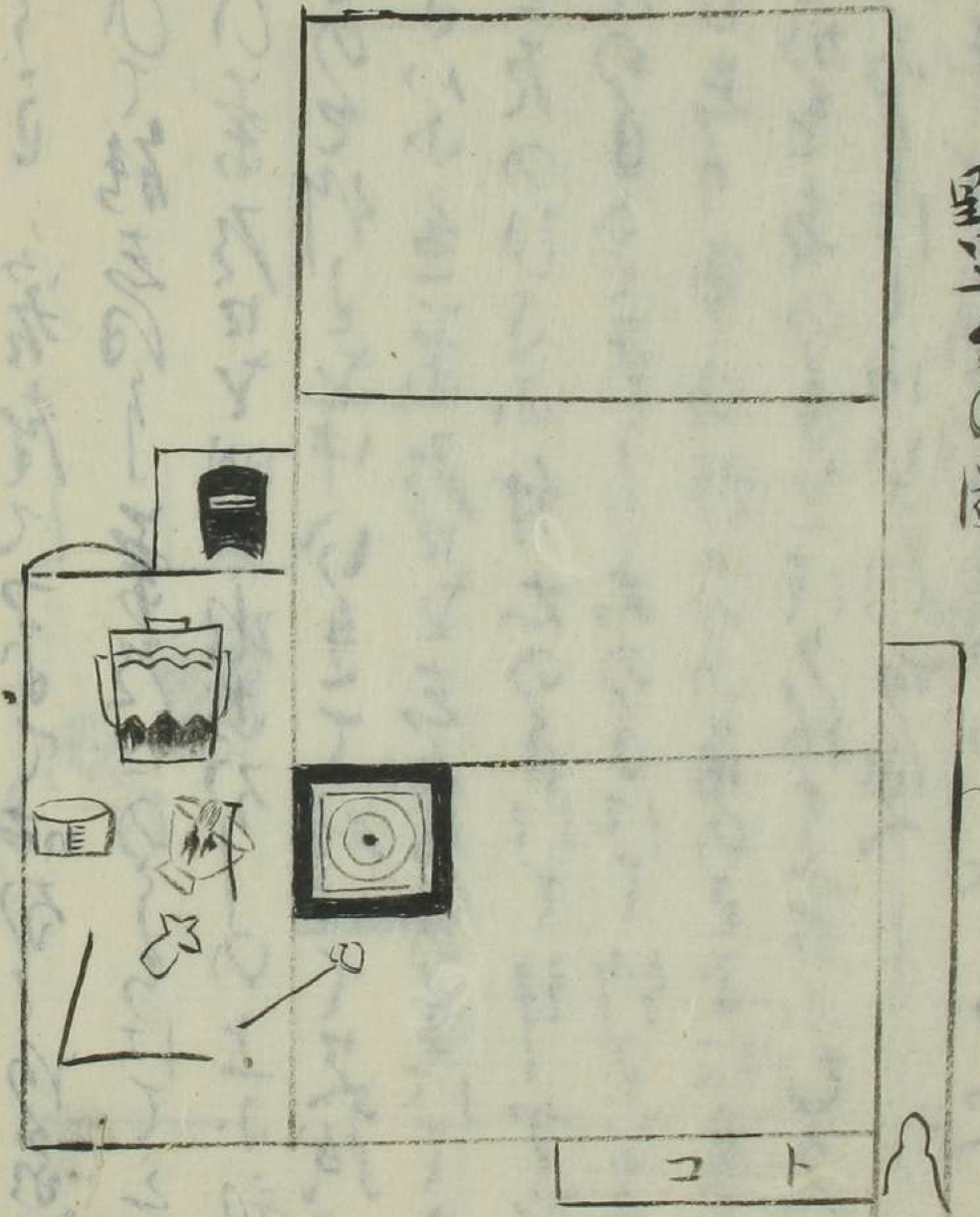
待へし　三人めより床座につきて相済て
も床に付てかうり上客と次の客とかうまて
のさびくおだつりて　床を去ても流されと
床かきりといふ
大衍まえど一座の所まで如の圖に白がし
行り所楽不床へし　下客あ分にちり
かりの戸左手みへし
○茶立てとて中りのとまりハ風炉さん後とのまを
其れ見出しほどのをだれ向とそへし立
へしうへの明りれも右々とらう計明座へし

中ツリ座附の図



○亭主　客座につきて咄なと何ゑとうか
げひて能ほとに茶入口のうちにて三羽をつ
かひ茶入口を明て水こぼしの上にて引かく
をのせ竹を中に入て持いて又紙なとの
きれにて茶入口をしめ右の手にてこぼし
を左のひざに付右の手にて引やさとるまり
左の手に置し右の手にて竹をとりて
むかうへ置その炉ぶちの角のまゝ置に立て柄杓
をかゝ左の手を添て客にむかひ何も
ゆるゆると休いさ候様に申へし
○客　御手前ゆるゆるにと挨拶申へし

點茶の圖



○亭主も　茶せんをハ左の手に茶巾の手返
居茶碗九寸もかりさけ持ちながら手前
のきて其茶入をハ右の手にてとり左
の手ニ右の手をそへて居茶碗にそへ袋ミ
ちもとをほとて袋を明て茶入をもち
かくれつゞし左の手をそへ下に其袋の左
済ミやうにして甲柱の前にくきと好くさ
ゞし好くさけばよしして左の手にて茶入を
茶入を好くさ持かへし蓋をとりて茶いきの
内と又蓋のうらを客のかたへ見せ候ふこ
まへし　茶に毒無き事行まてハ蓋のふち釜也

いろかをはそのまゝなり　扨蓋をとりて茶入を
ぬなおてたの手にて水指の左の手よの通り
こま置て茶の方に置へし
茶いれのとよ外茶入れ手よりてた
右の違ひなり
○扨ひしやくを右の手に取て茶しやくを右の
手にてとりかいさよをぬなよ又ひしやくをとれば
なて切て先はでも取なて茶入の蓋の上に
かいさよとりをもとも置へし
○扨茶筅をハたのあひ二つにて取て茶せんの端
長ておりの外を右めり夫とハ置なかこう

とゆきて又茶いれをもおしなちくて
をなおたの手にて茶せんを茶わんを茶
せんのうちにかこうりまざハなおりに置と
付て茶わんにまへたの手にひしやくたの
手にとりし　ひしやくを右の手に取かへて
ひしやくにて釜の蓋をとり竹ふたの上に置
ひしやくにて水指の蓋の上をなおて茶巾をハ
蓋のうへに置ひしやくを取しに付　引ゆをとる
て湯をすくいりと取て茶わんに入釜の
蓋をなおて引かへを竹ふたにかけ置と
中蓋といふ

扨茶せんをとりて茶わんハそれ茶筅切
として茶せんを茶わのうちにかきまぜ茶
巾をとりて水こぼしの上にてしぼり茶
わんをしづかにふき茶巾をはさミ三つにおり
又二つにおり又ひとつにおりて釜の蓋
のうへに置
茶巾をやそとりれ枝の蓋の上に置事
ありつるハ釜の蓋のうへに置と去なり
利休の袖日記に中蓋の附の茶巾を
釜の蓋のうへに置へしとみへたり茶
巾をかさね位をおくへあり

第二十四